機械仕掛けの世界

下弦　鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
機械仕掛けの世界

【Ｎコード】
Ｎ８７２０Ｃ

【作者名】
下弦　鴉

【あらすじ】
機械だらけの世界に疑問を持った主人公、皐氣翠がその世界を変えようと動き出す！

プロローグ

俺らは自分達が生きているこの世界を、信じ過ぎているんじゃないか？　裏の表情を、本当の姿を見た事もないのに、こんなんでいいのか？

決められた生活。縛り付ける規則。創られた人生。本当の自由を手にすることなく終わる一生。

もし、心から自由を求めるのなら、そこから変えていかなければいらない。

自分の生き方に疑問を持ったなら、今在る世界に疑問を持たなくちゃならなくなる。

もし俺が、そんな疑問を感じずに生きれたのなら、人生の歯車は狂わなかっただろう。

それでも俺は、自分のした事に誇りを持っている。胸を張れる。

俺と同じ覚悟ができる奴だけ、これを開いてほしい。読んでほしい。

だが、誰かの手に渡ったこれが開かれたとき、多分俺はこの世にいないだろう。

だからここで一つ言わせてほしい事がある。

世界に疑問を感じたなら、己の足で立ち上がれ。そして歩き続けるんだ。止まってはいけない。振り返ってはいけない。迷いが生じるぞ。だから歩き続けろ、己が信じた一念を――――。

プロローグ（後書き）

はじめまして。初連載ですし、書き始めるのも始めてです。まだプロローグだけなのでよく内容が分からないかもしれませんが、これからよろしくお願いします。

そしてもしよかったら、感想など書いていただけると嬉しいです……。

1、狂う歯車

1

「――――皐氣(こうき)。……皐氣！起きろ、皐氣！」

痺れを切らした教師が、机に突っ伏して熟睡している茶色い頭に向かって、握っていたタッチペンを投げた。それはきちんと授業を受けている生徒達に掠りもせずに、綺麗に茶色の的に命中した。なのに何事もなかったかのように、皐氣は眠り続けていた。まったく微動だにしない皐氣を無視して、教師は平静を保つために再び授業を進め始めた。

薄く、生徒全体によく見えるように作られた液晶の画面に、新しいペンを持ち書き込み始める。どんなに下手な字を書こうとも、その画面が綺麗に直し、色分けもしてくれる。それは、発達した黒板だった。その黒板に浮かぶ文字を、生徒達は机に備え付けられたパネルに書き込んでいく。これも黒板と同じような機能が付いている為、統一された字体が並んでいた。その字体を早くも全部書き終えた、皐氣の隣の男子生徒が彼を揺する。

「起きろよ、翠(すい)。授業、遅れても知らねぇぞ」

「んだよ、うっさいなぁ。あとでコピー、させてもらうからかまわねぇよ」

「誰のメモリー？」

「もち、お前の」

「は、やだよ。いつもコピーさせてばっかじゃん！」

急に黙ってしまった皐氣は、言葉通り死んだように動かない。困ったようにため息をついた彼は栄井(さかい)　陽向(ひなた)、皐氣の親友である。栄井はずり落ちてきた銀縁の眼鏡を掛け直しながらパネルの付いた机の右端を見て、さらに深いため息をついた。そこには小さな、本当に小さな挿入口があった。その上に擦れた字で『メモリー』と書か

れていた。メモリーとは、この学校の生徒全員が持っている電子チップの事だ。そこに全ての情報、つまり今まで習ってきたものが入っている。学年が上がるごとに新しい電子チップは貰えるが、失くしたり、壊したりしても新しい電子チップは貰えない。だからとても大切なものなのだ。

「なあ、皐氣？聞いてる？」

「聞いてない」

「聞いてんじゃん。無視するなよ」

「無視なんてしてねぇよ。聞きたくない言葉を聞かなかった振りしただけだ」

「それを無視って言うんだよ。……ああ、もう寝るなってば！」

「コピーさせてくれんなら、仕方なく起きててやるよ」

「最後までこの授業起きてたら、コピーしてやるよ」

「それ、やっぱ無理。だから無条件でコピーよろしく」

「だから、やだってば！！」

「うるさいぞ、皐氣に栄井」

思わず大きくなってしまった栄井の声に反応して教師が怒鳴る。その顔は、誰から見ても怒っている事がよく分かるものだった。

「す、すみません」

慌てて謝る栄井に対し、皐氣は狸寝入りをしながらクスクスと笑っていた。それも、栄井の癪にさわるような笑い方で。その憎たらしい友に言ってやった、

「今後一切コピーなんかさせないからな」

「卑怯だぞ、人の揚げ足取りやがって」

自業自得だ、と言った栄井気持ちは少し晴れた。電子チップのコピーは面倒臭いのだ。それを毎回毎回、当たり前のように皐氣は頼んでくるのだ。頼られているとも取れるので、少し嬉しいのだが……。そう考えると、なんだか照れくさくなって、こげ茶の髪をもてあそんだ。

授業の終わりを告げるチャイムが鳴る。最後まで眠り通した皐氣

は教師に呼ばれて怒られているようだ。そのお怒りが止むまで待っていると、皐氣が悪戯っぽい黒い瞳と、栄井の蔑んだ錆色の瞳がぶつかる。

「先公が言ってたぜ、誰かにメモリーの内容をコピーさせて貰えって」

言葉を失う栄井に、とびきりの笑顔で悪魔のような言葉を吐いた。

「つー訳で、コピーよろしく、陽向！」

結局栄井は皐氣の為に、今日もコピーしてやるはめになったのだった。

＊

漸く全ての授業が終わり、皆帰途に着く頃。まだ教室に皐氣と栄井は残っていた。それは、今日皐氣が寝ていた授業のメモリーをコピーするためだった。六時限中四時限も寝ていた彼は、それでもまだ眠いらしい。う～んと伸びる彼の後ろに、綺麗な長い黒髪を持った背の低い女子の姿があった。

「また栄井にコピらせて貰ってんの？いい加減ちゃんと授業受けなさいよ、翠」

「うわっ、出たよじゃじゃ馬娘！」

「うわって何よ、うわって。それでも幼馴染？」

「かんけーねぇだろ、ウザいから消えろや」

「ハァ？それがレディに言う言葉？はっきり言ってあんたの髪の毛のほうがウザいわよ！」

ボサボサに伸びた皐氣の髪を引っ張りからかっているのは緋搗（あかつき）美津紀（みづき）。本当に皐氣の幼馴染で、一時彼女らが付き合っているとの噂が流れるほど仲良く見られるが、彼女らはそれが不服らしく、仲がいいと言われると怒っていた。

「あ゛～！もうやめろ、鬱陶しい！」

「鬱陶しいのはあんたの存在よ！ねぇ栄井」

「えっ！……そ、そうかな？」
コピーに夢中になっていた栄井は、急に話しかけられ戸惑いながら答えた。すると緋搗は栄井の前の机に腕を組んで座った。
「そうよ！栄井は人が良いからそういう風に言えるの。翠はただ寝てるだけで、勉強なんかしてないじゃない」
「寝てるだけじゃねぇぞ。ちゃんと起きてる授業もある」
「体育と美術だけじゃない！何？将来バスケしながら絵でも書く訳？」
そう、ただ唯一皐氣が得意とする科目はそれだけで、他はいまいちだった。中でも体育は飛び抜けて良く、一番好きなのがバスケであり、彼の長所でもあるのだ。背の高い彼は、頑張ればダンクシュートもできるので、体育のチーム分けでは、彼がいるかいないかで勝敗が決まるほどである。その飛び抜けた運動能力の代わりに削られたのは知能だったのだ。
「そんなこと頼まれたってやらねぇよ！お前は牧場にでも行くか？」
「ありえないわよ！何で牧場に行かないといけない訳？」
「暴れ馬が放し飼いにされてんだ、当たり前だろ」
「暴れ馬ぁ？そんなのどこにもいないじゃない」
「いるよ、俺の目の前に一頭」
意地悪く言う皐氣の前にいるのは、明らかに緋搗だった。それを確認した彼女は、皐氣に飛びかかっていきそうな雰囲気で言い返す。
「だぁれが暴れ馬よ、この運動馬鹿！」
「誰が運動馬鹿だよ、闘牛が！」
「闘牛って……馬じゃなくなってるじゃない！牛よ、牛。ホントありえないんだけどっ！」
「じゃあ、馬ならいいのかよ？」
「いい訳ないでしょ！第一――――」
「でっきたぁ！！」
二人の終わりそうになかった口喧嘩を止めたのは、栄井だった。

二人の仲の悪さに飽きれつつも、黙々とやっていたコピーは全て終わった。解放感が彼を包む。うーんと伸びをすると、縮んでいた背中が重かったのがなくなった。そして帰り支度をしてあったブルーのバックを掴むと、皐氣達の間に割って入り、本日最高の笑みで、

「さあ、帰ろう！」

と二人を急かして教室を後にした。

「ま、待てよ陽向！」

皐氣達も慌てて栄井の後に釣られて教室を出た。まださほど遠くない場所で、栄井はダンスでもし出しそうなノリで長い白い廊下を歩いて行くのが見えた。そして、振り返ると早く早くと手招きをする。もう暮れつつある夕日が、彼の右半分を紅く染めていた。

「待ってよ、栄井！こんな奴と一緒なんてやだわ！」

緋搗が栄井のひょろりと高い背に向かって走り出し、その首に抱きつくと、栄井は前のめりに倒れそうになりながら、楽しそうに笑っていた。緋搗も笑いながら、皐氣を急かす。仕方なく彼らの隣へ行くと、栄井が言った。

「翠、アステレイア様に呼ばれてるみたいだよ？」

「あ、ホントだ。あんたまたなんかしでかしたの？」

「……ゲッ、ホントに光ってやがる」

悪態をつく皐氣の目には、左手首に付けられた銀色の腕輪が映っていた。それは誰もが持っているもので、名を『ジュスチセ』と言う。何故そんな名前が付けられたのか、説明をされた事があるが、皐氣は忘れていた。そのジュスチセは、小さい頃から付けられていて、付けている本人に何かあったりすると光る仕組みがあった。もっと事細かく、教師は言っていたのだが、良く聞いていなかったのでいまいち良くわからない物体だ。

そしてアステレイアとは、この世界の善悪を裁く電脳機械である。たかが電脳知能だと思ってはいけない。そんな事を思ったら、反逆者として捕らえられるだろう。それくらい大切で、かけがえのないものなのだ。

「これで何回目？前も呼ばれてたじゃん」
眉根をひそめて、栄井が問う。それに対してサラリと皐氣は、面倒臭そうに言った。
「別にかまわねぇだろ？どうせは機械だ、生身の人間じゃあない。だったら、逆らっても怖かねぇだろ？」
その言葉を聞いて、思わず二人は笑顔を引きつらせてしまった。アステレイアの事を悪く言う事はこの世界には許されない事だ。人の基礎を作るとも言われるアステレイアは神に等しい存在なのだから。その神を皐氣は愚弄したのだ。二人が固まってしまうのも、無理はない。
「何固まってんだよ。機械なんざ、気にしなくても良いだろ？」
「気にしないほうがおかしいよ！アステレイア様とゼウス様は僕らが道を踏み外さないように創られた、最高のプログラムなんだよ！？」
「あってもなくても、どうせ変わらねぇよ。こんなんで縛られてるから、誤った道を進んじまうんだ」
焦りを隠せない栄井と、何かに脅えたように周りを見回す緋搗。その二人をあざけ笑うように皐氣は続ける。
「大体、こんなもんなくても俺らは生きて行けんだよ。なのに昔に創られた機械信じて生きるって事より惨めなこたぁねぇよ。アステレイアもゼウスもいらねぇんだよ」
世界の要である、ゼウスまで愚弄する皐氣を栄井達は、信じられない事態に驚きながらも、深呼吸をして息を整える。ゼウスもアステレイアと同じようなものだが、比べ物にならないほどの情報を管理できるゼウスは、なくなってしまったら全世界は機能しなくなるだろう。それらがなくなっても本当に生きていけるのか、疑問に思う。
それを見た皐氣は、仕方なくジュスチセに爪先で触れた。
「何してるの？まさかアステレイア様の呼びかけに応えない気なの？」

「黙ってろ、見てりゃ分かるからよ」
皐氣が不安げにしている緋搗を黙らせて、じっとしていた。何が起きるのか、全く見当もつかない緋搗達は、ただ黙って待つことにした。
そんなに待たずに変化は起こった。皐氣のジュスチセから細い光が上に伸びてきたかと思うと、その光は人の形を創り、少女漫画に出てきそうな髪の長い美女の姿が揺らめいていた。
「登録ナンバー１３８３、皐氣　翠。また貴方は、私に背くような真似をしましたね」
口の動きに合わせて音声がジュスチセから流れる。そのせいで、本当にその光がしゃべっているように聞こえた。光の人は無表情で、さらに言う。
「この前も注意したはずですよ、翠。貴方は何故私に逆らうのです？一人はぐれた子供は、家に帰れなくなり、泣くだけですよ」
「はぐれたってかまわねぇさ。自分でまた新しい道を見つけりゃいいんだからな」
「それではいけないのです。皆が皆、自分の道を歩き始めてしまったら必ず道を誤ります」
「それも自分の人生さ、誰にも邪魔させねぇ」
「貴方の考えが間違っている事が分からないのですか？翠、良く聞きなさい。貴方の考えはとても危険な考えです。私の言っている事全てが正しく、それが貴方達の歩むべき道なのです」
雑音と共に揺らめき、消えかかったが、それでも光は消えなかった。
「考え直すのです、翠。自分の間違え直し私の元へ帰ってきなさいな」
「誰が聞くか。俺は、この機械で仕切られた世界で生きていく気はない」
「ですが、貴方達には私が絶対に必要です。いつかそれが分かる日が必ず来ます。その日を楽しみに待つとしましょう」

そう言い残し、光は消えた。口をへの字に曲げた皐氣は、複雑な顔をしていた。それにいち早く気付いたのは、栄井だった。

「どうしたんだよ、翠。顔色悪いぜ。……それに、『この機械で仕切られた世界で生きていく気はない』ってどういう――――」

「ごめ、ちょい野暮用思い出したから先帰るわ」

さりげなくちょっと微笑して、目の前で手を合わせて謝ると、皐氣は背を向けてそそくさと帰って行ってしまった。そのとき、心配そうな緋搗の藍色の瞳と暗くなった皐氣の瞳が合った。その目がいやに印象深く残った。いつも明るく、無邪気な光を宿していた彼の瞳があんなに悲しげに見えたのは、初めてだったから。

「待ってよ、翠！ねぇ、翠！！」

走り去っていく皐氣の背中に、空しく響く緋搗の声。狂ってしまった運命の歯車の音を隠すように、いつまでも耳に残った。廊下の曲がり角で、皐氣が止まる。そして、

「じゃあな。……また、明日」

それは遺言のように聞こえた。事実、遺言と言っても過言はなかっただろう。なぜなら彼らがまた会う時は、ずっとずっと先のことになるのだから。

1、狂う歯車（後書き）

やっと動き出したと思ったら、終わってしまってなんかごめんなさい……。

さあ、次回皐氣がどうなるか……まだ考え中です（汗

2、動き出す運命

2

一人ポツンと帰途に着きながら、緋搗(あかつき)は様子のおかしかった皐氣(こうき)のことを考えていた。彼は知らない。本当に、緋搗は彼の事が好きな事を。だから、小さい頃の言葉が冗談だと言われた時は、本当に悲しかった。けれど負けん気が強い緋搗は本当の事など言えない。だから強気で、嘘をついた。「本気で考えてる訳ないわよ」って……。

昔からそうだった。本当のことは親にも言えなくて、ずっと独りで抱え込んでて……。そんな自分が大嫌いだった。だからこれからも、自分に嘘をついて生き続けようって誓った。翠(すい)への想いも、封じ込めて。

そうだ！明日になったら聞いてみればいいんだ。同じクラスだし、席も近いし。なんだったらメールしてみてもいい。そうすれば分かる事なのだから。

「明日、聞いてみるか……」

声に出してそういうと、なんだか気持ちが晴れてきた。

でも明日から、皐氣に会えなくなる事を知らなかった。思いもしなかったのだ。

＊

皐氣が家の前辺りまで来ると、そこには見覚えのあるシルエットが家の光に映し出されていた。

「陽向(ひなた)……」

シルエットが動き出し、彼のほうを向いた。やはり彼の親友の栄井に間違いなかった。別れたときの学生服のままの姿で、彼は頼りなく微笑んでいた。

「あの……なんか昔っから翠って嘘つく時、先帰っちゃう事多かっただろ？だから……ホラ、なんて言うのかな……心配……みたいな、そうじゃないような……」

照れくさそうに頭をかきながらそういう栄井が可笑しくて、皐氣はふきだした。

「わ、笑うなよ。心配して来てやったのに……」

「お前に心配されるほど、落ちぶれちゃいねぇよ。別に明日聞いても良かったんだしよ。何で今日来たんだ？」

まだ笑い続ける皐氣を尻目に、栄井は真面目な面持ちで言った。

「明日じゃいけない気がしたから。明日じゃ遅いって、思ったんだ」

あまりにも切羽詰ったように言うので、知らず知らずのうちに皐氣の嘘の笑いは止まりった。彼は気付いていたのだろう、皐氣の嘘の笑いに。だから真面目な顔して話したのだ。

「僕ら友達だろ？何か隠してんなら言ってもいいんだぜ？……何に、悩んでんだ？」

勘の鋭い栄井にこれ以上嘘をついても、余計に心配させるだけだろう。それなら話してしまったほうが楽かもしれない。深いため息をついてから皐氣は、意を決したように話し始めた。

「俺が始めてアステレイアに呼ばれたときの事は覚えてるか？――そうその時だ――その時言われたんだ。『お前は、反乱分子だ』って。はじめはぜんぜん気にしてなかったんだがよ、いつまでもそうしていられるわけじゃなくなってきた。『お前は人々の幸せを奪う者になるだろう』、『大切な者を傷つけるだろう』って言われていくうちに、なんか不安になってきちまって……。俺らしくねぇ事はわかってる。でも俺は、俺はお前らを巻き込みたくなかったんだ」

「それがどうした？いつもの翠なら、そんなこと気にしないだろ？」
「無視できんなら俺だってこんなに悩んだりしねぇよ！言われたんだ、アステレイアに『次私の忠告を受けた時、貴方の存在は消去される』ってさ。これが無視できるか？いくら機械でも人は殺せやしねぇだろうが、それに従う人間にはできるだろ？」
「でも、殺されるって決まった訳じゃ――――」
「危ない！！陽向！！」
皐氣が叫ぶと共に、栄井がいた場所に火花が散る。何者かが打ってきた銃声が、暗い影を落とした町に響き渡る。驚きを隠せない栄井と皐氣は、とりあえず近くにあった電柱の陰に隠れる。
「何だあいつら」
「見たこともない、機械（メカ）だね」
電灯の下にぬっと現れたそれは、巨大なロボットだった。光に当たったボディが、不気味に黒てかりしていた。その腹のあたりから突き出した筒から煙が上がっている。おそらくそこからさっきの玉は打ち出されたのだろう。普段見ている、掃除などを手伝ってくれるロボットとはかけ離れたそれは、楕円型の頭で赤い目を光らせていた。それが、隠れている皐氣達に向けられる。
「ヤバイ、見つかった！」
「翠、こっち！！」
栄井が走り出すと同時に、皐氣もあとに続く。
「ヒョウテキカクニン。ジョキョサギョウニウツリマス」
一体だけだと思っていたそれは、後ろにもう二体隠れていた。前のロボットと同じ赤い目で皐氣達を睨むと、片言だがはっきりとした電子音声が聞こえた。重そうな太い足を持ち上げて、着実に皐氣達を狙って追いかけてくる。
「オイ、一体どうするんだよ陽向。逃げてもあいつら探査機能あるみたいだから、逃げ切れねぇぞ？」
「いいから黙ってついて来て」

先頭を懸命に走る栄井が、少し苦しそうに言った。彼は昔から、あまり体が強くないのだ。だから体育の時だって、羨ましそうに見ているだけしかできなかった。そのせいで仲間はずれにされる事も多かったし、いじめられていた事もあった。そんな彼を気にかけて、皐氣は声をかけ、今のように仲良くなったのだった。

「あんま無理すんなよ。お前―――」

「大丈夫。それに、ホラ、見えてきた」

栄井の指差す方向には、寂びれてもう使われていなそうな廃墟があった。使われていた時は学校だったのだろうか横に長く、たくさんの窓がある。だがそこに窓はなく、暗い闇がはまっていた。周りで煌々と焚かれている電灯に照らされたその姿は、まさしくお化け屋敷だった。

「陽向、あんな場所に何があるんだ？」

「『翠が求めてる世界』、かな？」

「俺が求めてる世界？」

「翠は、機械に支配されない世界を望んでるんだろ？あそこには、それがある」

「何で俺がそんな世界を望んでるって、分かったんだ？」

「……僕も同じだからさ」

不敵に微笑んだその笑顔を、はじめて見た。いつもの明るい笑みとは、全く別人のように見えた。

朽ち果てた門のようなものをくぐり、建物の中へ入る。埃が舞うと思って、袖で思わず鼻を覆ったが、塵一つ舞う事はなかった。外見とは裏腹に、意外と綺麗な事に驚いていると、栄井に近くにあった教室へ連れ込まれた。電球が一つも原形をとどめていない、薄暗い教室の中で、栄井は囁く。

「腕、ジュスチセしてる方の腕、見せて」

「？なんで？」

「いいから、早く」

急かす栄井に渋々ながら従うと、彼はポケットから何かを取り出

して皐気のジュスチセをいじり始めた。暗いので、皐氣には彼が何をしているのかさっぱり分からない。ただ静かな暗闇に響く、鉄と鉄がかする様な、ぶつかり合う様な音しか聞こえないのだ。心配になった皐氣が、栄井に何をしているのかたずねると、

「もうちょい待って。すぐにできるから」

その言葉どおりにしばらく待っていると、軽い何かが外れる音がした。その音と共に、皐氣の左手首は軽くなった。驚いていると、クスクスと笑う栄井が言った。

「ちょっとした隙間をいじってやると、意外と簡単にジュスチセって取れるんだよ」

「おま……お前こんな事できるのか！？」

「できるのかって……できてるし」

本当に皐氣の左腕にはジュスチセはなかった。その代わりに、日焼けした肌の境に薄くジュスチセの跡が残っていた。感心している皐を尻目に、栄井は外の様子を窺っていった。そこで一つの疑問が皐氣の頭の中に浮かんだ。

「たしかにそりゃスゲー事だけどよ、こんな事してなんになるんだ？」

「あのロボットは、多分だけど、ジュスチセに反応して追いかけて来てるんだと思うんだ。」

「ジュスチセに？それだったらそこら中にあるやつに反応して、手当たり次第に襲ってるだろ？」

「そうならないようにインプットされてるんだよ。教えてもらっただろ、昔。ジュスチセには個人の情報が込められていて、コンピューター管理されてるって」

「だからどうなんだよ。俺にも分かるように説明しろ」

「だから、コンピューター管理されてるって事は管理人がいる訳だ。その管理人が、上からの命令で『誰々の情報をよこせ』って言われたとする。そしたら簡単に情報は移動する。今いる場所も一目で分かるってもんだ」

「もしそれが本当だとしたら、あのゴツイのは俺を消すようにインプットされてジュスチセの情報を追ってここに来たって訳か？」
「そう。……仮定だけどね」
「でもよ、なんで俺を消そうとすんだ？」
「それは、翠が危険要素だから」
「危険要素？」
皐氣には難しい言葉の山に、彼の頭はもうショートして煙をあげてしていた。
「『ゼウス様、アステレイア様に逆らうもの、これ即ち反逆者の印を表す』」
「何だ、それ？」
「つまり、神を信じないものは邪魔なだけだって事」
「それが、俺」
自分自身を指差しながら言う皐氣に、こっくりと栄井はうなずいた。
「アステレイアやゼウスを作った人間は恐れてるんだ、自分の支配が行き届かなくなる事を。他人が自分勝手に動く事を」
「何で？」
「そんなの分からないよ。だけど……場所を移動したほうがよさそうだ」
そっと別の部屋に移動とする時、外に黒い影が見えた。やはりあのジュスチセを追って来たのだろうか？前居た部屋に置いてきた皐氣のジュスチセ向かって歩いていっている。
「ねぇ、翠。これだけはちゃんと聞いて」
栄井が焦ったように言う。皐氣は黙って、彼の次の言葉を待った。
「この先を抜けると、行き止まりがある。その壁は仕掛け扉でね、消火器を引っ張ると開くようになってる。そこを抜けて会うんだ、茜（あかね）とアリィに」
「アカネとアリィ？」
「そう、その子達は僕の友達なんだ、翠と仲良くなる前からの。

僕の知り合いだって言えば、何かと世話してくれると思うから」
「お前も一緒に来ればいいだろ？そしたら、そんな面倒な事しなくても――――」
「僕は行けない。僕までいなくなったら、緋搗が心配するし、もしかしたらアステレイアが緋搗に何かするかもしれない」
真っすぐな瞳が、皐氣を見つめる。少し頼りないが、しっかりと前を見つめる綺麗な瞳（め）だ。揺るぎそうにない、栄井の決意に、皐氣はゆっくりとうなずいた。
「二人に会ったら、きちんと自分の気持ちを言うんだ。そしたら絶対力を貸してくれるからさ」
「俺のことは、それでいいとしてお前はどうする？」
「僕は何とかなる」
言おうとした言葉を制して、栄井はにっこりと笑う。自信に満ちた、希望ある笑みだった。
「僕は信じてる。……翠がこの機械で縛られた世界を開放してくれるって」
「陽向……」
「あ～あ、恥ずかしい。早く行けよ、あの機械（メカ）に見つかるぜ」
栄井が顔をほ照らしながら、押し出すように皐氣の背中を押す。振り返ってまた栄井と話そうとしたが、彼は我慢した。そうしないと、ずっとそこに居てしまいそうだったから。そんなに遠くない場所で爆発音が聞こえた。きっとあの機械（メカ）が、さっきまで皐氣のしていたジュスチセに向かって発砲しているのだろう。栄井に取ってもらえなかったらと思うと、鳥肌が立った。だが彼は進まなくてはならない。視界の悪い暗闇の中で、壁伝いに歩いていく。本当にこの廊下に終わりなどあるのかと心配し始めたら、指先が直角に曲がる壁を捉えた。
「何を引っ張れって言ってたっけ？」
暗闇に慣れていく視界に現れたものは、割れたガラスの破片と、使われる事のなくなった机――――やはり学校として使われていたよ

うだ――――が乱雑に放られている。その机に隠されるように、壁には凹(へこ)みがあった。その中には、やけに綺麗な消火器が窮屈そうにはまっていた。その斜め上に擦り切れた絵画が飾ってあった。暗闇のせいもあるのだろうが、何が描いてあるかさっぱり分からない。

「引っ張れそうなのは、絵と消火器……しかねぇな」

皐氣は、絵と消火器を交互に見ながら悩んだ結果、『どちらにしようかな』で決めることにした。ほんの少し前の事なのに、思い出せる自信がなかった。そうした結果は、絵だった。

「だけど俺は、反対にする癖があるから――――」

皐氣が机をどかし、勢い良く消火器を引っ張るといとも簡単にそれは動いた。完璧に外れる事のなかったそれは、意味なく力を込めた皐氣をせせら笑っているようだった。

「何も起きねぇぞ？」

不思議に思い数歩下がっていくと、突然さっきまであったはずの床は消えていた。皐氣は懸命にバランスを取ったがその甲斐なく、むなしく落ちていった。

そのあと消火器は元の場所へ戻り、動かしたはずの机も勝手に動き、何事もなかったかのような風景に戻ってた。

「うわぁぁぁーーーー！！」

その頃に皐氣は暗い筒の中を滑っていっていた。時々クルクルと渦を巻いたりしたりして、目が回ってきていた。もう限界に達しそうになった時、下のほうから光が近づいてきて――――

「ってぇーー！」

光に包まれたと思ったら、皐氣は温かな土の上に放り出された。そのせいで不恰好に、しりもちをついた。痛い尻を摩りながら立ち上がり、闇に慣れていた皐氣の目が光に慣れていく。するとそこには今までに見たこともない、美しい自然が映った。

「スッゲェ……」

あまりの美しさに言葉を失う皐氣は、これからすべき事も忘れかけていた。

2、動き出す運命（後書き）

やっと動き出しましたね……ホントに。さあ、これから新キャラの登場と、いろいろ起こっていくと思うので応援よろしくお願いします！！

3、奏でられる唄

森は旋律を奏で、鳥が詩(うた)を唄う。緑が奏でる音楽は、まっさらな青空のしたで輝きながら響いていく。風が眠気を誘い、青く茂る草が遊ぼうと耳元で囁く。自然が一体となり、一つの物語を語っているようだった。そのあまりの気持ちよさに、丈夫そうな幹に寄りかかっていた皐氣(こうき)は目を瞑りそうになってしまった。鼻先を優雅に舞う蝶を見ながら、お茶でも飲みたいと思っていた。だがそういうわけにも行かない事を、彼は忘れていた。

「なぁんで、俺こんなところに来たんだっけ？……てか、ここどこ？」

少しだけ覚醒してきた頭の中に、栄井の言葉が薄っすらとよみがえる。

――――会うんだ、……とアリィに――――

しっかり覚えたつもりだったのに、大切な言葉を薄っすらとしか思い出せなかった。誰に会えばいいのか、しっかり覚えておかないと思って、印象に残った名前だけは覚えているようだ。だが、これだけでは何の手がかりにもならない。寝てちゃいけなぁやな。行動しねぇと。

「……。だけど、どこ行きゃいいんだ？」

周りにあるのは木、木、木。森のど真ん中で何の目印もない。右も左もあるのは木。上はただ広い空、下は小さな花が咲く草原。どこにも家がない。どこにも――――

「って、俺が落ちてきたはずの滑り台的なものは！？」

皐氣は今頃になって気が付いた。確かにない、家らしきものは。それどころか、上に繋がっているような建物すらないのだ。それなのに皐氣はここへ、落ちてきた。上から下へ来たはずなのに、近くにはその証拠を現すものがないのだ。なのに何故自分がこの地に立っているのかわからず、彼は頭を抱えて悩んだ。

「どうしてなんだ？陽向、何も言ってなかったよな。ここへの来かたは言ってたけど……」

柄にもなく考え込む事、約数秒。あっという間に考える事をやめた皐氣は、とりあえず動いてみる事にした。

少し歩けば、そこはもう森の中だった。青々と茂る木々は皐氣に襲い掛からんとばかりにしなっていて、重みを感じた。まるで異質な皐氣を追い出したいかのようだった。少し心配になりながらも進んでいくと、少し開けた場所が見えた。何かあるかと見に行ってみたが、ただの獣道だけだった。でもそのおかげで、この森には獣がいるという危険が分かった。でもプラスに考えれば人が通った道かもしれない。そんな儚い希望でも、元の道へ戻るよりはこの道を歩いてみたいと思った皐氣は、とりあえず獣道を歩き出した。

「せめぇな……」

時々木が倒れていたり、朽ちた木が寄り添うようにトンネルを作っていたりする道を歩きながら皐氣は何となくそう思った。いつもなら綺麗に整備された道を歩き、木なんて庭に生えているくらいでしか見られなかったのに、今はこんなにも近くに木がある。なのにあの綺麗な道より、この木に囲まれた道を歩くほうが懐かしい気がするのは何故だろうか？昔から慣れ親しんだ友のように懐かしいのは何故だろう？

優しい風が吹き、少し後ろを振り向かせる。そこに栄井と緋搗の姿が見えた気がした。驚いて完全に振り返ってみても誰もいない。でも、あの通学路が、本当はここだったような錯覚に陥っている事は確かなようだ。あれからまだそんなに立っていないのに、友の存在がなく、一人別次元に飛ばされてしまった様で、少し悲しくなった。

そんな獣道にも終わりが見えてきた。だいぶ歩いたので、もうくたくただった。水を一杯の見たいと思っていると、その視線の先に、微かに光る湖を見つけた。途端に疲れがどこかへ消えて、少しだけだが力がみなぎってきた。邪魔する木の間を、疲れた足を無理やり

引きずってでも走っていくと、輝く大きな湖が姿を現した。
「うわぁお！」
風に波たちながらも、青い空を映す。不思議で神秘的な湖は、大地にはまった鏡のようだった。どこまでも透明なそれは、まさに美しいとしかいいようになかった。
そっと水面に近づいて、覗き込むと、煤の様な汚れが付いた顔が映った。よく見れば洋服も手も足もそれで汚れている。水を飲んだら、洗ったほうがよさそうだ。
「つめてぇ～」
皐氣の眠気のために火照っていた手が、綺麗な水に冷やされていく。限りなく透明な水を掬って飲んでみると、体に染み渡るようだった。爽やかなのど越しで、何回飲んでも飽きそうにない、美味しい水だった。喉の渇きが癒えるまで水を飲んでから手足を洗ったが、水が汚れる事はなかった。何か不思議な力が働いているのかもしれない。こんなに綺麗な湖を見たら、誰だってそう思うだろう。
そして大きく伸びをしたときに気付いた。彼とは反対側の岸辺に、小さな少年が水を汲んでいることに。ここから見る限りでは、歳は小学1年生くらいだろう。民族衣装なのか、深くフードをかぶり、袖口がゆったりと広がったあまり目立たない色の着物を羽織っていた。そのせいで、皐氣もあの少年に気付かなかったのだろう。とりあえず、ここは誰もいない無人島のような異世界ではない事が分かったら、まず聞いてみるべし。ここがどこなのか、アリィとは誰の事なのか。
皐がその少年に近づいていっても、彼は気付かないようで、一生懸命に彼の体の半分ほどもある壺に、柄杓で水を入れていた。色白な肌に、ジュスチセの影はない。彼も栄井にあれを外してもらったのだろうか。くだらない事を考えながらも、もう皐氣は少年の真隣にいた。普通ならもう見えているはずだが、深くかぶったフードのせいで皐氣の存在に気付かないらしい。柄杓を小さな両手で抱えるようにして、夢中で水を汲み続けている。皐氣の目の前にある壺に

は、まだ半分も水は溜まっていなかった。溜まるまで待ってから話しかけようと思ったのだが、それでは日が暮れてしまいそうだった。そこで、しゃがんで彼に聞いてみる事にした。

「なあ――――」

まだ主語も言わないうちに少年は飛び上がって驚いた。それほど真剣に水を汲んでいたようだ。そんなに水が必要なのだろうか。

「怪しいもんじゃねぇんだ。驚かせたみたいだな。俺、皐氣　翠ってんだけど、お前は？」

あくまでフレンドリーに、優しい感じで。そうしなければ、子供があまり好きじゃない皐氣の言葉には棘がありすぎて、こんな子供じゃ泣いてしまうだろう。

「……」

顔が恐くならないように作り笑いを浮かべたのが悪かったのだろうか、柄杓を握った少年は、動かないで固まってしまっていた。昔、緋搗に言われた事を思い出した。『あんたの作り笑いハンニャみたい』と言われて、かなり引かれたのだ。そのハンニャ顔で話しかけられたせいで、少年は口を開かないのかもしれない。今度はいたって怖くならない様に、普通に話しかけた。

「俺、栄井って奴に言われてここに来たんだけど、良くここのこと教えてもらってねぇんだよ。お前ここに住んでんだろ？何でもいいから知ってる事教えてくれねぇか？」

『栄井』の名前を出したら、少年に反応があった。もしかしたら、栄井のことを知っているのかもしれない。もしくは、この少年が、アリィか、もう一人なのかもしれない。

「お前、栄井知ってんのか？そいつ俺の友達なんだ。で、そいつにアリィともう一人……名前忘れたけど、とりあえずそいつらに会ってみろって言われてきたんだがよ、お前知ってるか？」

「……」

言葉が通じないかのように何も言わない少年だが、今度は『アリィ』に反応を示した。その事を踏まえて考えると、彼はアリィなの

かもしれない。始め聞いたときは、名前からして女だと思っていた皐氣にとっては、少し驚きである。でもとりあえず、探し人には会えたのだ。あとは、ここがどこかが分かればありがたい。

「なあ、お前アリィだろ？……別に嫌なら答えなくてもいいがよ、ここがどこだかは、答えてくんねぇか」

皐氣はできる限りを尽くして優しく聞くが、仮定だがアリィは答えそうにない。でもさっきよりは親しみができてきたのか、身振り手振りで何かを伝えようとしているようだった。必死になって、あちこちに手を動かすが、頭の回転が鈍い皐氣にはさっぱり分からない。彼も彼なりに一生懸命考えているのだが、どうも伝わらない。空でアリィが何かを書いているようだと言う事がやっと分かったが、それ以外は何を書いているのかすら、分からない始末だ。痺れを切らした皐氣は、やけになって頭をかきむしってから、突然の彼の行動に驚いているアリィに向かって言った。

「何でお前しゃべらねぇの！？俺に何か言いてぇんなら口に出して言え！口に出して！！」

つい本音が出てしまった皐氣は、ハッとなって少年を見た。泣いているかと思ったが、ただ岩のようにぴったりと止まってしまっていただけだった。泣いていたらどうしようかと思った皐氣は、ひとまず安心してため息をついた。

それにしても、何故この少年は、アリィはしゃべらないのだろうか。他人と口を聞いてはいけないと言う規則でもあるのだろうか。それなら仕方ないだろうが、それは確かな事ではないので、はっきりと断言はできない。例えそんな規則があったとしても、困っている人を目の前にしてそんな態度がとれるだろうか。もう今日の授業と、栄井のなんだかよく分からない言葉のせいで、破裂しそうな頭で懸命に考えると、後ろから物音がした。野生の熊でも出てくるのかと警戒した皐氣は、身構えた。が、ガサガサっと草木の間を掻き分けて出てきたのは予想に反したものだった。

「アリィ！何してんのよ、早く村に帰らないと日が暮れちゃうわ

よ。……って言うか、あんた誰ですか？」
生意気な口の利き方をする熊……ではなく、女の子が出てきた。アリィ――やはり彼がアリィであっていたようだ――と同じ民族衣装を着た女の子で、歳は中学2年生ぐらい。フードで顔の半分くらいまで隠しているが、それを何の警戒心もなくとった彼女は眉を寄せて、皐氣に近づいてきた。
「見慣れない顔ね、どこの村の放浪者？」
予想に反した行動ばかりでぽかんとしていた皐氣だが、彼女の言葉で我に返った。
「放浪者って訳じゃねぇんだがよ、とりあえず道に迷ってんだ。ついでに人も探してる」
「へぇ～。でもこの辺に誰もいなかったわよ」
「いや、仲間って奴じゃなくて、栄井に言われた――」
「アンタ、陽向知ってんの！？」
ズイッと近づいてきた迫力のある活発そうな少女に、おされ気味になりながらも皐氣は答えた。
「お、おう。俺の友達だかんな」
すると、仕切りに目をパチクリ、パチクリさせる少女に向かって、アリィが何か伝えたそうにジェスチャーしていた。それが伝わったらしく、少女は驚いた表情になって皐氣を見た。正確に言うなら睨んだ、と言うべきか。
「じゃあ、アンタ皐氣翠？」
「ああ、そうだけど……何で俺の名前、知ってんだ？」
「そりゃあ、陽向から聞いたからよ」
「陽向から！？じゃあお前は――」
「茜よ。で、こっちはアリィ。口が利けないの、なぜか知んないけどね」
道理で何も言わないはずだ、と感心していた皐氣に茜が手を差し伸べた。
「よろしくね、皐氣。……そしてようこそ、地下帝国（アンダーグラウンド）へ」

「アンダー……グラウンド？」
にっこりと微笑んだ茜は、さも楽しそうに言う。
「アンタの望んだ場所だと思うよ。だってここには機械の支配がないからね」
――『翠が求めてる世界』、かな？――
栄井が言っていた言葉がよみがえってくる。機械がない世界、機械の支配のない世界を確かに皐氣は求めていた。あるはずなんてないと思っていた。絶対に機械の支配から逃れる事などできる訳がないと、思っていた。だが、世界は広い。本当にあったのだ、彼にとってのネバーランドは。
「本当にここには、機械がないのか？」
「もちろん、ジュスチセも何もない、自由な国よ」
茜の言葉をしっかりと聞いた皐氣は、ただ嬉しかった。今後の苦労など知らなかったせいもあるだろうが、この時は幸せだった。本当に、あったのだ。機械の支配がない国は。

だが、彼は知らない。いや、彼らは知らなかった。同じ時を以って、動き出す漆黒の闇を。世界の破滅を願う、黒い影に彼らはもう飲み込まれている事も。
時は動き出す。ゆっくりとだが、確実に進んでいく。破滅への序章は奏でられている。もう誰も、この曲を停めることはできないのだ。そう、誰にも――――。

3、奏でられる唄（後書き）

とても長くなってしまいましたが、呼んでいただき有難うございます。
これからも飽きずに読んでもらえると嬉しいです。

4、光と闇

皐氣はここまで来る事の経緯を、茜は陽向との出会いについてそれぞれ話し合った。アリィは茜の隣にちょこんと座って、静かに二人の話を聞いていた。今彼らがいる場所は、茜達の家だった。家と言っても木で建てられたような立派なものではなく、麻で作られた簡単なテントのようなものだった。それでも居心地は悪くなく、草の匂いが疲れた体を癒してくれているようだった。

「アンタの話を聞いてると、アンタは機械と殺りあおうって感じだね」

「別に損な大それた事はしたくない。ただ、気付いて欲しいだけだ、機械に頼ってばっかじゃなくて、自分で生きてみなくちゃいけねぇって」

「それは分かった。でも、アタシ達に頼られても困るっちゃあ困るんだわ」

「どうしてだ？」

「確かにあたし達は機械を嫌ってここに住んでる。だけど、上に住んでる奴はそうじゃない」

「上って……俺が住んでることのことか？確か正式名称は———」

「神々の世界（ゴットアイランド）。通称は天の国（オーバーグラウンド）」

「お前よく知ってるな、俺より詳しいんじゃねぇの？」

「だってここでは、敵国みたいなものだからね。表立った戦争はないけれど、アタシ達が上に行ったら絶対に差別されるんだ。機械によってね」

「なんで軽蔑すんだ？どう思おうが、自分の勝手だろ」

「そういう考えを持つと、ゼウスやアステレイアがほっとかないんだよ。自分を信じないものには天罰なんでしょ？だからアンタはここに来た」

「来たくて来たわけじゃねぇよ」

少しすねたように言う皐氣の横に、いつの間にかアリィが居て何か言いたそうな目をしていた。だが、そんなに付き合いの長くない皐氣に彼の思いが伝わるわけがない。だから、彼の代わりに茜が言った。

「話し逸らして悪いけど、陽向はどうしてるか気になるってさ」

「陽向か？」

隣で食い入るように見つめてくるアリィに聞くと、彼はこくんとうなずいた。フードから解放された、銀色の髪に紛れた瑠璃色の瞳が潤んでいた。それほどまでに彼らは陽向と親しいらしく、特にこのアリィにとっては、とても大切な存在のようだ。

「俺があいつと別れたのは、もう使われてない廃校の中だった。その後どうなったかなんて、落ちてた俺には分かんねぇよ」

「……」

さらに泣きそうになった顔に少し慌てた皐氣は、茜に助けを求めた。

「何でお前らそんなに陽向の事、気になんだ？」

「アタシはあんまり関係ないのよ。ただね、アリィって名前付けたのは陽向なんだ。だから陽向が親代わりのアリィには、大切な人なんだ……よね？」

茜が優しく微笑んでアリィに言うと、彼はさっきと同じようにうなずいた。その拍子に、一筋の涙が流れた。結構泣き虫らしい。堪えてはいるようだが、もう瞳が涙でいっぱいだ。

「親代わりって事は、こいつには親がいねぇのか？」

「そう。ついでに言えば、アタシもだけどね」

「じゃあ、こいつの面倒お前が見てるのか。スゲェな」

「お前って言われると、何か無性に苛つくから名前で呼んでくんない？呼び捨てでいいから」

「気がついたら直しとく」

そっけなく皐気が返すと、茜はむくれっつらでどこかへ消えてしまった。アリィと二人で居る事が気まずくて仕方ない皐氣が、居心

地悪く思っていると、不意に軽く何かがぶつかってきた。何事かと思ったら、眠そうに目を擦るアリィだった。すまなそうペコリとお辞儀すると、またうつらつらしてきた。いまだ目を擦り続けるアリィの手を制し、皐氣はそっと言った。

「目はあんま擦んじゃねぇよ。目、悪くなっから。眠いんなら寝ろ、別に寄りかかってきてもかまわねぇから」

唇を噛み締めて、アリィはフルフルと首を横に振った。何が何でも起きている気のようだ。その理由はよく分からないが、とりあえず絶対に寝たくないという事は分かった。

「眠たくなったらすぐに寝ろよ。いいな」

そういうと、アリィは少し微笑んでうなずいた。言葉が使えない代わりに、表情は豊かのようだ。これを何とか読めるようになれば、便利かもしれない。

「ちょっと来て皐氣。見て欲しいものがあるから」

やっと戻ってきた茜はそう告げた。あまり待っていないような気もしたが、今、彼のひざの上ではアリィが健やかな寝息を立てて眠っていた。少しの間、子供嫌いを我慢して、こんなに子供に懐かれる事のなかった皐氣としては、ちょっと驚きだった。

「アリィは置いて行くと泣くだろうから、アンタが背負って連れて来て」

「何で俺が———」

「男でしょ、アンタ。子供をおぶるんだったら、男に決まってるでしょ？そんな力もないの？笑っちゃうわね」

どこか性格が緋搗に似ている、この少女が無性にムカついた。挑発に乗ったつもりはないが、一応は高校生という事で軽々とアリィを担いで皐氣は茜に続いて外へ出た。

「アンタって単純だから扱いやすいわ」

「単純じゃねぇよ。ただ、筋トレになるから背負ってるだけだ」

「フフフ……」

「何笑ってんだよ、この性悪娘が」

「失礼ね。……でも陽向が言ってた事がよく分かるなって思った」
「何が？」
「ちょっと馬鹿だけど、頼りになるってところと、優しいところ」
「気持ち悪いこと言うなや」
また笑い出した茜を無視して、空を見上げた。今まで見ることのできなかった数々の星達が、眩く光っている。その空に、急に聞きたくなった。陽向はどうしてる？、と。でも、言葉を知らない夜空は、ただ瞬くだけだった。

＊

突然の訪問者は、緋搗が髪を乾かしている時にやって来た。いつもなら、この後友達と最近気になる人についてのことで盛り上がって、一通り気が済むと眠って一日は終わりだ。親は居ない。なぜなら仕事へ行っているからだ。帰りはいつも夜中だし、早く帰ってくることなんて滅多になかった。不思議に思いながらも、チャイムが鳴り終わらないので、鍵をはずして扉を開けると、そこには見慣れた姿があった。
「栄井！こんな時間にどうしたの？っていうか、その格好、どうかしたの？」
彼女の目の前に現れた栄井は、服がボロボロで汚れていた。戦争の中の兵士のような状態だった。
「ちょっと中に入れてくれると、嬉しいかも」
蒼い顔でそう言われて、中に入れない者があるだろうか。急いでチェーンを外して、彼を招き入れた。靴を脱ぐのも辛そうだったので、土足で上がってもらい、リビングに通した。ふらついて危ない足取りの栄え井を気遣い、手を貸してイスに座らせる。
「ありがとう……。わがままで悪いんだけど、水を一杯貰える？」

「いいよ、気にしないで」
父がいつも使っているコーヒーカップに、たっぷりと水を入れて栄井に渡した。彼はそれをゆっくりと美味しそうに飲むと、深く息を吐いた。
「どうしてこんな風になっちゃったの？もしかして、またいじめ？」
「いや、そうじゃないんだ。覚悟して聞いてもらえると嬉しいな」
「覚悟って、もしかして――――」
「多分ご想像の通りだよ」
「皐氣に何かあったの？」
こっくりとうなずいた栄井は、そのまま倒れてしまいそうだった。元々体が弱いのに、かなり無理をしてここまで来たようだ。そっと支えてやると、弱々しく礼を言われた。
「聞いて、くれるね」
苦しそうに言ったが、まだ意識ははっきりしていた。それを確認してからうなずくと、彼はつっかえつっかえ話し始めた。皐氣が隠してきた秘密の事。それは自分達に被害がないようにと、思ったからの行動の事。突然現れたロボットの事。このジュスチセは外せると言う事。彼が行った場所の事を。
その全てを、静かに緋搗は聞いた。知らない事だらけだったが、皐氣がこの世界を、この機械に支配された世界を嫌っていた事は昔から知っていた。昔から彼は世話用のロボットを毛嫌いして、逃げ回っていたから。
「じゃあ、栄井がここに来た理由って皐氣のサポートを手伝ってもらうため？」
「さすが女子、鋭いね。その通りだよ」
「でもゼウス様や、アステレイア様からは、逃げられないわよ。どうするつもり？」
「翠と同じように僕らもジュスチセを外す」
「だけど、ずっと動かないでいると怪しまれるわ」

「家事用ロボットに付けておけばいい。あいつらは主人の命令で動く。だから結構いろんな動きをするから、バレないさ」
「そうね、それはいい考えだわ。でも、もしジュスチセが何らかの方法で外れたりしたらどうするの？」
「その時はその時だね」
「……栄井にしては無鉄砲なやり方ね」
「褒め言葉として、受け取っとくよ。さあ、ジュスチセを見せて。外してあげるから」
緋搗がジュスチセをしている方の腕を出すと、栄え井は皐の時と同じような動作で、彼女のジュスチセをいとも簡単に外した。
「これでよし。さあ、行こう」
「行こうって……今思ったんだけど、ジュスチセを外している事がバレたらやばくない？」
「大丈夫だよ、ホラ早くロボットにジュスチセを付けて。あまり目立つ所はダメだからな」
「うん、分かった」
そして、緋搗は台所で食器洗いをしていた家事用ロボットにジュスチセを付けた。長いスカートのようなものをいつも着ているので、足に付けておいた。
「親にバレないかな？」
「こういう時は心配性だな、緋搗って。親は、いつも朝早くから、夜遅くまで働いてるんだろ？だったら、滅多に会わないだろ、もしもと時以外は」
「それもそうね」
納得していたら、不意に戸を叩く音が聞こえた。金槌で板を叩いている様な音だった。今日は訪問者が多いと思いながら、玄関へ向かおうとした緋搗の腕を栄井が掴んだ。
「出ちゃダメだ。裏口はある？」
「え……あ、あるけど」
「そこから外に逃げるぞ」

「逃げる？どうして？」
「後で歩きながら話すから、今は外に出る事を考えて」
言葉の意味を今だよく理解できぬままに、緋搗は栄井と共に、台所の裏口から外へ出た。暗く狭い道を抜けて、いつも学校に通っている時と同じ道を歩いていると、彼女の目に驚くべき者達が写った。すれ違った人達一人一人に、必ずマントを羽織った何者かがいるのだ。驚きすぎて緩まる足取りに栄井が言った。
「彼らは、空民（くうみん）。そう名のってた。後はよろしく、璃里（りり）」
「はい、かしこまりました」
聞き慣れない名前と、聞き慣れない綺麗な声にびっくりしていると、彼の隣に彼とは歳の離れた女性があわられた。フードで隠された顔は顎しか見えないが、綺麗な曲線を描いていた。
「はじめまして、緋搗様。私（わたくし）は空民の璃里と申します」
「は、はじめまして璃里さん」
「璃里でいいですよ」
「はぁ……」
「話題がそれてしまいました。本題はですが、私達空民は、ジュスチセを付けている方々には見えないのです。そして外すと見えるようになります。私達空民は、そうしてジュスチセを付けた主人のために働きます。ですが、お金などは一切もらえません。別に不要ですしね」
「ちょ、ちょっと待って。何で貴方達がいるのかは分かったわ。でもどうして見えないようになってるの？別に見えても困らないでしょ？」
「そうかもしれませんが、私達はここでは『人間』として認められていないのです。例えていうなら、精密機械のようなものですね。なくてはならないけれども、見えなくてもいいのですから」
「そうなんだ……」
「ええ。そして私達は、主人のために死ぬまで働き続けます。一日も休む事はできません。だからといって辛くもありません。ただ、

この世界に住む主人の方々に不便が生じない様、サポートするために私達はいるのです。……ここまでは、理解していただけましたか？」

「うん、大体だけど。大切なトコは分かったわ」

「では次の説明に移らせてもらいます。何故この世界が私達を除者にするのかは、それは機械を好まないからです。貴女方の記憶からは消されていると思いますが、初めは皆同じ病院で産まれ、一歳を過ぎるまでそこで育てられます。そして機械と共に遊ばされるのです。そして機械に何の躊躇もなく接しられた者は、この世界へ。機械に反対したものは、私達の世界へ飛ばされます」

「飛ばされるって、どういう事？」

「つまり、ゼウスとアステレイアに支配されていない国へ行く事です。そこで奴隷のような暮らしを送るのです。素晴らしき機械を信用しないものは、用無しですから」

「それ、酷くない？だって、子供の好みなんか、いろいろあるでしょ？」

「そうかもしれませんが、子供達と遊ぶロボットは、アステレイアがモチーフなのです。それを好かぬものは、この世界に暮らすべき人間ではないとみなされるのです。子供の好みは全く関係ありません」

「そんな……」

ロボットを許した者だけを人と呼び、そうでない者を空気のようにしか思わない奴隷のように扱うなんて、考えられなかった。そんな社会の中で、自分はのうのうと生きてきた事を、恥ずかしく思った。

「私達を哀れむ事はありません。なぜなら、そういう決まりですから」

決まり。皐氣が一番嫌っていた言葉だ。一つの法則に縛られ、操り人形のように動かされるのが嫌だと言っていた。今ならその気持ちが分かる気がした。

「さあ、着いたよ」
「着いたって……ここどこ？」
辺りは暗く何も見えないが、ライトアップされているかのように浮かび上がる建物があった。それは神々しく見えるが、なにか違和感を感じるものだった。天高く聳える塔を囲むように、数本の塔が建っているその建物は、はじめて見た気がする。
「これは、神の領域という建造物です。私達の世界と、この世界を繋ぐ物の一つです」
璃里がそう緋搗に説明したが、腑に落ちない事があった。
「そうな事はどうだっていいわ。何で私達はここに来たの？」
いつの間にかジュスチセがなくなっている栄井に聞いた。背中を見せていた彼が振り返ると、肩を竦めて言った。
「皐氣と一緒に世界を変えるためって言うか、皐氣をサポートするためって言うか……どっちだと思う？」
「どっちって、そんなこと言われても私にはさっぱり分かんないわ」
「う～ん……なんて言えばいいんだろう？璃里とはどう思う？」
「私ですか？……私から言わせてもらいますと、機械を倒すためにこの中に入るのではありませんか？この中には、ゼウスやアステレイアの知能が管理されていると聞きます。それさえ壊してしまえば、機械からの支配はなくなるのですから」
「だってさ……どうしたの、緋搗？」
返す言葉さえ見つけられない。でも、一つだけ言える事が緋搗にはあった。
「なんでそんな事するの？犯罪よ、そんな事！」
「……確かに犯罪さ、でもこうするしかないんだ」
「私はそれが嫌なの！分かっててそんな事するなんて、おかしいよ！」
「そうだね」
「栄井はそれでいいの？もし失敗したら、一生犯罪者として生き

て行かなくちゃならないかもしんないのよ？もっと酷かったら、死刑にされちゃう！」
「そうかもね」
「なんでそんなに冷静でいられるの？……もう訳分かんない！私、帰る！」
自分の思いをありったけぶつけても、微笑を湛えたままでいられる栄井が、今日は怖かった。ここまで来た道のりはよく覚えていなかったが、一人でも何とか帰れるだろうと思い、身を翻すと、その手を止める者がいた。
「帰ってはなりません。殺されますよ」
冷えた言葉は、璃里から発せられたものだった。さっきまでの雰囲気と違い、心からの言葉のようだった。
「どうしてそんな事言うの？脅えさせようたって無駄よ」
「本当のことなのです。陽向様もそうでした」
「栄井も？それってどういうこと？」
「はい、それは陽向様がご自宅に戻ってきたときの事でした。いつもなら明かりの点いているはずなのですが、今日はひっそりとしていて、生きた者の気配がしなかったのでございます。そして家の前には、スパイロボットがいたのです家に居た方々がどうなってしまったのか分かりませんが、彼らは陽向様を狙ってきたのでしょう」
「どうして？」
「反逆者には、死を」
それまで静かだった栄井が口を開いた。あまりに深刻そうに言うので、緋搗の方が焦ってしまった。
「もう僕らは、犯罪者なんだ。なぜか分からないけど」
「じゃあ私の家に来たのも、スパイロボットだったの？」
「多分ね。今から戻っても捕まるだけだよ」
「そんな……」
もうあの家には帰れないのかと思うと、悲しくなった。ふと、嫌な予感がした。両親はどうなってしまうのだろう？殺されてしまう

のだろうか。
「そう気を落とさないで、きっと大丈夫さ」
栄井もそう自分に言い聞かせて、緋搗に及ぶかもしれない危険を知らせに来てくれたのだろうか。大丈夫。きっとだけれども、そう思うと気が楽になった気がした。
「……。嫌になったらやめるからね」
緋搗がそういうと、一瞬意外そうな顔をしてから栄井はうなずいた。そして、手を差し伸べて言った。
「それじゃ、今度こそ行こうか」
これから先、何が起こるかは、まだ分からない。いい事があるかもしれないし、悪い事が起きるかもしれない。それでも今は、進んでみることしかできないのだ。

＊

彼らはまだ気付いていない。光があれば、闇もあるという事を。彼らが光ならば、我らは闇だろう。底のない、闇。今、無数の闇の遣い達がここで蠢いていた。
「裏切り者には、死の鉄槌を下さん」
低い声に便乗するように、また闇が蠢き数人の人の輪郭を見せた。
「反逆者共に、死を」
呪文のように、その言葉は響いていった。
闇もまた、確実に動き出していた。

5、駆ける予感

茜に連れられて、皐氣が来た場所は大きな木の前だった。他に何もないのだが、威圧感を感じる場所だった。

「居るはずなんだけど……。ババ様～！！クソババ様～～！！」

いきなりそう叫びだした茜に答えるように、木の幹の後ろから老人が出てきた。見た目は、仙人の様だった。

「クソババじゃないわい！！」

「そう言わないと出て来ないじゃない。ババ様は」

「名前さえ呼べばよいのじゃ。それを変な風に言うから出てくる気が失せるのじゃ」

「はいはい、すみませんでしたぁ」

そんな二人の会話に入れる訳もなく、ただただ呆然と立ち尽くしていた皐氣に、ババ様はやっと気付いた。

「誰じゃ、そなたは。ここいらでは見ん顔じゃの」

しわが深く刻まれた顔がドアップになるのは、正直にキツかった。

「そいつは、陽向の知り合いの……何て名前だっけ？」

「簡単な名前なんだから覚えろよな。……はじめまして、皐氣翠っす」

「陽向とは違って、礼儀正しくない小僧じゃの。で、わしに何のようじゃ」

「小僧……」

もう少しで二十歳になれる歳の者に、小僧とはよく言えたものだ。だが、相手は老婆なので、強く言い返す気にもならない。それがもし、茜の言葉だったりしたら、鉄拳で答えているところだ。

「問いには答えを、じゃぞ」

「んな事言われても、俺は茜に連れられて来ただけだぜ」

「答えになっとらんのぉ。陽向はきちんと答えたぞ。まったく、どういう教育を受けてきたんじゃ」

ウゼェんだけど、このクソババァ！内心でかなり悪態をつきつつ、皐氣は拳を握りしめた。
「ババ様、話し進まないから、皐氣をいじめんの後にしてよ」
「別にいじめたつもりはないがの」
「いじめられてたつもりはねぇよ！」
見事に二人の声が重なって森に響いた。そのせいで、眠っていた鳥達が少し騒がしく飛び立っていった。そして、皐氣の背中で大人しく寝ていたアリィも起きてしまった。
「そなた、なかなかいい度胸をもっとるの。このババに対してそうでかい口はたたけんでの」
「褒め言葉として、受け取っとくよ」
その皐の皮肉を込めた言葉に、ババ様は高らかに笑い出した。
「面白いね、気に入った。そなた、名を皐氣とか言ったの」
「それが何だよ」
「いいや別によいのじゃ、早速占ってしんぞよう」
「はぁ、占い？」
降ろしてくれと暴れだしたアリィを降ろしながら、尋ねるとババ様は答えた。
「何じゃ、占いに来たんじゃないのか？」
「いいよババ様、アタシが説明しとくから準備してて」
茜がババ様を急かすと、ババ様はまた大きな木の後ろに消えていった。それを見送ってから振り返った茜は、深いため息をついた。
「何だよ、そのため息」
「ん？面倒臭いなぁって思ってさぁ……ハァ」
「何が？」
「説明に決まってるでしょ！？……しなくてもいいかなぁ、めんどくさいぃ」
「しねぇと俺が困る事ならしとけよ」
「じゃあ、いいや」
簡単な説明も聞けることなく、皐氣はババ様に呼ばれて木の後ろ

へ行く事になった。木の後ろは、不思議な模様で埋め尽くされていた。
「そんな驚く事もなかろう。まさか、これを知らんのか？」
「知ってたら、奇跡なんじゃねぇの」
「口の足りない奴じゃの、まあよい。これは、魔方陣という奴じゃ。わしはこれを占いのために使っておる。他にも、呪いにも使えるんじゃが、わしはそれが苦手での」
「へぇ……」
「ホレ、ちょっと待っておれよ」
そしてババ様が、ぶつぶつと呪文のような言葉を呟きだすと、その魔方陣に変化があった。地面に書かれた模様や言葉のようなものが次々に光だし、七色に輝きだしたのだ。その中へババ様は歩き出し、光に包まれる。白銀の髪が風に巻かれ、小波のように輝く。そして、その風に合わせて言葉なども動き出し、ババ様の周りを回り始めた。普段の生活で味わえるはずのない、神秘的な光景に皐氣はただ言葉を失った。
やがて言葉達の風は止み、魔法陣が元の形に戻っていくと、ババ様が皐氣に向かって言った。
「お前、何と言おうとも動じない覚悟はあるか？」
「は？覚悟？」
「問いには答えを！」
「んなこと……」
急に言われて、答えられる訳がないと、皐氣は思った。だが、今は答えないとならない気がした。覚悟とは、どんなものが必要なのだろうか。何を覚悟すればいいのだろうか。
――――僕は信じてる。……翠がこの機械で縛られた世界を開放してくれるって――――
栄井はそう言っていた。その後恥ずかしそうに笑って。機械で縛られた世界を開放する覚悟が、俺にはあるのか？それは、世界へのテロ行為であって、してはならないこと。そんな大それた事をやり

遂げる覚悟があるのかと、ババ様は聞いているのだ。やり遂げる自信はない。諦められる勇気もない。でも、俺は信じられてる。そしたら、その信頼を裏切る訳にはいかない。やらなければならない。試してみないと、いけない。

「完璧にやり遂げられる気はしねぇけど、俺を信じて待っていてくれてる奴がいる。そいつの為に、頑張ってみたい」

「覚悟があると、取ってよいな？」

力強く皐氣がうなずくと、ババ様は面白そうに笑った。深刻な雰囲気になっていた空気が、青空のように晴れ渡る。場に合わないはずなのに、なぜか違和感を感じさせない笑い声だった。

「さすが、わしが見込んだ男よ。じゃあ、お告げを一つやろう。……心して聞け」

再び、ピアノ線の様な張り詰めた空気が流れる。その代わりように、ここの空気は、ババ様が操っているように思えた。

「お前は世界を変える力を十分に持っている。じゃが、そんな力があれば、それと相反する力もある事を忘れるな。光があるように、闇もあり、動いているのじゃ。そしておぬしは、大切な仲間を一人失うぞ」

「大切な……仲間？」

「そうじゃ、心から思う、大切な者じゃ。護りたいのなら、護って見せよ。そなたの力で、この世界ごと、その者をな。……それが、そなたできるかな？」

「やってみせるさ、きっと」

今はまだ力が足りないだろうが、その時が来るまで頑張り続ける事はできる。護る者が何かは分からなくても、世界ごと護る事ができるなら、何が何でも護るだけだ。その希望と志のこもった輝く瞳が、ババ様を見つめる。そして、ババ様はほくそえんだ。

「さあ行くがよい、神の領域へ」

その言葉と共に、魔方陣に穴が開いた。そういう風に見えるだけかもしれないが、魔方陣には、不気味に輝く穴が出現したのは確か

だ。だが、嫌な感じはしなかった。
「ババ様、神の領域って何だ？」
「行けば分かるじゃろう。そして、その最上階を目指し、世界の呪縛を解くのじゃぞ」
「てことは、そこにアステレイアとかが――――」
最後まで言葉を言えずに、皐氣は穴の中へ飛ばされた。だが、かろうじで完全に吸い込まれる事は免れた。
「そなたに、世界樹（エデン）のご加護があらんことを」
その言葉を最後に、皐氣は闇の中へ消えて行った。

＊

「ってぇ～」
どうも何かから出てくる時は、尻餅をついてしまうらしい・今度は気をつけてみようかと思っていると、
「おわっ」
背中に何かが激突してきた。強烈な痛みに喘いでいると、見慣れた黒髪のガキと、銀髪の少年が背中に乗っていた。彼らもあの穴から来たのだろうか。
「へぇ、ここが神の領域かぁ」
「……てめ、誰の上に乗ってると思ってんだ」
「お、皐氣。ヤッポー」
「ヤッポー……じゃねぇよ！とっとと退け」
皐氣の指示に従って、まずさっとアリィは降りたのだが、茜はゆっくりと降りた。いる場所が変わっても、憎たらしいのは変わらないらしい。
「何でお前らまで来てんだよ」
「あっちにいてもどうせ暇だし、ババ様が付いて行ってもいいっ

て言ったから」
「それだけで、得体も知れない場所に来たのか？」
「だって私、ここ知ってるもん。時々働きに行かされてたから」
「じゃあ、道案内頼むわ」
軽く言った皐氣はとりあえず、自分達の居る所について調べてみる事にした。神の領域何て言うものだから、もっと明るく活気だった所なのかと思っていたが、ここはまったく正反対だった。周りには薄暗い電灯しかなく、薄気味悪い。よく見れば、蜘蛛の巣や小動物の死骸などがたくさんありそうだった。こういった場所は苦手ではないが、嫌いだった。
もっとよく見てみようと、歩き回っていると、何かが制服の袖を引っ張った。良く考えてみたら、皐氣はまだ制服だった事に驚いた。いろいろあって、そんなことも忘れていたのだ。何かがその制服に引っ掛かったのかと思ったが、引っ張っていたのはアリィだった。
「どうかしたのか？」
と聞いても、ただ制服を引っ張るだけ。
「こういう場所が、怖いのか」
と聞いても、首を振るだけ。何やら奥の方が気になるようで、それを伝えるために引っ張っているようだった。そしてやっと、アリィが伝えたい事が分かった皐氣は彼に付いて行った。
そしてここは、牢獄のような場所のために暗いのだと分かった。左右等間隔に牢屋はあり、嫌な臭いを発していた。その一つで、アリィは歩みを止め、中を指差した。いつの間にか付いて来ていた茜も、皐氣と一緒になって中を覗く。するとそこには、思いがけないものがあり、彼らは自分の目を疑った。
「陽向！！」
そう、そこには緋搗と一緒にいる筈の、栄井陽向本人が横たわっていたのだ。

＊

気がつくと、緋搗は鎖に繋がれ、冷たい床に横たわっていた。あまり覚醒しない頭の中で、同じ光景が繰り返し流されていた。栄井と一緒に神の領域へ来たのだが、入っていきなり誰かに殴られ、気絶されたのだ。その時、栄井が違う人間に変わっていくのを見た。いや、あれは、栄井そっくりに作られたロボットだったのだ。それを境に、全ての記憶が、走馬燈の様に駆け巡った。その後、彼女は鎖に繋がれてここへ連れてこられたのだ。敵の罠に、まんまと引っ掛かってしまったのだ。

「お目覚めですか、お嬢さん？」

聞きなれない低い声が、暗い部屋の中に響く。その中に、一つだけライトアップされたイスが浮かび上がる。背の高いそれに腰掛けている、スーツの男が不気味に微笑んだ。嫌な予感が、緋搗の心を握る。

「いやぁ、こんなに作戦が上手くいくとは思っていなかったので、嬉しいですよ。有難う」

何故感謝されなければならないのか、分からないが、とりあえず黙っておく事にしていた。

「驚いて声も出ませんか？可哀相に。でも大丈夫ですよ、役目さえ果たしてくれれば」

「役目？」

思わぬ言葉に言い返してしまってからでは遅いが、口を押さえた。

「そうです、役目です。嫌とはいえませんよ。なぜなら命がかかっていますから」

その言葉に従うように、冷たい刃が首もとに当たるのを感じた。その刃を持っているのは、璃里だった。その隣に、栄井もどきもいた。よく見れば全然違うのに、何故気付けなかったのだろう。

「その子は、私の忠実なる僕です。決して汚らしい空民などでは

ありません」
「その通りですわ、伯爵様」
「伯爵？」
「伯爵様を呼び捨てにするなど、許されないぞ、小娘！」
栄井もどきが彼の声で言うものだから、気持ち悪い。鳥肌が立つ。
「まあいいよ、ドール。さあ、私の話を聞いてくれ、お嬢さん」
栄井もどきは、ドールという名前らしい。確かに、人に化けられるロボットは、ドールと言う名に相応しい気がした。
「聴いているのかい、お嬢さん？」
「誰が、あなたの言う事なんか聞くもんか」
「おやおや、威勢がいいお嬢さんだ。だが、忘れちゃいけないよ、自分の立場を」
首を刃が少しきり、血が出てきた。ヒリヒリとする痛みが、首にする。
「簡単な事だよ、それはね――――」
悪魔の言葉を最後まで聞いてしまった緋搗は、動けなかった。微動だにできるはずがない、そんな事を言われるとは思っていたのだから。
「やるかい、やらないかい？お嬢さん」
そこではじめて緋搗は恐怖を感じた。目の前に座っている男が、本物の悪魔のようで、慄然とした。そして切に願った。
――――助けて、助けて――――皐氣！！
叶って欲しい願いでもあり、叶って欲しくもない、悲しい願いだった。

6、始まるゲーム

「ヤッホー、元気だった？翠。と言うか、お久ぁ」
能天気に牢屋の中から話しかけてくるのは、やはり栄井だった。銀縁のメガネにひびが入っている所以外に、変わった所はなさそうだ。でも、何故彼はこんなところに閉じ込められているのだろうか。
「ヤッホーじゃねぇ！何してんだよ、こんなトコで」
「何って……捕まってるに決まってんじゃん」
「だぁかぁらぁ、それは見て分かんの！何で捕まってんのか、聞いてんだよ！！」
「ああ、何だ、そんな事」
拍子抜けた笑いが、暗い牢屋に明るく響く。なんだか、調子が狂う。もっと深刻な事になっている筈なのに、なぜかそんなことを忘れてしまう。
「僕の体力であんなゴツイロボット達から逃げ切れる訳ないだろ？はっはっは～！」
それもそうかと思ったが、最後の笑いが気に食わない。なぜなら、威張っているように聞こえるからだ。牢の中の栄井を手招きで近くに来させると、皐氣は、彼のその頬を引っ張って伸ばした。
「いはいほ、いはいっへ、ふい」
きちんとした日本語に訳すと、『痛いよ、痛いって、翠』である。
「お前が薄気味悪い笑い方をする時は、とんでもない事が待ってんだよ」
「たとへは？」
『例えば？』と言っている。
「腹の調子がよくなかったり、日課に体育があったり、学食に大っ嫌いなチーズが出たりしたときだ」
「さひほのっへ、ふいのほほはん」
『最後のって、翠の事じゃん』

「チーズだぞ！！何でこの世に腐ったもん食わせる親がいるか！」
「なっほうも、くはっへふほ」
『納豆も、腐ってるよ』
「どーでもいいわ！」
他愛無い会話を繰り広げる皐氣達を見て、茜は声を立てて笑った。
ギッと、皐氣に睨まれたが動ぜずに笑い続けた。
「笑うな、クソガキ！」
「わはふはほ、あふぁへ」
『笑うなよ、茜』
同時に言われると、意味不明な言葉になって、茜の耳に届いた。
そこでまた高らかに茜が笑い出す。そして取り残されたかのように、右往左往するアリィもまた滑稽だった。
だが、ここは敵地。そんな平和な会話をしていていい筈もない。
そして、油断していていい筈もないのだ。
「あふはい！」
間一髪。あと数秒でも反応が遅かったら、皐氣は真っ二つになっていただろう。身軽に敵の攻撃をかわせたのはいいが、皐氣は何も戦う力を備えていない。全くの丸腰だった。だが相手は人間だ、どうにかしたら、倒せるかもしれない。
「皐氣！！これ使って！！」
いつの間にか、物陰に隠れていた茜が何か投げてきた。それを危なくキャッチすると、またヒラリと敵の攻撃をかわす。それは、銃のようだった。使い方はよく分からないが、形が銃に似ているのなら、使い方も似ているはずだ。エアガンなら使った事があるので、それと同じようにやってみると、玉が出た。玉と言っても、レーザーに近かった。
「これなら……」
また大きく振りかぶった敵に狙いを定めて、皐氣は撃った。それは見事に的中し、敵はどうと倒れた。
「さっすが、翠だね」

「お前はそんな呑気な事言ってられる状況にあるか？」
栄井は自分の周りを見回してから、情けなく言った。
「ないかも……」
「かもじゃなくて、ないんだよ！！ったくしょうがねぇな」
飽きれ気味だが、栄井に牢の奥へ行くように指示して、使い方を覚えた銃で、牢の鍵を壊してやった。
「サンキュー、翠」
「どういたしまして」
「あれ？もしかして翠、怒ってる？」
「怒ってねぇ、さっさと行くぞ」
「どこへ？」
「……」
そこまではやはり考えていなかったようで、皐氣は返す言葉がない。道案内役にされていたはずの茜も知らん振りだし、アリィにいたっては何を考えているのかさっぱり分からない。こうした状況で、一番役に立つのは、栄井しかいなかった。
「仕方ないなぁ……。さっ、ついてきな、野郎ども」
そして意気揚々と、栄井は歩みだしたのだった。

＊

何をどう間違えたのか、彼には分かっていなかった。自分のどんな行動が悪く、こんな事になってしまったのか。ただ自分の思ったとおりの道を行き、自分が思ったとおりにやってきた。はずなのだが、事態はかなり最悪だった。
「何がいけなかったんだろ……」
走りながら、栄井は呟いた。失敗はなかった筈だ。扉を開けるために、変なスイッチを押しただけなのだから。それだけで、何故、

敵に追いかけられないとならないのだろうか。
「お前の押したスイッチがいけなかったんじゃねぇのかよ！」
必死に銃で敵を倒しながら走る皐氣が、息を切らしながら言った。
「アレは嫌な予感がしてたじゃない！」
茜の怒気の籠もった言葉に背中を叩かれながら、栄井は自分のした事を振り返った。まず、場所を移動するために、牢から出て通路に来た。そして、どんどんと進んで行き、上に上がるための階段かエレベーターの様なものを探した。その時に偶然見つけたスイッチがあった。その隣には、意味有り気な扉があったし、間違えなく上に行くために役立つものだろうと思って押そうとしたのだ。そしたらアリィに止められ、それに気付いた皐氣達にも止められたのだ。先に行こうと急かすアリィに、はじめは渋々従ったのだが、その行く先に見張りのロボットがいたので引き返してきたのだ。そして、悩んでいる皐氣達をほっといて、スイッチを押したら、運悪くブザーが鳴ってしまったのだった。
「やっぱアレのせいだったのかな？」
無視して走り続ける皐氣と茜の代わりに、アリィがうなずいた。その彼の表情にも、少し迷惑そうな表情が浮かんでいた。そしてやっと栄井は、自分の仕出かした事の大きさに気付いたのだった。
「押さなきゃよかったね」
前を走る二人は答えない。急に寂しさと、罪悪感で胸が一杯になった栄井を励ましてくれたのは、アリィだった。小さな手で、そっと背中を叩いてくれたのだ。ドンマイ。そう言ってくれている気がして、栄井は少し嬉しくなった。
「おい茜、これ玉が切れたりする事はあんのか？」
「分かんないよ、そんな事。ババ様がそんなもの持ってたのだって、始めて知ったんだから」
一向に敵の数が減らないのは、鳴り止まないブザーのせいだろうか。何とかブザーを鳴り止ませたいのだが、止める為の方法が分からない。矢鱈に敵を撃っていても、いつ玉が切れるか分からないこ

の銃では――――。
カチッ
無情にも、乾いた音が皐氣の持つ銃の中から聞こえた。
カチッ、カチッ
何度やっても同じ事だった。人を小ばかにしたように、空砲が放たれる。こんなに早く玉が切れるとは思っていなかった皐氣は、かなり慌てた。
「どうすんだよ！玉が切れちまったじゃねぇか！」
いきなり皐氣にそう言われた栄井は、懸命に言い返す。
「僕のせいじゃないだろ！？」
「お前のせいだよ！」
「陽向のせいよ！」
皐氣の声と茜の声が上手く重なった。こういう非常時には、相性がいい様だ。
「そんなに攻めないでよ！」
「うっせぇ！もういいから、黙って走れや！」
「もう、陽向が変なボタン押さなければ、こんな事にはならなかったのにぃ！」
敵からの追跡はまだまだ続く。その時栄井が気付いた事は、彼らに付いて来ている不思議なプロペラ付きの小型ロボットだった。それにカメラでも付いていて、侵入者を映し出し、ブザーが鳴り止まないのかもしれない。でも、これを壊すための道具は何もない。だったら、最終手段だ。
「アリィ、ちょっといいかい？」
不思議そうな表情をしていたが、栄井の話を聞いたアリィはすぐさま行動に移ってくれた。
「んだよ、アリィ。何だ、おぶれってか？」
違う違う、と首を振るアリィの指差す方向に、栄井が見つけた小型ロボットはあった。それに気付いた皐氣は、アリィに聞く。
「あれを取りたいのか？」

うなずくアリィ。そして、皐氣はアリィをおぶるのではなく、助走を付けてそれをジャンプして掴んだ。予想外ではあったが、いい事に変わりない。
「どうすんだ、こんなもん」
皐氣の問いに答えずに、アリィはそれを後ろの追手達に向かって投げつけた。見事にぶつかったそれは壊れ、同時にブザーも止んだ。栄井の予想通りだったようだ。
「スッゲ、ブザーが止んだぞ」
「偉いわアリィ、よくやったわね」
照れくさくなるのはアリィだけのはずだが、あのロボットを壊すように頼んだ栄井も照れくさくなっていた。
「あとは、逃げ込める場所さえあればいいのに。何もねぇぞ」
右も左も、上も下も、ツルツルの鉄板のようなもので囲まれていて、部屋と呼べるものがなかった。それでも走り続けていると、何かが通り過ぎたような気がした。
追手がいなくなっていたので、戻って確かめてみると、そこには人一人がやっと通れそうな窓のようなものがあった。茜やアリィ達も気付いて戻ってきていた。
「一か八か、行ってみっか」
皐氣だけは、ここまで来るのに、幾つもの穴に落ちてきた気がする。いい事だらけではなかったが、何か穴に縁でもあるのだろうか。嬉しくないが。
「でもどこに繋がってるのかな？」
「今は隠れられる場所があるだけ、いいとしましょ」
ぼやく栄井は、心配そうにその中を覗く。その中は案外広く、下から上へ伸びる一本のロープ状のものがあった。何のためにこんなものがあるのかさっぱり分からないが、必要なものだからあるのだろう。
「おい、陽向。後ろ」
皐氣の声がしたので振り返ろうとした時、後ろから何者かに背を

押され、バランス感覚のない栄井は、その中へ落ちていってしまった。
「酷い事するな、お前……」
突然姿を消した栄井に、驚いたアリィは頑張って背伸びして中を覗きこんだ。だが、どんなに頑張っても、側面しか見えない。そんな身長が急に伸びる事もないのに、アリィはいつの間にかそれの中に落ちていた。全ては、茜のせいだった。
「迷っててもしょうがないでしょ？とりあえず入って見た方がいいでしょ？」
「いや、入る入らないは、自分で決める権利があるだろ」
「別にいいじゃない、どうせこの中に落ちてた運命よ」
「そんな運命、絶対なかったな。お前があいつらの運命変えたんだぜ、それ相応の覚悟しとけよ」
「大丈夫よ、二人とも皐氣みたいな性格してないから」
「俺みたいな性格って何だよ！」
「短気で意地悪なトコよ！」
「んだと！」
「何よ！」
「見つけたぞ、あそこだ！」
二人が口喧嘩をしているうちに、敵のロボット達に見つかってしまった。まだいがみ合いながらも、渋々ながらあの穴の中に入っていった。
どれくらい落ちたのだろうか。かなり落ちた気がするが、あまり痛くないのは何故なのだろうか。皐氣が不思議に思いながら立ち上がろうとすると、足元から悲鳴が聞こえた。そこに下から陽向、アリィ、茜の順で積み重なっている事に気付いた。
「痛いわね！！動かないでよ！！」
「……」
「く……苦しい……」
この中で一番苦しそうなのはアリィだったので、茜を退かして立

たせけてやった。と言っても、大人一人がやっと座れるくらいのスペースで立てるはずもないので、茜の上に立たせてから背負った。その間に栄井は静かなのに対して、茜はピーピー五月蝿かった。

「早く助けなさいよ！」

「せめぇんだから、無理だよ」

「せめて、体勢だけは変えさせてよ、翠」

「どうやって」

何せこんなに狭い場所だ、一人が動くとなると、周りにいる者達も動かなくてはならない。そんな中でも、何とかお互いに楽な格好になれたところで、話は始まった。

「ここは何のために造られたのかな？」

と、未だに下敷きになっている栄井が聞く。とても不恰好な体勢をしていたが、この格好が一番楽らしい。

「知るか、ボケ」

アリィを背負い続けるにしても狭いので、顔が壁すれすれになるので肩車をしている皐氣が言い返した。アリィは心配そうな顔で、彼の頭の上から皆を見下ろしていた。

「八つ当たりすんなよ。本はと言えば、茜が悪いんだから」

「アタシは悪くないわよ！他にあの状況で行く所があった？」

陽向の上に、彼と同じく不恰好な形で茜は怒っていた。狭いので、イライラが余計に募るのは無理もないのだ。

「ちょっと、皐氣！足動かさないでよ、気持ち悪いから」

「痛てて！ちょっ……翠、動くなよ」

「わ、悪いな……」

人の上に立つのが嫌だった皐氣は、何とか床に足をつけていたのだが、周りが人に囲まれていて、なんだか気持ち悪いのだ。そのため、居心地を求めて動くのだが、下の者から苦情がくるのだ。何とか動かないようにするが、気持ち悪い環境は変わらなかった。と、その時。

「うおっと！」

「な、何！？」
「痛たたっ！」
急に床が動き出し、皐氣はバランスを崩してしまった。そのせいで栄井の背中を蹴ってしまったのだ。足を片足上げていなければいけない状態に焦りながらも、皐氣は何とか持ち前のバランス力で何とか場を凌ぐ。だが、ガタガタと揺れるそこでは、茜までも蹴ってしまう。
「何蹴ってんのよ、ノロマ！」
「ウゼェな、黙ってろ！こっちだって精一杯にやってんだよ！」
「ここから出たいよぉ、翠ぃ」
「お前は男なんだから泣き言言うな、陽向！俺だってこんなところから出たいさ」
「……」
アリィは、そんな仲間同士の言い争いに耳を傾けながら、ふと上を見上げた。するとそこには、急に近づいてくる天井が見えるではないか。まだまだ遠いようだが、そんなに余裕はないだろう。何とかしてここから出なくてはならない。そのためにはこれを止めるしかないのだが、方法が分からない。だが、時々、外の様子が分かる窓があることには気付いていた。急いで皐氣達に知らせなければならない。
「ああ、もう！何で止まらないのよ！」
「俺に聞くなよ！これ造った奴に聞け！」
「そいつが居たら、こんな苦労はしないよ」
「そんな事分かってるわよ！」
「だったら黙ってろ、おてんば娘」
「おてんばじゃないわよ、皐氣よりはしっかりしてるわ」
「ありえねぇな！マジ、ありえねぇ！」
「あんたの性格の方がありえないわ！この、でくのぼう！」
と、口喧嘩が止まらない。何とか、皐氣だけにでもいいから気付いてもらおうと髪を引っ張っても、彼は気付いてくれなかった。こ

んなときに声が出れば、教えられるのに……。アリィは悔しくなって、しょんぼりした。それでも諦めずに髪を引っ張ってみるが、効果はないようだ。茜も栄井も、アリィの行動に気付いてくれない。だが、遠かった天井は確実に近づいてきている。何としてでも伝えなければ、皆潰されて終わりだ。世界を変えるどころじゃない。声さえ出ればいいのだ、上だと知らせられればいいのだ。上が危ない事を伝えられれば、それだけでいいのだ。

「どうしたらいいのよ！」

上だよ、気付いて茜。

「なにかいい方法はねぇのかよ！」

上が危ないよ、皐氣さん。

「……何か、気持ち悪りぃ」

それより上だよ、陽向。

「ちょっとやめてよ、陽向。ここで吐かないでね」

「汚ねぇからやめろよ、陽向」

「む、無理かも」

「我慢しなさいよ、男でしょ！？」

「今回ばかりは、許して……」

「許せるかっての！臭くなるだろ」

上だよ。上！危ないんだよ、上が！気付いてよ、上、上、上――！

もう、天井ははっきりと見えている。これ以上ここに居ては本当に危ない。アリィは自分のありったけの力を使って、声を出すために頑張った。だが、声は出ない。伝えさせて欲しい、これだけは。みんなを殺さないために――――。

「上！！」

生まれた初めて自分の声に驚くアリィと、アリィの声に気付いた三人。なんとも不恰好だが、しっかりと上を見上げていた。

「上が、近く。危ない、の！」

言いたい事がうまく伝えられないもどかしさはあるが、しっかり

と声が出ていれば伝えられる。気付いてくれる。そのおかげで、三人は自分達の危険を察した。
「ヤベェぞ！どうすんだ？」
「とにかくここから出なきゃ！」
「やった、アリィの声が出た！」
一人だけは例外にして考えると、アリィの忠告は確かに彼らに伝わったのだ。初めて声が出せた喜びと共に、伝えられると言う喜びをアリィは知った。
「横、の、窓、逃げら、る」
途切れ途切れで伝わりにくいかもしれないが、皐氣と茜はきちんと聞き取り、次の行動を起こそうとしていた。例外はまだ他の事をほざいている。いい加減に、自分に迫る危機について考えて欲しいものだった。
「でもこんな狭い窓だわ、一人ずつしか出られない」
「それでも仕方ないだろ？今は、何とかしてここから出る事が大切だ」
「それもそうね」
皐氣の言うとおり、もう天井は数十mと離れていない所まできている。どうするかより、まずは脱出を考えなくてはならない。いまさら悩んだところで、ペシャンコだ。
「何階に繋がってるか分からねぇけど、俺達が目指してんのは上だ。だから上を目指して登っていけば、また会えるはずだ」
「一番初めに上に付いたら、仲間を探すって事でいいわね。敵に待ってもなるべく争わずに、隠れながら行きましょう」
「でも万が一のために、武器はあった方がいいと思うぜ。他にこれ見たいの預からなかったのか、茜」
「まだあったはずよ……ほらあった。弾の詰め替え用はないみたいだけど、それは各自で考えるって事で」
「もう時間がねぇな、まずは俺から行くぜ。一番出やすいからな」
「じゃあ、次はアタシね。陽向、ちゃんとここから逃げなさいよ」

仲の悪い二人とは思えないほどテキパキとした指示で、事は進んだ。茜が、よく聞いていなかった栄井にもう一度説明しているうちに、皐氣はアリィを抱いて外へ飛び出た。うまく出られるか心配ではあったが、すれすれで外に出る事が出来た。アリィは、皐氣にギュッと抱いてもらっていたおかげで、衝撃をあまり受けることなく出れた。その代わりに、皐氣は肩を打ったようだ。痛そうに肩を抱えていた。

「……」

アリィはもう一度声を出そうと思ったのに、もう声が出なくなっていた。何度試しても効果はなく、擦れた空気が喉から出ていくだけだった。また役立たずに戻ってしまった。そう思うと、アリィは急に悲しくなってしまった。そんなしょんぼりとしているアリィに気が付いて、皐氣が優しく言った。

「もう声が出なくなっちまったのか。そりゃあ、残念だわ」

さらにしょげるアリィだが、皐氣はその下げられた頭に手を置いて言った。

「でも、お前が一生懸命俺らに危険を報せてくれたのに、間違いねぇもんな。ありがとな、アリィ」

わしゃわしゃされながら顔を上げたアリィに、皐氣は優しく笑いかけた。もちろん作り笑いなどではなく、本当の笑顔で。そうすると、アリィはたちまち嬉しそうに、ニッコリとした。瞳が大きいせいで、とても人懐っこい感じの笑顔だった。再び元気を取り戻したアリィに、皐氣は真剣な顔つきで言った。

「これからは何が起こるか分からない。もしかしたら、お前を護れ切れないかもしれない。だから自分の事は自分で護れよ。それが嫌なら、でしゃばったマネはするなよ。分かったな」

脅し口調に近い気もしたが、アリィは怖じ気付かずにきちんと最後まで聞き、うなずいた。

「よし、じゃあ行くか」

まだ戦いは始まったばかりだ。

＊

「痛たたぁ……」

上手く着地したつもりなのだが、滑る床に負けて肘を打った。ジィ～ンとした鈍い痛みが、肘をつつく。擦っていても埒が明かないが、痛みが和らぐ気がしたのだ。

「ここって、何階なのかな？」

現在地を示すものは一つもないが、進むしかないのだ。戻るための道は、いつの間にか絶たれていたから。身だしなみを整え、立ち上がる。腰の帯の部分に挟んだ銃はしっかりとある。何もおかしいところはない。肘の痛みを除いてはだが……。

「よおぉし、行っくぞぉ！！」

意気揚々と歩き出した茜の瞳（め）には、恐怖はなく、希望に満ちていた。

その茜に対して、情けなく栄井は立っていた。何とか無事に脱出は出来たが、やはり一人は心細い。せめて、一人くらい仲間がいてくれればいいのだが、そういう訳にはいかなかった。皆別々の道を歩み始めているのに、栄井は進む事が出来ずにいた。

「一人は嫌いなのに……」

などと文句を言いながらではあるが、やっと一歩を踏み出した。

その光景を、それぞれの階にいる記録ロボットは見ていた。今度は気付かれぬように壁と同じ色にしてあるので、誰もその存在に気付いていなかった。それを観覧しながら、その傍観者は楽しそうに哂う。不気味な笑い声に、吸血鬼を連想させる。その吸血鬼の前には、やりかけのチェスがある。その白い駒の四つが動かされた。一つはナイト、二つはビジョップだった。そして最後の一つは、キングだった。

「だぁれが、キングを取るのかな？」
楽しそうに、傍観者は笑う。そして黒い駒を動かす。ナイトの少し前に、同じようにナイトを。一つのビジョップの前には、ポーンが三つ囲むように置いてある。そしてキングの周りで、傍観者はクイーンを回していた。
「大切なキングを壊すのは、やっぱクイーンがいいよな」
不敵な笑みが、一人の少女を見つめた。彼女は力なく立っていた。長い黒髪が、滝のように顔を覆い、表情を隠す。その間から見える、黒曜石の瞳は全く光がなかった。まるでガラス玉が眼の部分に入っているかのようだった。何度も同じ形に、人形のような彼女の口が動く。
「裏切り者に死を裏切り者に死を裏切り者に死を――――」
呪いの呪文のように、耳に残るひび割れた声だった。それでもその声の主を分かる者には、分かるだろう。彼女は緋搗だと言う事に。チェスをしている傍観者に洗脳された彼女の心に、愛する者の事などない。皐氣の事も、陽向の事も忘れて、操り人形にされているのだ。だが、その操り人形は泣いていた。心が壊れる前に泣いていたからだった。
「さあ、クイーンよ。出番だよ」
キングの前に置かれたクイーンが、もの悲しげに見えたのは気のせいだろうか。
「僕に楽しいショーを見せておくれよ」
そして、機械達と皐氣達の戦いは始まったのだった。序曲は終わり、開幕のベルが鳴り響いていた。

6、始まるゲーム（後書き）

もし、誤字脱字があった場合は、速やかに教えてください！！
きちんと直しますので……

7、迫る危機

いつまでこの同じ風景の中を歩き続けなければならないのだろうか。さすがに最初は興味を惹かれていた壁や床の質も、何でてきているか分かればつまらなくなってしまった。どれも同じ、チタン合鉄だった。と、言うよりもそんな気がした。何故ならば、それは見た目だけの判断だったからだ。

「……」

隣にいるアリィも、あの一件以来もう声は出ないようなので、話しようがない。話しかけたとしても、どうしても会話が続かない。続けられないのだ。彼の大体の表情の変化が分かっても、話せなければ会話にならないのだ。それは仕方のない事なのだが、お喋りな方な皐氣にはちょっとした拷問のようなものだ。だが他の二人に比べて、仲間がすぐ傍にいるという事は得なことなので、文句は言えない。だから今はとりあえず、別れてしまった二人に会う事を考えて進んでいるのだ。だが――――。

「……何かここ、さっきも通らなかったか？」

そう、彼ら、いや彼は根っからの方向音痴だった。皐氣は地図には詳しいくせに、方向に関してはてんでダメである、不思議な体質をしていた。アリィはどうだか分からないが、同じ場所を回っている事に気付いたのは彼だったので、そこまで方向音痴ではないのだろう。だがこの二人では、常人では簡単に見つけられる上への階段もエレベーターも、見つける事は困難だろう。だからこうして、同じ場所を少し変わったルートで歩き続けているのだ。

「何か気付いたこたぁねぇか、アリィ？俺にはここがどこだか、さっぱり分からん」

「……」

言葉は発せられないが、目で訴えてくる。彼にも分からないのだ、今の場所が。同じ場所だと言う事以外、全く分からないのだ。上に

行く事が問題なのではなく、どうすれば違う道に出れるかが問題だった。
「どうすればいいと思うか？こうなったら、わざと敵に捕まってみるか」
なんて皐氣がふざけた事を言ったら、アリィが必死になって止めていた。それは嫌だと言わんばかりに、彼の手を強く握って放さなかった。
「ダイジョブだよ、アリィ。そんな無茶、やらないさ」
その言葉を信じたのか否かは分からないが、とりあえず手は放した。路頭に迷う者の様に歩き続けている皐氣達の目の前に、やっと見た事のないものが現れた。それは変てこな看板だった。
「なんだこりゃ？」
そこに書かれている文字は、皐氣達の知らない文字のようだった。ミミズのような文字がのた打ち回るそれは、そこに一つしかなかった。他にもあるのかもしれないが、今はこれしか見える範囲になかった。
「なんて書いてあんだ？」
さっぱり読めなくて、困り果てる皐氣達に向かってくる足音がした。さほど近くないようだが、隠れる事に越した事はない。慌てて近くにあった柱の陰に隠れて、様子を見る。そこに現れたのは、一体のロボットと二人の人間だった。話し声が近づいてくる。
「なんでも侵入者がいるらしいぜ。ここに何の用があんのかねぇ」
「でもよ、そいつら見つけてダイラ様に報告すれば、一階級上がらせてもらえんだろ？」
「そうなのか！？」
「知らなかったのかよ。……でも、生捕りじゃねぇといけねぇんだぜ？面倒臭くねぇか？」
「そだな」
そう話しているうちにそいつらは、あの変な文字の書かれた看板の前に来た。何もせずに通り過ぎると思っていたが、彼らはそこで

立ち止まり、話し続ける。その間にロボットは、誰に命令された訳でもなく看板に触れた。そして何かを打ち込んでいるようだった。もっとよく見たいのだが、無理に覗き込めば彼らに見つかってしまいそうだった。はやる気持ちを抑えながらその光景を見ていると、不思議な事に、彼らの目の前には扉が出現していた。さっきまで何もなかった場所なのに、今はいつもその場にあるように、そこにあった。

「何であんなトコに扉があんだ？」

思わず出てしまった言葉に、ドキッとしたが、予想していたような事は起きなかった。皐氣が冷や汗を掻いているうちに、今までいた者達は消え、扉も消えていたからだった。

「消えた……」

言葉に出すと、余計に不思議になった。今さっきまであった扉の所へいくと、やはり何もなかった。あるとしたら、ロボットの触れていた看板だけ。他には何の変哲もない壁が、皐達を嘲笑うの様に続いているだけだった。アリィも不思議そうに、扉のあった場所に触れていた。

「何で急に扉が出てきたんだと思う？」

アリィは何も答えずに、看板を調べ始めていた。こういった謎が好きなのかもしれない。

「何か分かりそうかい、小さな探偵君？」

少し不服そうな課を押しているのは、皐氣の例えのせいだろうか。それはさておき、アリィは何かに気付いたようだった。だが、その気付いた事が皐氣に伝わらない。伝わりそうなのだが、少し違っているのだ。必死になって伝えていると、やっとアリィの思いは伝わった。

「お前はこの看板が怪しいってんだな？」

こくんとうなずくアリィ。

「で、ロボットが何をしていたのかも分かるんだな？」

再びアリィはうなずき、少し嬉しそうに笑った。

「んで、俺がお前を抱いて、看板に何かしたいんだろ？」
うんうんとアリィはうなずき、皐氣に向かって小さな子供が親に抱っこをせがむ様に手を伸ばしてきた。言葉では何も言わないが、アリィは早く、早くと急かしているようだった。そんな彼を皐氣は難なく持ち上げ、看板に手が届くようにしてやった。するとアリィは看板に書かれたいくつかの文字に、恐る恐る触れた。そうした全ての動作が終わるのを皐氣は待っていると、突然、壁に変化が現れた。
「おお！？」
壁に水を垂らしたかのようにそれが消え、上へ向かって伸びる一本の道が現れたのだった。それとは反対に、下へ向かって伸びるものも見て取れた。
「……恐るべき、神の領域」
こんな発達した防犯設備は、町のどこにもなかった。この仕組みは、ここならではのものなのだろう。侵入者を逃がさないための、トラップなのだ。きっと。
「とりあえず、罠かもしんねぇけど、上に行っとくか」
皐氣がそうアリィに言うと、彼は真剣な面持ちでうなずいた。罠である可能性は低いにしても、用心する事に越した事はなかった。皐氣達は一歩一歩慎重に階段を登っていく。途中、出れる様になっていた所があったが、目的地は最上階なので、スルーした。
いくら登ってきたのだろうか。嫌に響く足音に嫌気がさしてきた頃に、階段が遂に途切れた。皐氣達はよく調べてみたが、さらに上に続く道はないようだった。
「諦めて、外に出るか」
ため息交じりに皐氣がそう言うと、アリィは仕方なさそうにうなずいて、彼に付いて外へ出た。その時に機械的な声で『ここは二十五階です』と、告げられた。そんなに登ったつもりはないのだが、思った以上に登っていたようだ。
「最上階まで、後何階なんだろうな」

分からないと首を振るアリィ。それも当たり前なのだが、皐氣は何故だか残念に思った。

「じゃ、さらに上を目指して行くか」

自分を勇気付けるために言ったつもりなのだが、アリィもそれに励まされたようで、隣でうなずいていた。進みだした彼らを呼び止めるものはいない。だが、彼らを見張る者の影は、しっかりとあった。

そして彼らは気付いていなかった。ここが神の領域の最上階だという事に。誰よりも先に、敵地に踏み込んでしまった事に。

＊

茜は、数の増えてきた敵達から身を隠しながら進んでいた。皐氣達のフロアにはあまりいなかったのだが、ここ十九階は見張りの数が多かった。何故彼女はここが十九階だと知っているのかと言うと、敵の話を盗み聞きしていたからだった。何かなんでもいいので、ここに関する情報が欲しかったからそうしていたのだが、今いる階の事しか聞く事はできなかった。

「あいつらは上手くやっているのかしらね」

あいつらとはもちろんアリィ達の事である。皐氣は例外として、二人はどこか頼りなく、気弱な面が会った。特に栄井に関しては、何をしでかすか分からないトラブルメーカーだった。アリィには皐氣がいるが、彼には誰もいないのだ。もしかしたら、もう、また敵に捕まっているかもしれない。

「だったらどうしよう……」

何故こんなに心配になるのかは分からないが、今は上に向かわなくてはならない。先の事を考えて、心配な事を吹き飛ばさなくては。そうしなければ、身が持たない気がした。

「ポジティブに、ポジティブに！」
敵の目から上手く逃れながら、茜は上に伸びる階段を見つけた。誰もいないようだったが、手には銃を持って歩いていった。気をつけて登りきると、敵がすぐ傍を通った。こちらを見ていなかったので気付かれる事はなかったが、心臓に悪かった。二階ほど登れたので、今は二十一階のはずだ。そろそろ誰かと合流できてもいい頃のはずだ。だが、誰とも会わない。会えないだけかもしれないが。
「誰かいないの」
そう叫びたいが、喉の奥でその言葉を飲み込んだ。そんなことをしたら、敵を呼ぶ事になるだけだった。それだけは何とか避けたい。銃にも撃てる玉の限界があるようだから。
「シンニュウシャヲホソク、コレカラ、ハイジョサギョウニウツリマス」
気付かぬ間に、後ろに大きなロボットがいた。それは、天の国（オーバーグラウンド）で皐氣達を襲ったロボットと同じものだった。何故そんなものがここにいるのか分からないが、あの腹の銃で撃たれたら、一瞬で穴だらけになってしまうだろう。逃げるしかない。試しに持っていた銃で攻撃してみたが、特殊なボディなのか、はじかれてしまった。それに反応して、そのロボットも反撃してきた。何とかよける事は出来たが、ずっと逃げ続けられるかどうか――――
「シンニュウシャヲホソク、コレカラ、ハイジョサギョウニウツリマス」
「！うっそ！！」
確かに隠れたはずなのに、もう見つかってしまった。そしてまた同じ場所に出てくると、またあのロボットがいるのだ。戻ろうとすれば、後ろには同じロボットが重い足音と共に近付いて来ている。囲まれている。
「ちょっと、ヤバくない？」
その二体が一斉に銃を乱射する。必死に逃げて柱の陰に隠れると、銃の音は止んだ。だが、そこから一歩でもでれば、再び撃ってくる。

場所を変えないと、このままでは挟み撃ちにされかねない。立ち上がって動こうとすると、鋭い痛みが茜を襲った。
「っつ！！」
左足から血が流れていた。よけきれずに、玉が当たってしまったのだろう。それまで来ていたマントを脱いで、歯で破り、即急の止血をした。見る見るうちに、それは紅く染まっていく。これでは遠くまで逃げられない。
「かなり、ヤバくない？」
彼女の目の前に、ロボットが三体現れた。そして銃を彼女に向ける。
「ジ・エンドって感じ？」
銃の発砲音が、その階に鳴り響いた。

＊

やけに下の階が騒がしい。何かあったのだろうか。敵も慌しく動き出し、栄井は扉から出る機会をすっかり失っていた。上に続く階段を上がっている頃から、下は騒がしかった。その間に何人かの敵に鉢合わせてしまったが、茜から貰った銃で何とか撃退する事が出来た。だが、ロボットにはこの銃があまり効かないので、何発も撃つ羽目になってしまった。そしてやっと上に着いたと思ったら、この様だ。どうしようもなかった。
「茜達、大丈夫かな？」
栄井はそう思いながら天井を見上げた。当の本人が心配されているとも知らずに。
「アレ？なんだぁこりゃ？」
天井から僅かに紐が垂れている事に気付いた。擦り切れているし、色が黒くなってしまっているから、気付かれなかったのだろう。そ

れは彼からしたら難なく届く位置にあり、顔の前をフラフラと踊っていたので気付けたのだ。
「引っ張れってか？」
誰もそんな事言っていないが、目の前でこんなにも堂々と揺れられていると、引っ張ってくれと頼まれているようなものだった。もし、この時この場に皐気達がいたら、間違えなく止めているだろう。だが、ここに彼らはいない。止める者が、いないのだ。
「よっし！」
気合を入れるつもりはなかったが、自然と出た言葉がそれだった。見た目よりも丈夫そうな紐を引っ張ってみると、上からたくさんの埃を引き連れて、縄梯子が姿を現した。だらりと吊り下げられているそれは、くたびれた柳のようだった。所々に昔の面影を残す白い部分があり、それがくっきりと虎模様のように残っていた。あまり丈夫そうに見えないが、太い縄はまだ働いてくれそうだ。その行く先は暗く、何も見えない。懐中電灯でもあればよいのだが、そんな都合のいい物など持っていなかった。そもそも、ここに来てもその必要のなさは、目に見えていたのだ。だが、意外な所で役に立つ事が分かった。
まだ入るつもりはなかったが、栄井のいる階段の下の方から、話し声が聞こえてきた。外に出る勇気を持ち合わせていなかった彼は、仕方なしにそれを使い、狭い空間に身を隠した。さほど広くないが、隠れるには最適だった。すばやく縄梯子を巻き取り、自分がそこにいた証拠をなくす。しばらくそのまま固唾を飲んで待っていると、一体のロボットが現れ、二人の人間もやってきた。そして彼らは栄井に気付く事なく、外に出て行った。その後降りてもよかったのだが、彼のいる所はまだ先に進めそうだった。もしかしたら、通気口か何かなのかもしれない。そのために少し煤っぽいのだ。
引き返しても、敵がまたいつ来るか分からない。それなら、安全なこの中を通って進んだ方がよいのではないだろうか。危険を冒してまで、下に居続ける決まりはない。まずは様子を探ってみる事も

大切だろう。
「ちょっとキツイかも……」
などと文句を抜かしながら、這い蹲って彼は進みだした。
しばらく進んでいて気付いた事は、この通気口は全ての部屋に繋がっていると言う事。そのために、時々金網から光が漏れてきていた。それを頼りに進んで行けば、ここについての情報を聞きながら進めるし、何より敵に見つかる事がない。しつこい様だが、この中が安全なのは確かなのだ。そして今いる所は、二十二階。最上階は、二十五階。そして、そこに司令役がいる事が分かった。その名は、ダイラ。あまり大きな動きを見せていないが、侵入者には気付いている。そして栄井らを捕まえるために、刺客を何人か用意してあるようだった。その中に、聞き覚えのある名前があった。
「緋搗……」
いつ、どうやって彼女の事を攫ったのか知らない。だが、彼女は洗脳されているらしい。きっと、随分と前から捕まっていたのだろう。何とかして助けたいのだが、洗脳されているとなると、厄介だ。もしかしたら、自分達を殺すように命令されているかもしれないし、自ら死を選ばせるようになっているかもしれないからだ。もし、それを知らない皐氣達が彼女に会ってしまったら、大変な事になる。皐氣は彼女の親友だ。何の躊躇もなく、彼女に近付くだろう。そしたらきっと――――。
「ダメだ、ダメだ」
最悪の未来を想像して、栄井は震え上がった。そんな事考えてはならない事など、分かっている。だが、もしかしたら、と言う事があるのだ。どんなに小さな可能性でも、気を抜いてはならない。だからそれを避けるために、早く皐氣達と合流しなければならない。彼らの居場所は分からないが、最上階を目指せば、きっと会える。きっと、会える。
まだ、自分はこんな勇気を持っているとは、知らなかった。人とぶつかり合う事が嫌で、人と付き合う事が苦手だった。そんな栄井

に光を燈してくれたのは、皐氣だった。いつも暗く、どんよりとしていた心が、急に明るくなったのだ。彼のたった一言で、一つのプレゼントで。懐かしい、だが、今も鮮明に覚えている。彼は、もう覚えてないだろうが、栄井にとっては特別な日だったので、よく覚えている。

友が友を殺さずにすむ様に、早く先へ進まなければ。焦る気持ちと共に、栄井は確実に進んで行った。

ある程度進んだところで、いったん外に出てみる事にした。敵の気配がしないところで金網を破り、下に飛び降りる。結構な高さがあったので、足が痺れた。確か、ここはまだ二十三階のはずだ。始めは順調だったのだが、上に上がれば上がるほど道は複雑になり、通り難くなった。だからなかなか上に行けなくなったのだ。辺りには、まだ敵の気配はない。どうやら全員で払っているようだ。それなら好都合だった。敵と遭遇せずに動ける事に、越した事はない。ホッとして、先へ進もうとした栄井の足は止まった。

「ハロォ、侵入者」

へらへら笑いながら手を振っているのは、二十歳前後の男。もちろん知った顔ではない。ダイラが送ってきた刺客だ。旅人のような格好だが、それには不釣合いな大剣を背中に背負っていた。まだそれを抜くようなそぶりは見せないが、いつからそこに居たのだろう。栄井が降りてくる時には誰もいなかったし、気配すらしなかった。気配を消し、どこかに潜んでいたのなら、彼に適う相手ではない。逃げなければ。

「何だよ、そんな恐い顔すんなって。殺しやしねぇよ」

殺さないという言葉に、少し驚いたが、隙を見せる訳にはいかない。もしかしたら、敵の罠かもしれないからだ。

「でも、逃げられても困るんだなぁ。だから大人しく捕まって」

カワイ子ぶって言った様だが、低い声で言われては、余計警戒心を強めるしかないではないか。それに、大人しく捕まるつもりもない。

「警戒心丸出しだなぁ。そんなに俺って怖い顔してっか？」
「ああ、十分に」
「おっ、やっと口開いてくれたな」
「僕はロボットじゃありませんから。話して当然です」
「ハハハ！そりゃあ、そうだ」
何か調子の狂う奴だ。それに、どこか皐氣に似ている。性格というか、なんと言うか。ともかく能天気な所など、本人そっくりだ。
「俺の名は、溯羅（さくら）。片桐　溯羅だ、よろしく」
ニヤッと笑って、手を差し伸べる。その笑みには邪気がないが、彼は敵だ。こんな事をしていいのだろうか。
「お前は？」
「……栄井、陽向」
「無愛想だなぁ。突然襲ったりなんかしねぇよ。俺はソーユーの、大っ嫌いだかんな」
その言葉に嘘はない様で、けして剣に触れる事はなかった。ぎこちなく握手をしてやると、嬉しそうに笑った。本当に彼は敵なのか、一瞬考えてしまった。
「じゃ、自己紹介もすんだトコで、早速一つ言っとくぜ。お前、降参しろ」
さっきとがらりと口調が変わり、殺気が溯羅を包む。恐い。久しぶりに、そう思った。だが、ここで負ける訳にはいかないのだ。自分には、行かなければならない所がある。伝えなければいけない事があるのだ。そのために、進むしかないのだ。
「もう一度言う。降参しろ。そしたら痛い目に遭わないですむぜ」
「……やだ」
「何だ？聞こえないぞ」
「僕にはやらなくちゃいけない事がある。進まなくちゃいけない理由がある。ここで止まる訳にはいかないんだ。どうせ捕まったとしても、僕は何も言わないし、脅しにも動じない。降参するくらいなら、死んだ方がマシさ」

「……それが、お前の答えか」
揺るがせない、この想い。殺される事は、正直恐い。それに嫌だ。だが、友が殺されるかもしれないのに、何もできずにいるくらいなら、少しでも前に進みたい。自分の勇気を、信じてみたい。僅かな可能性に、賭けてみたい。
「そか、残念」
ふっと風が栄井の頬を撫でたかと思うと、溯羅は既に彼の後ろにいた。振り返ると、凍てついた彼の黒い瞳と栄井の目が合った。
「ほんと、残念」
その刹那に、大きな剣が彼の目の前に迫ってきていた。

8、真実の白黒

銃声の後に目を開けた茜は、もう自分は死後の世界にいるものだと思った。だが、彼女がいる場所は、綺麗な花畑でもなければ、大きな川に橋が架かっている所でもなかった。機械音が鳴り響く、油臭い場所のままだった。体に恐る恐る触れてみるが、穴も開いていないし、血すら出ていない。至って健康な状態だった。

「何で……？」

「何で？じゃねぇよ！せっかく助けてやったのに、お礼の一つもなしか？」

聞き覚えのある声。見覚えのあるふくれっ面。細められた黒目は、猫のように茜を睨んでいた。相変わらずぼさぼさな茶色い髪は、電灯に照らされて少し黒く見えた。信じられないが、頬をつねってみても、その人は消えなかった。幻覚ではない、本物の皐氣がいる。

「アンタ、何でココにいんの！？」

「ん？それはなぁ、ロボットに見つかっちまってさ、上に逃げようって思ったんだぜ。だが、その階には上に行く道はない！ってこって、下に来てみたら、見覚えのあるロボットがいやがる。でもって、それまた見覚えのある生意気な娘が襲われそうになってんのが見えた訳。で、助けてやっただけさ」

「アリィは？アリィはどうしたの？」

「……はぐれちまった」

信じられない。アリィが一人になってしまったら、助けを求めて声を出す事も出来ずに捕まってしまうではないか。何とか逃げ切れたとしても、また会えるかどうか……。

「危ねっ！！」

再び響く発砲音に、考え事が吹っ飛ばされた。茜を抱えるようにして、皐氣は物陰に飛び込んだ。それでも発砲音はしばらく止まず、鼓膜が破れそうだった。

「とりあえず、こっから逃げっぞ！」
銃声に負けじと、皐氣が叫ぶ。同じように茜も叫んだ。
「どうやって？」
「あ？聞こえねぇぞ！」
「どうやって！？」
「あっちに俺が来た階段がある！それに向かって走れ！」
「無理よ！アタシ、怪我してるもの！！」
「安心せい！俺がおぶってやっから！！」
そう言って皐氣は本当に茜を背負い、壁の中にある階段へ逃げた。その間に撃たれてしまうのではないかと思ったが、弾切れだったようで、騒々しい音を立てて、銃に弾を込めているようだった。その為、一発も弾が当たることなく、階段に戻る事が出来た。
「さあ、上に行くぞ」
「えっ！ちょ、ちょっと待って！」
茜が止めても、止まらずに皐氣は階段を登ってしまう。そんな彼を止めるために、茜は髪を思いっきり引っ張ってやった。
「いてて！何すんだよ、馬鹿！！」
「馬鹿じゃない！って、そうじゃなくて、止まりなさい！」
「何で！？」
「いいから、ストップ。ストーップ！」
なかなか止まろうとしない皐氣の髪を引っ張りながら言っていたら、彼は止まり、茜を降ろした。そして彼女の目の前に腰掛け、苛立たしげな顔をしていた。茜は、こっちのほうがイライラするんですけど。と、心の中で悪態を付いた。
「用件は何だ」
ぶすっとした顔で、不機嫌に言う皐氣。それに便乗して、茜まで不機嫌になった。
「聞きたくなければ進んでもいいのよ、別に。でもね、無鉄砲に進んでも、どうせ迷うだけだから話してあげようと思っただけなの。嫌なら、先に進みましょ」

「俺だって先に進みたいんだぜ。だけど、お前が話があるって言うから、止まってやったんだよ」
「アタシは話があるって言ってない。止まってって言ったの」
「同じようなもんじゃねぇか」
「違うわ」
「違わねぇな。止まれって言われたら、話があると思うのが普通だろ」
「アンタだけに通じる常識よ」
「俺だけじゃねぇな、絶対」
「アンタだけよ、絶対」
嫌味を嫌味で返し続け、たどり着いた結果は疲れ。こんな無駄な事に時間を費やすくらいなら、少しでも前に進みたいと言う気持ちは、茜も皐氣も同じだった。そのゆえに、ため息が漏れた。
「で、何なんだよ」
「アタシが言いたい事は、二つ。一つは、最上階は二十五階だって事」
「それ、マジか？」
「え？……そうだけど？」
「俺とアリィが敵に見つかったトコ、そこだった」
「ホント！？何か、他の階と変わった所とか、なかった？」
「別になかった気がすんな」
「……使えないわね」
小さく悪態を付く茜を見て、皐氣は言った。
「聞こえてんぞ、俺、地獄耳だから」
少し驚いたような表情をしてから、さらに言った。
「嫌味な奴って、どこまでも嫌味な奴ね」
「悪かったな」
どうしてこうも、気が合わないのだろうか。不思議である。
「ああもう、また話がずれたわ。……これ以上何を言っても、話の軸がずれるだけだから、先を続けるわね」

苛立たしげに髪を掻き毟りながら、茜は言った。無気力だが、皐氣は真剣に聞いていた。
「二つ目は、アタシ達には刺客が送られてきているわ。何人か知らないけど。あのロボット達に会う前に、敵から盗み聞きしたの」
「それで？」
「だから、これからは上を目指してただ進むより、陽向達と合流した方がいいと思うの」
「刺客が陽向達を襲ってくるかもしれないからか」
「それだけじゃなくて、上に行ったとしても、ここと何も変わった所はないんでしょ？」
確認するように聞く茜に、皐氣は頷いた。
「だったら、なお合流しといた方が、動きやすい。バラバラに動いたって、アンタ達みたいに敵に見つかるのが落ちよ」
「じゃあ、どうすればいい」
「とりあえず、一階上がるごとに様子を見ましょう。もし、陽向達がいなかったら、次の階に進む。それでいいわね？」
「ああ、いいぜ。じゃ、行くとするか」
そう言って皐氣は再び茜を背負い、二十階を目指して進み始めた。

＊

振り下ろした剣に、肉を斬った感触がない。その代わりに、何か固い物で、剣は跳ね返された。それは薄い水色をし、淡く光を放っていた。それを、遡羅は前に一度見た事があった。空民が使う、不思議な力だった。
「お前も、侵入者の仲間か」
「……」
目の前の少年に問いかけたが、彼は答えずに、じっとしていた。

「ア……リィ」
陽向は予期せぬ者の登場に驚きつつも、喜びを隠し切れなかった。彼がここにいるという事は、皐氣もどこかにいるはずだ。だが、彼は姿を現さなかった。
「……空民。邪魔だ、どけ」
遡羅がそう脅したが、アリィは伸ばした腕を曲げもせずに彼と対峙していた。その伸ばした腕から、その不思議な力が出ているのだ。バリアの様なその物体は、彼と栄井を綺麗に覆い、隙を与えない。アリィが腕を下ろすまで、きっと消えはしないだろう。
「邪魔だと言っている。どけ、空民」
「……」
何も言えないアリィは、震えながらも腕を下ろさなかった。もし、この腕を下ろしてしまったら。そしたら、自分と栄井が殺されてしまう事が目に見えている。だが、冷たい目をした遡羅は恐い。どうしようもなく恐く、気持ちが折れてしまいそうだった。それでも、ここに来た以上、皐氣に付いて来てしまった以上諦める訳にはいかなかった。
「アリィ、皐氣は？一緒じゃなかったか？」
振り返れずに、そのまま首を振るアリィを見て、陽向は不安のどん底へ落とされた。アリィと一緒じゃない？だったら翠は、一人の可能性が高くなる。そしたら余計に緋搗に近付きやすくなってしまうではないか。どうにかこの場を切り抜け、皐氣を探しに行かなければならない。緋搗と彼を会わせてはいけない。絶対に。絶対に――。
「アリィ、どこからここへ来た？道はどこにある？」
そう彼に耳打ちすると、彼は顎でさして教えてくれた。その先には何の変哲もない壁。だが、そこにどの階にもあった看板が、そこにもあった。そこから彼も来ていたのだ。
「翠とは、どこで逸れたんだ？」
分からないと首を振るアリィ。ダメだ。彼と会うためには、情報

が少なすぎる。せめて、どの階にいるのか分かれば――――。
「お仲間さんをお探しのようだけど、新型のロボットに殺られちゃってるんじゃない？」
「新型のロボット？」
いつの間にか剣を鞘に戻して、床に胡坐を掻いている遡羅が言った。ふてくされたような表情でこちらを見ていて、殺気は減っている。わざとだろうか。
「ココで新しく作られたロボット、なんつったかな……名前は忘れたけど、とりあえず新しいもんだぜ」
「どこが？」
「お前らは付けてねぇみたいだけど、ジュスチセに反応して獲物を追うんだ。そのジュスチセから生体反応が消えるまで追い続ける、ハンターみたいなもんだな」
「それに、僕らの仲間が殺られたって？おかしくない？ジュスチセに反応して動くんだったら、彼らに反応しないはずだ」
「フツーに考えたらそうなんだけど、新型って言ったじゃん。それはモデルになった奴の事で、今ここにいる奴の事じゃねぇの。ココにいんのは、殺戮専用ロボット。だから、インプットされてる奴、全員死ぬまで追い掛け回すぜ。飢えたライオンみてぇに」
「何でそんな事僕らに教える。仲間に報告されるかもしれないのに」
「だってあんたら、そうするためのもん、持ってねぇみたいだし。だから仲間の状況も分かんないっしょ？だから、ロボットの事も知らない」
「芝居かもしれない」
「もし芝居だったら、もうとっくのとうに俺は死んでるよ」
面白そうに微笑みながら、遡羅は立ち上がって再び剣を手にする。すると殺気も蘇った。
「そろそろ、おチビさんのスタミナ、切れる頃だろ？」
その言葉通りに、アリィは苦しそうに呼吸していた。栄井が慌て

て彼の肩を支えてやると、彼は少しだけ頷いた。大丈夫。そう伝えたかったのだろう。
「平均的に、その技を使う空民がもつのは、ほんの数分。大の大人でも、力を出し切ってそれだぜ？そんなちっちゃいのがどう足掻いたって、数秒もって立派な方だ」
「アリィ、無理するな。力を使うのをやめろ」
「そうそう。あんま力使いすぎっと、どうなるかお前は知ってる筈だぜ。それを、お前はその目で見た事があるだろ？」
「……」
答えないアリィの瞳に、明らかに怒りの感情があらわになっていた。栄井は彼のそんな表情を見るのは、初めてだった。怒りはすれど、ここまで悲しい怒りを宿した瞳は見た事がなかった。彼の過去に、何かあったのだろうか。
「アレ？ひょっとして、聞いてないの？その空民から」
「何のことを」
「そいつの両親殺したの、俺なんだよね」
「なっ！！」
そんな事、初耳だった。両親が殺されたと聞いた事はあったが、まさか、神の領域の者から殺されていたなんて。そのせいで、アリィがあんな瞳をしているのか。
「そいつの両親も同じ力使ってさ、そいつ護ってたんだぜ。疲れては交代してさ、必死になってそいつ護ってんの。マジ、その時ウケたわ。だって、ありえなくね？こんな役立たず護っても、意味ねぇじゃん」
楽しげに話す遡羅は気付いていない。栄井が握りしめている拳に。湧き上がる怒りに。
「子供を護るくれぇなら、自分の身を護ってりゃいいのにさ。偶然狩りに来てて、見つけた獲物はそいつだったんだぜ？あいつらは無視しといてやろうって思ったのにさ、『この子だけは』『この子だけは』の繰り返し。どうしてそんなに子供が大切なんかね？言う

事聞かなくて、ウザくて、使えない。それが子供だろ？そんなもの護るくらいなら、ロボットでも使えばいいのによ」
「……」
アリィは唇を噛み締めている事しか出来なかった。自分には昔から声がない。前の窮地に声は出たが、それきりだ。使えないと言われても構わなかった。だが、大好きだった両親を、大切な宝物を汚される事は、すごく悔しかった。言い返したくても、言い返せない、自分が悔しかった。もし、今声が出るのなら、きっと遡羅に向かって悪態をついているだろう。だが、どんなに頑張っても、声が出る事はなかった。
「だから面白くなくなって、そいつらを殺してやったんだよ。不愉快だったけど、気分はスッキリしたから良かったぜ。やっぱ、人殺すのって、面白いよな」
腹を抱えて笑い出した遡羅に、栄井は持っていた銃で撃った。それはマントを掠めて、その場を静めた。
「やっと殺り合う気？」
「……恥ずかしくないのかよ」
「何が？」
「人を殺す事を自慢して、恥ずかしくないのかよ！！」
「何だよ、急に。冷めるなぁ」
「答えろよ。恥ずかしくないのか？」
「恥かしい？全っ然！人を殺して何が悪い？要らない物を処分してやっただけだぜ？」
悔しい。許せない。悲しい。アリィの小さな心の中で、たくさんの感情が渦巻き、彼を混乱させる。口答えできない事が、悔しい。両親を殺した遡羅が、許せない。大切な宝物を穢されて、悲しい。口を開いても、かすれた息が漏れるだけ。肝心なものが、出てこない。声が、言葉が出てこない。そんな彼の頬を、雫が伝う。生暖かい雫だ。
それを見た栄井は、遡羅を睨む。平気な顔をして、笑っていられ

る彼が赦せなかった。
「人を殺して平気でいられるなんて、気が狂ってる。おかしい」
「おかしくないさ、人は時として冷徹に生きる事も大切なんだよ」
「そんなの間違ってる。我が子を護ろうとして何が悪い。人が人を愛して何が悪い。機械じゃ出来ない事が、僕らには出来るんだ。機械にはないものが、僕らにはあるんだ。何で、そんな人を簡単に殺せる。要らない物だなんて言える。何故、人を人として見れないんだよ！」
「人が憎いからだよ！俺を人じゃなくした、人間が憎い！それが理由だ！」
「何……だって」
思わぬ発言に、言葉が詰まる。返す言葉が、見当たらない。
「俺は生体実験されて、もう人間じゃない。機械混じりの人間なんだよ！知ってるかよ、ここでは俺みたいなのを造るために、何人もの人間が狩られてくる。知ってるかよ、生身の体に機械を入れられる気持ちを。そんなの知ねぇだろ。俺はもう、人間になれねぇんだよ！俺はもう、人間じゃねぇんだ！」
「だからって、人を殺していい訳じゃない。憎いのなら、何故怒りの矛先をそっちに向けない。何故、他の人に当たるんだ」
「埋め込まれた機械がそうさせるからだ。絶対に逆らえない」
「でも、人を殺さないようにする事は出来るだろ」
「そんなもん、出来たらとっくにやってるさ。俺だって好きでこんな事してるんじゃないんだよ、本当は。人を殺したくない。だけど、俺の中の機械が、言う事を聞かねぇんだよ」
剣を床に突き刺し、遡羅は息苦しそうに呼吸を繰り返す。そう、彼はまだ呼吸している。
「君は、遡羅はまだ息をしてるじゃないか」
「は？」
「まだ、呼吸をしてる。この大気を、酸素を必要としてる」
「だからなんだよ」

「機械には、ロボットにはそんな事出来ない。でも、遡羅。君は呼吸をしてるじゃないか。完璧に機械に飲み込まれたわけじゃない。大丈夫。君はまだ、人間だよ」
「……そんなの、綺麗事に過ぎねぇよ」
「僕の友達が、親友が、変えてくれる。この、機械に支配された世界を」
「そんな事、出来るわけねぇだろ」
「出来ないかもしれない。でも、僕らは諦めずにここまで来た。変えたいんだよ、この世界を。不可能かもしれないけれど、やろうと思う気持ちが消えない限り、可能性は消えやしないさ。どんな困難にも立ち向かってやるさ。君の中の機械も、止めてやるよ」
「……」
「僕はココに、人を殺しに来たんじゃない。機械を殺しに来たんだ。失くさなきゃいけないんだよ、これ以上悲しみを増やさない為に。これ以上、君みたいな人を造らない為に」
いつの間にか解かれたバリアに、不安を感じつつも、栄井は遡羅に近付く。その腕を、アリィが掴み止めたが、彼は優しくその手を解いた。そして「大丈夫だよ」と言って、微笑みかけた。乾きかけの涙が、胸を締めた。
栄井は遡羅の前に立ち、恐れずに手を差し伸べた。
「君の中の機械からも、翠はきっと解放してくれるよ。君の中の機械は敵だけど、君みたいな人間は敵じゃない。変わる為には、自分から動かないといけない時もある。そりゃ、変わり難いかもしれないけど、自分が動けば、周りの人も動いてくれるよ」
「俺が……敵じゃないってか？」
「そう言われると返事に困るんだけど、人を殺したくないって君の気持ち、僕は信じたい」
「……」
「さあ、この手を取って。殺したいなら、僕を殺せばいい。だけど、変わりたいなら、力を貸して欲しいんだ」

「俺に変われる自信はない。だから、ここで壊して欲しい」
そして遡羅は剣を手に取り、引き抜いた。そしてそれを、栄井にではなく、自分自身に向ける。彼は死ぬ気なのだ。変われることが出来ないのなら、死を以って償う。それが、彼の意思だった。そんな彼を見て、栄井は悲しそうな顔をしていた。これじゃいけない。間違っているんだ、死ぬ事は。アリィは心の中で叫ぶ。あの時のように。
「死んで、欲しくない」
言葉が自然と出ていた。驚いて、栄井達が振り返えり、アリィを見る。
「死んで解決する事、とっても少ない。償い、死ぬ事じゃ出来ない。償うなら、その人達の分まで、生きる。ずっと、ずっと、元気に生きる」
「でも俺は———」
「変わること、恐いから逃げてる。それ、卑怯。それ、殺された人達、失礼。恐がっちゃいけない。立ち向かわなくちゃ、いけない。挫けちゃ、いけない」
「……」
「一緒に、生きる事。それで、それだけで、生きる希望になる」
「そうだよ、遡羅。憎しみだけじゃ、人は生きていけない。それだけじゃ、疲れちゃう。だったら一緒に行こう」
顔を上げると、今まで向けられた事のない笑顔がそこにあった。敵であるにも関わらず、何故こうも綺麗に笑えるのだろうか。頬の筋肉を緩める事が出来るのだろうか。
だが、この手を取っていいのだろうか。俺は敵だ。彼らの憎むべき、敵なのだ。それを信じる事が出来るだろうか。
「今は、信じてもらえなくてもいいよ。心がある。それだけで、十分だから」
「心……」
言われた事など、なかった。憧れはしていたが、言われる事はけ

して、きっと彼らに出会わなかったら、なかっただろう。心がある。機械の入ったこの体でも、心はまだ消えていないのか。栄井の柔らか笑みが、遡羅に向けられる。アリィの戸惑ったような微笑みが、遡羅に向けられる。……この二人なら、信じてもいい気がする。

伸ばし、掴みかけた遡羅の手を心の中の声が止めた。『そいつらを殺せ』。『その剣で、斬り捨てろ』。いつも命令してきた、機械の声。だが、今なら逆らえる。もう、恐くない。

「もし、俺が暴走した時は、止めてくれるか？」

「いいともさ」

繋いだ手は、けして離れない。例え、過去にどんな事があったとしても、変わる勇気があれば、人は何にでもなれる。だから、人は信じる事が、信じられることが出来るのだ。

＊

暗い、暗い部屋。そこにいる傍観者は、爪を噛んでいた。苛々していた。お気に入りの殺戮兵器が、寝返ってしまったからだ。

「あそこまで育ててやったのに……」

開いている指で、チェス盤を叩く。そこは、はじめとだいぶ配置が換わっていた。キングの近くにまだクイーンはあるが、白のナイトに黒のナイトが取られた。そして、白のナイトが増えてしまった。ポーンに囲まれていたビジョップも、まんまと逃げられてしまった。

「何故、上手くいかない」

これの思ったとおりに、チェスは進んでいなかった。それが彼の苛立ちの元。何とかして、勝たなければいけない。絶対に、負ける事は許されない。

傍観者が爪を噛む音と、チェス盤を叩く音が、不協和音を奏でていた。

9、届け言葉（前書き）

サブタイトルの『言葉』の部分ですが、『言葉』でなく『想い』と読んで下さい。言葉のままでもいいのですが、想いと読んだほうが、内容に近いので。

9、届け言葉

「お前らの仲間、何処にいる訳？」
溯羅が、少し焦り気味に聞いた。彼らは今、二十四階にいた。先ほどまでいた所には、見張りが来るようになってしまったので、じっとしているには危険すぎたのだ。溯羅は別にいいとして、栄井やアリィは侵入者なのだ。まだ溯羅の裏切りがバレていないとも限らない。だからこうして、こそこそと動く事しか出来ないのだ。
「知ってたら苦労しないよ、なあ、アリィ？」
また声が出なくなっているアリィは、難しい顔をしながら、うんうんと頷いた。彼らの居場所が分かれば、だいぶ楽に行動できる。せめて、あまりその場を動かないでいて欲しかった。そうした方が見つけやすいし、迷わずにすむのだから。
「それにしても、ココはすごいね」
「何だ、藪から棒に」
「僕らの住んでる町と、まるっきり違う。こんな壁も見た事ないし、そんなに技術が発達してる事も知らなかった。この町には、世界には、分からない事が多すぎるよ」
「そうかも知れねぇな」
機械で決められた日常生活を送り、機械で決められた通りに働き、機械で決められた通りに一日を終了する。普通だったら疑問に思うのに、この国の者は皆、機械が在る事が当たり前になってしまっていた。まるで、何者かに洗脳されているかのようだった。
「とりあえず、この階のどっかにあまり使われてないコンピュータールームがあったはずだ。そこへ行こう」
溯羅の提案に、一同は合意し、動き出す。階段を出、長く真っすぐな廊下に出る。見張りはあまりいないようだが、防犯用のロボットが何体か浮いていた。それをうまく栄井が打ち落とし、先へ進む。時々敵に出会う事があったが、それは溯羅が対処してくれた。時に

みぞおちを打ち、時に出鱈目を流した。敵に動きを読まれない為には、そうするしかなかったのだ。
「あった。ここだ」
溯羅が、何の躊躇もなくある部屋の中へ消えていく。それを慌てて追って、栄井達もその部屋に入った。
「わぁ……」
予想外の部屋のすごさに、栄井とアリィは言葉を失くしてしまった。そこは、部屋の全体がほぼモニターになっており、さまざまな場所が次から次へと映し出されていた。こんなにも多くのモニターから見られながらも、良くココまで来れたと思う。敵に見つかってしまうのも、このモニターの量なら分かる気がした。
「仲間とは、どこら辺から逸れたんだ」
「僕は、分からない。アリィは？」
栄井がアリィに聞くと、彼は首を傾げながら、指を二本立てた。
「二十階あたり？」
さらに首を傾げたアリィだったが、自信なさそうに首を縦に振った。
「じゃあ、そのあたりのカメラを集中的にモニターに映そう」
溯羅がそう言って、備え付けられたキーボードを操作する。しばらくそのまま、彼がキーを叩く音しかしなくなり、妙な緊張感が彼らを包んでいた。何か、嫌な予感がする。栄井は、それを敏感に捉えていた。もしかしたら、皐氣は緋搗に会ってしまっているかもしれない。もしかしたら、もう手遅れかもしれない――――。
「映るぞ」
栄井は、その溯羅の言葉に、嫌な予感を吹き飛ばしてもらった。栄井は真剣にモニターを見る。次々と二十階を映すモニター。罅が入ったメガネでは、少々見づらかったので、外す。曇ってしまった視界だが、さっきよりは良かった。アリィも必死になってモニターを見ており、皐氣達を一生懸命に探していた。空室の部屋。広い廊下。銃を持って歩く敵。それに付いていくロボット。様々なものが

それに映し出されるが、一向に皐氣達は見当たらない。もう、他の階へ行ってしまったのだろうか。
「次の階、映すぜ」
溯羅が、再びキーボードに触れようとした時、栄井の目が何かを捕らえた。
「待って！あの、あのモニターの場所を拡大してもらえる？」
「あ、ああ」
突然止められて、少々驚きつつも、溯羅は指示された場所を拡大する。するとそこには、長い髪をたらして進む、女の影があった。
「あの影を追って！」
栄井の指示に従い、キーを叩く。すると、そこは二十二階を映している事が分かった。彼らがいる場所は二十四階。二つ下の階に、彼女はいるのだ。
「アイツは……確か緋搗っつたかな？ダイラが連れてきた奴だ」
「……彼女は、僕らの友達だ」
「そうなのか。だからダイラが連れて来たんだな」
「……でも、何で彼女がそこに？」
「アイツは皐氣を殺すために選ばれた、人形だ」
「翠を！？」
「お前は知ってるだろ？その皐氣って奴の考え。それがダイラには気に喰わないんだ」
「それだけのために、緋搗を連れ去ったのか？」
「友に殺させた方が面白いだろって言ってたぜ」
「そんな……」
酷いとしか言いようになかったが、それがダイラにとっては、楽しみでしかなかったのだ。人を殺す為に、人を利用するような奴だ、そんな事をして当然だろう。
「ちょっと待てよ……だったら」
そう呟いて溯羅は猛烈な速さでキーを叩き始めた。何をしているか、始めは理解に苦しんだが、漸く見当がついた頃には、彼はもう

目当てのものを見つけていた。
「やっぱりだ。いたぞ、皐氣が」
一つのモニターが映し出す背中は、間違いなく彼だった。その背に背負っているのは、きっと茜だ。足に怪我をしているのが、モニターからでも分かった。
「今、緋搗はどの辺りにいる？」
「ちょっと待ってろよ……皐氣達から、あんま離れてないトコにいるぞ」
「知らせなきゃ！」
「どうやって？」
溯羅の問いを聞く前に、栄井はその部屋を飛び出していた。
「待て、陽向――――！」
溯羅の止める声が、遠く聞こえた。栄井は焦っていた。もうこんなにも近く、魔の手が及んでいるとは思わなかったのだ。知らせねばならない。皐氣に危険を、伝えなければ――――。

＊

自分が狙われているとは知らずに、皐氣はくしゃみをしながら歩いていた。ずずっと鼻を啜ると、後ろから茜が言った。
「風邪？こんな時に、暢気でいいわねぇ」
「風邪じゃねぇよ、きっと誰かが俺の事を噂してんだよ」
「……ベタな答えね」
「悪かったな、ベタ」
怪我をしても口の減らないガキだ、と心の中で皐氣は悪態を付いた。だが、そう思いつつも安心していた。まだ、口答えする元気があるのなら、傷はそれほど深くないのだろう。マントで止血はしているが、それに血が滲み、紅く染まるほどだったので、皐氣は口に

して言わなかったが、心配していたのだ。
しばらくその階を廻っていたが、栄井達のいる気配はしなかった。ここにはいないのだろう。次の階に進まなくては。そして早く合流して、不安を一つでも減らしたかった。今の皐氣の頭の中は、ババ様の言葉で一杯だった。
———大切な仲間を一人失うぞ
それは、もしかしたら、栄井の事ではないかと彼は考えていた。逸れてしまったアリィも仲間だが、栄井の方が親しみ深い仲間だった。大切な、友達だ。そんな事を考えていたら、ふと緋搗の顔が浮かんだ。懐かしく思った。別れてから、もう何日経ったのだろう。家が近いせいか、昔から仲が良く、兄弟と間違われる事もあった。それほどに昔から、彼女は男らしく、逞しかった。親が仕事で忙しい時は、皐氣の家に泊まったり、反対に、皐氣が彼女の家に泊まる事もあった。今頃、緋搗は何やっているのだろうと考えると、急に皐氣は悲しくなった。学校から帰る時、塾の帰り道、遊びに行った帰り。よく緋搗に会った。「おかえり」、そう言われた事もあったし、「親の帰り、遅くなるみたいだからさ、泊まってもいい？」、そう言われる事もあった。
「何、ニヤニヤしてんのよ」
「何だよ、人が思い出に浸ってる時に。話しかけるな、能無し娘」
「失礼ね、誰が能無しよ」
茜のふくれっ面と、緋搗のふくれっ面が、ダブって見えた。似ている、と思った。性格だけじゃなく、顔も。そういえば、茜も黒髪だ。とても綺麗な。緋搗も綺麗な黒髪で、その髪を自慢していた。急に、胸が苦しくなった。
「どうしたの？皐氣？」
「いや、何でもねぇよ。ただ、俺の知り合いに、そっくりだなって思ってよ」
「知り合い？もしかして……」
そう言って、茜はニヤついた。厭らしい笑い方だ。

「何だよ、変な笑い方して」
「いやぁ～、ろくでなしのアンタでも、恋人がいるんだなぁって思って」
「はあ？」
「だって、そうでしょ？あんなに楽しそうに笑ってるんだもの。思っているのが恋人だって、誰にも丸分かりよ」
「そんなんじゃねぇよ」
「いいのよ、隠さなくても。アタシ、そういうの気にしないから。ゴメンなさいね。夢の一時を、お邪魔しちゃって」
「だから、そんなんじゃねえっての！」
「照れちゃって、アンタも可愛いトコ、あんじゃない」
「うっせぇ！黙ってろ怪我人。傷に響くぞ」
「はいはい、邪魔者は退散しますよぉだ」
何処までも嫌味な奴だと、皐氣は思った。そして、自分は笑っていた事を知った。ただの親友としか思っていなかった緋搗の存在が、あんなにも大きいなんて、思っていなかった。それほど、彼女を想っていたという事だろうか。そう考え付いてしまった皐氣は、ありえないと首を振って、その考えをかき消した。ありえない。緋搗は、腐れ縁で会った、ただの女友達なのだから。愛しいだなんて、思う訳ないのだ。考えすぎで、頭がいかれてしまったのだろう。きっとそうに違いない。あんなじゃじゃ馬、好きな訳ない。
「さ、皐氣。ココには誰もいないみたいだし、次行きましょ」
「そうだな。階段はどっちだ？」
「また方向忘れたの？……飽きれたぁ」
「悪かったな、方向音痴で」
「別に、方向音痴は攻めてないわよ。学習能力のない事を攻めてるの」
「一言多い小娘が。方向はどっちだって聞いてんだよ」
「頭の悪ぅいお兄さんに教えてあげるわ、方向はあっちよ？分かる？あっちぃ」

「分かったよ、この毒舌」
「良かったわ、この木偶の坊」

＊

懐かしい、大好きな背中が見える。あの背中を、ずっと前から好きだった。ずっと、追い続けてた。届くかどうか分からない想いを抱いて、私はずっと彼の背中を追いかけてた。届いた気がしたのは、遥か昔。幼少時代。だけど、今は遠く見える。とても遠くで、輝いて見える。振り向いて、微笑みかけて欲しかった。振り返って、止まって欲しかった。

でも、大きくなるに連れて、彼は私を見てくれなくなった。小さい頃は私の声に気付いて、止まってくれた。でも、今は声に気付いても、振り向くだけで止まってくれない。一人にしないで欲しかった。私だけを、見つめていて欲しかった。あの綺麗に澄んだ、希望のある瞳で。変わらない、その瞳で。

彼に恋している事に気付いたのは、いつだっただろう。幼稚園の頃？小学生の頃？中学生の頃？たった今？いつからだったか、分からない。それでも彼の事が好きになっていた。傍にいて欲しいと思った。だから、小さい頃から褒められていた黒髪は、いつも手入れを欠かさなかった。だから、興味のないオシャレにも気を使った。だから、同じ学校に進めるように努力した。だけど。だけど、彼は私を見てくれなかった。他の男子は見てくれても、彼だけは、昔のように見てくれなかった。だから、その背中を見ている事しか出来なくなってしまった。

「ボクがね、みづきちゃんをね、まもってあげる」
「ほんとうに？」

「うん！ボクがおおきくなったら、おっきなおいえをかって、ふたりでくらすの」
「おっきなおいえ？」
「みづきちゃん、きれいなおいえ、すきでしょう？だから、みづきちゃんのだいすきなおいえで、いっしょにくらすんだ」
「やくそくしてくれる？」
「もちろん！ボクがみづきちゃん、まもるんだもん！うそつかないよ」

嘘、ついてるじゃない。護るどころか、見捨ててるじゃない。小さい頃の言葉なんか、嘘が多いのかもしれない。それでも、その時は本当に嬉しくて、嬉しくて堪らなかった。今も思い出すその言葉が、それだけ私の励みになった事だろうか。どれだけ、私に笑顔を与えてくれただろうか。一途過ぎるかもしれない。信じ過ぎかもしれない。それほどに、彼が好きで、大好きで堪らなかった。彼を失う事は、世界を失う事と同じ。その事に、少しでもいいから、気付いて欲しかった。少しでも、彼の気持ちが聞きたかった。嫌いなのなら、ハッキリと言って欲しかった。ずるずると引っ張り続ける、自分が情けなくなる一方だから。他の人を愛せなくなる事が、恐かったから。自分が彼にとって、どれだけ小さな存在でしかなかったのか、分かってるつもりだった。分かっている……そう思い込んでいた。

でも、でもね。振り向いてもらえなくても、笑ってもらえなくてもいい。ただ、私の傍に、いて欲しかっただけなんだ。仕事ばかりで面倒を見てくれなかった親の変わりに、私の傍に。

視界が歪む。頬に、雫が流れる。悲しくないのに、辛い。痛くないのに、寂しい。強いと思っていたのに、こんなにも弱い。次から次へと流れる雫が止まらない。伝えたい言葉が、喉まで出掛かって、彼に届かない。届けたい。気持ちを。……危険を。

「にげ……て。逃げて、皐氣」

擦れた声は、届かない。彼に、言葉が届かない。
手に、冷たい刃の感触がする。大好きな彼の背中が、揺れながら近付いてくる。近付いて行く。もし、神がこの世界にいて、一つだけ願いを聞いてくれるなら、一つだけ叶えてくれるなら。今流れるこの時を、止めて欲しい。それが無理なら、私の足を奪って欲しい。お願い、神様。私に大切な人を、殺させないで。大切な、大切な存在を、護らせて――――。
振り上げた刃が、大好きな人に迫る。彼はやっと振り向き、驚きの表情を露にした。
逃げて。逃げて。逃げて。皐氣、お願い。逃げて！
それを見ていた傍観者は、勝利に酔いしれ、微笑んでいた。
「バイバイ。キング」
鮮血がその場に散り、緋搗は悲しみの悲鳴を上げた。

10、貫く約束

傾いた太陽の日差しが、いつものように一人の栄井を照らし、沈んで行こうとしていた。その太陽を背負って一緒に帰る友もなく、一人席を立つと、見慣れぬ人物がドアップで彼の瞳に映った。それが、初めての出会いだった。

「お前、暗いやつだなぁ。何か、リアクションとか取れねぇのかよ」

少し棘のある言葉だったが、この学校に入ってから久しぶり声をかけられた。どう答えていいか迷っていると、急に彼は笑い出した。

「ハハハ！！そんなに悩むこたぁねぇだろ？ジョークだよ、ジョーク」

どの辺が冗談だったのだろうか。栄井には分からなかった。

「おーい、皐氣！けぇーるぞ！！」

廊下から、楽しそうな話し声が聞こえる。それに混じる事の出来ない栄井は、バックを手に去ろうとした。だが、皐氣は彼らに言ったのだ。

「ゴメス！！今日、こいつと帰るから、先帰っていいぞぉ！！」

「んだよそれぇ！！」

「また、明日な！」

「おう、じゃな」

予想外の言葉に、栄井は動く事が出来なかった。こいつとは、自分の事なのだろうか。だが、この教室には彼と自分しかいない。信じられない事実に、動きが固くなる。

「さ、帰ろーぜ」

「……」

「何黙ってんだよ、俺と帰るのがヤだってんのかよ」

「……いや、そう言う訳じゃ――――」

「おっし！じゃ、行くか」

座っていた机から飛び降りて、栄井の隣へ来てニッと笑った。初めて笑いかけられたので、正直、テンパった。
「お前、笑わねぇな。笑わな過ぎっと、皺ができやすいんだってよ」
「えっ！本当？」
驚いた振りなどではなく、心から驚いた。そんな事だけで、皺ができやすくなるなんて……。
「って、近所のババァが言ってたぜ」
「何だよ、それ」
「よく覚えてねぇんだよな。言ってた気がするって事で頼むわ」
「気がするって……そんな、アバウトな」
「いんだよ、大体で！こまけぇ事気にしてっと、ハゲやすくなるぜ」
「……今度は近所のジジィの話？」
「おっ！よく分かったな。けど、ちょっと違うんだな。近所じゃなくて、隣のオッサンの話だ」
「似たようなもんじゃないかよ、近所も隣も同じさ」
「違げぇよ！近所と隣は、違う。近所は近所、隣は隣、だろ？」
「ウチはウチ、よそはよそ、じゃない？」
「あ〜！！いんだよ、気にすんな。そんなんだから、モテねぇんだぞ」
ぐしゃぐしゃに頭をかかれて、栄井は始めて友の存在を知った。友達が居るだけで、こんなにも時間は変わってくるんだ……。
「君と話すの、初めてなんだけど……」
「あれ？そうだったか？」
こくこくとうなずく栄井に、彼は笑いながら言った。
「じゃあ自己紹介だ。俺は皐氣翠。好きな物は、カレーとゲーム。嫌いな物は、チーズと勉強だ！」
「勉強が嫌いって、そんな胸張って言われても……」
「だって嫌いなんだよ、仕方ねぇだろ？」

聞き返されても、返す言葉がなかったので、とりあえず黙っておいた。
「身長は百七十ちょいあるかな？血液型はO型だ。誕生日は、八月十六日だ。よかったら、プレゼントくれよな。てか、くれ」
「ヤダって、言ったら？」
「う～……それなりに悲しいな。うん」
おかしな奴。体が弱いせいで、運動の出来ない栄井をいじめる者はいたが、こんなに楽しそうに話しかけてくる者はいなかった。
「あ。渾名とかねぇから、フツーに呼んでくれな」
「フツーって、呼び捨て？」
「だな」
「僕が呼んでいいの？君の」
「翠！」
「へ？」
「君なんてキモいから、翠って呼べ！」
「す……い？」
「そう、もしくは皐氣で」
「じゃあ、……翠」
「何だ、……えぇっと」
何に悩んでいるのかと思ったが、彼は栄井を何て呼んでいいのか悩んでいる様だった。そんな彼に、思わず笑みがこぼれた。
「陽向。僕の名前は、栄井陽向」
「じゃあ、陽向。お前、やっと笑ったな」
彼は再び笑って、栄井を見てくれた。嬉しくって、彼も笑った。
「笑ってないさ、馬鹿にしてんだよ」
「お前、意外に嫌味な奴だな」

＊

皐氣は、信じられなかった。目の前の光景に。声すら、出せなかった。あまりの衝撃に。何故ココに緋搗がいて、短剣を振りかざしているのか分からなかった。殺される。そう、咄嗟に思ったのに、動けなかった。腰が抜けた訳じゃない。信じたかったのだ。緋搗を、信じたかったのだ。心からこの光景が、信じられなかったのだ。

振り下ろされる刃から、茜を護るために、皐氣は彼女を投げた。痛かったかもしれない。後で文句を言われる事を覚悟しよう。迫る刃を避けずに、彼は目を瞑って、運命を受け入れた。

「こう……きぃ」

悲しい緋搗の声がした。そっと微笑み、皐氣は彼女を見つめた。恐くない。恐く、ない。覚悟を決めた、その刹那。彼の間に何かが飛び込んできた。そして、そのままその何かに刃は突き刺さり、それは倒れた。

全部、ほんの一瞬の出来事だった。その、たった一秒が信じられなかった。

「ひな、た?」

倒れている人物は、見間違えない、大切な友だった。胸に刺さった短剣から、血が出てきている。それは湖のように床に広がり、その場に居た者全員の動きを止めた。崩れ落ちた緋搗は顔を手で多い、悲鳴を上げている。痛そうに肩を抱きながら、茜も倒れた栄井を見入る。何度も何度も、目を擦り、現実でない事を確かめたがっていた。皐氣は、ただ、呆然と立っている事しか出来なかった。声を掛ける事も、泣く事も出来ず、ただ、立っていた。

———おぬしは、大切な仲間を一人失うぞ

それは、栄井の事だったのか。護れるものなら、護ってみろと言われたのに、護る事が出来なかった。逆に、護られてしまった。自分が護るはずだったのに、何故、彼がこんな事にならなければいけないのだろうか。

皐氣は、倒れている栄井に近付き、その隣にへたり込むように座

る。その後、少し遅れてアリィ達が現れたが、皐氣はその事に気付かずに、栄井の頭を抱いた。
「陽向。おい、陽向。何やってんだよ、起きろよ」
そう呟くように言った皐氣の声に反応して、栄井の瞼が震える。そして、ゆっくりとその目を開いた。いつも隣にあった、キャラメル色の瞳。栄井はこの瞳を嫌い、錆色とよく言っていたが、皐氣はそうでもなかったので、好きなお菓子の色で言っていた。
「やっほ、翠」
虫の啼くような声で、彼は弱々しく言った。皐氣は、歯を食いしばった。邪魔そうな前髪を退かしてやると、彼は嬉しそうに微笑んだ。
「いつも翠は、暗いって言って、この前髪、退かしてくれてたよね」
「そう……だったか？」
「そうだよ。初めて帰ったあの日も、そう言って、僕の前髪、退かしてた」
弱々しい微笑みに、皐氣は声が出ない。
「何だよ、翠。泣いてんのか？」
「泣いてねぇよ……」
「泣いてんだろ？嘘付く時、翠は、言葉を濁すんだから」
「……」
「僕の為に泣いてくれるの、きっと、翠だけだね。あ、茜達も泣かせちゃうかな？」
その言葉通りに、アリィは泣いていたが、茜は目を潤ませるだけで、まだ泣いていなかった。唇を噛み締めて、流れ出ようとする涙を、必死で堪えていた。
「翠、が無事で、ほんと、よかった」
どんどん弱くなっていく声。閉じてしまいそうな瞼。皐氣の服にも滲み始めた血。その全てが幻覚である事を、まだ皐氣は願っていた。

「ねぇ、翠。あの日みたい、に、笑ってよ」
「あの……日？」
「覚えてない？悲しいなぁ……」
「覚えてるに決まってるだろ？初めて一緒に帰った時の事だろ？」
「そう。あの時みたいに、笑って、翠」
「こんな時に、笑えっかよ」
そう皐氣が言うと、栄井は悲しそうな顔をした。眉を下げて、口をへの字に曲げて。
「じゃ、いいよ。無理に、笑われても、恐いだけ、だから」
「減らず口叩くなよ」
「へへ……ゴメン」
どんなに堪えても、涙が止まらない。アリィのように泣けたら、どんなにいいだろうか。茜のように堪えられたら、どんなにいいだろう。緋搗のように悲鳴を上げられたら、どんなにいいだろう。……この全てが夢だったら、どんなに嬉しいだろう。
「最後に、一つ、聞いてくれないか？」
「最後なんて言うな。まだ、次がある」
「じゃあ、これ、聞いて。上に行って、翠。ココで、止まらないで、進んで」
「そんな事———」
「聞いて、翠。最後まで」
強く押されて、皐氣は口を塞ぎ、頷いた。
「僕は、変えて欲しい。僕が居なくなったとしても、この世界を、変えて欲しいんだ。機械に従ってるだけじゃ、いけないんだ。変え、なくちゃ、この、機械仕掛けの世界を。それが出来るのは、もちろん僕じゃない。茜でも、アリィでも、緋搗でも、溯羅でもない。翠、だけができる、事なんだ」
「陽向……」
「変えて、世界を。壊して、機械を。僕は、翠を、信じ……てるから」

「もうしゃべるな。分かったから……頼むから、しゃべらないでくれ」
「進んで、先に。翠の桃源郷を、僕にも見せてよ」
「陽向！」
「僕は、信じてる……から。ずっと、ずっと、翠を信じてるから」
「分かったよ、分かったって———」
栄井が弱って行っているのは、誰の目から見ても分かった。血を、流し過ぎてしまった。その、血に汚れた手で彼は服の中から何かを取り出し、皐氣の前に差し出した。それは、彼の大切にしていたペンダントだった。学校にバレないように制服の中に隠しながら、いつも身に付けていた。
「何だ？」
「あげるよ、これ」
「俺に？」
「当たり前、だろ？それ、なんて書いてあるか、分かる？」
受け取ったそれは、長方形の薄い銀板に、羽のような刳り貫きがあり、その周りを円状に囲むように、筆記体で何か書いてあった。
「ハブ、ア・ホー、プって書いてあるんだ。意味は、希望、を持て」
「ハブ・ア・ホープ……」
「希望を持って、先に進むんだ、翠。僕は、疲れたから……少し休んで、から行くよ」
「陽向、俺は」
「今まで、あげられなく、て、ゴメンね。誕生、日、プレゼント」
「誕生日プレゼントなんて、いらねぇよ。……俺は、俺は、お前に死んで欲しくない」
頬に涙が伝うのが分かった。それでも、その涙は拭えなかった。ただ、流れてしまうだけだった。
「泣くなよ、翠。こっちまで、悲しく、なる……だろ」
皐氣の頬に伝う涙を血に濡れた、栄井の手が拭う。その冷たくな

ってきた手を放さないように、皐氣は握った。そうすれば、栄井から死を取り除けるかのように。
「陽向、死ぬなよ。笑ってやるから。お前が死なずにすむなら、何度だって笑ってやる」
「あり、がとう。翠」
涙に揺れる瞳で、皐氣は笑った。頬の筋肉を働かせて。目元を和ませて。嗚咽が漏れないように気を付けながら、栄井の為に、笑顔を作った。彼が、安心できるように。彼の希望を叶える為に。
「ほんと、有難う、翠。……信……じて――――」
消えていく、大切な人の声。遠ざかっていく、魂の灯火。止められない、止まらない運命。皐氣が変える事の出来なかった、運命(さだめ)。
「聞こえ、ねぇぞ。聞こえねぇよ、声が小さすぎて。なあ、陽向」
閉じられた瞼を、もう一度開いて欲しくて。閉ざされた瞼の下の、寂しげなキャラメル色の瞳を、もう一度見せて欲しくて。皐氣は親友を揺さぶり、声を掛けた。笑っていたはずの顔は、もう歪んでいて、涙で汚れていた。止められない涙は、栄井の顔にかかる。その涙は、栄井が泣いているように見せた。
「陽向。陽向！ふざけるなよ、何で、お前なんだよ。何で、お前が死ななきゃ、いけねぇんだよ。起きろよ、陽向。……起きてくれよ」
悲しくて、心細くて、寂しくて。止まらない涙は、彼を余計に苦しめた。開かない瞼が、余計に彼を悲しみに引きずり込んだ。溢れる涙が止まらない。溢れる悲しみが、止められない。
儚い言葉が、彼を強く揺さぶった。『信じてる』。さりげない言葉が、こんなにも心を締め付けるとは、知らなかった。こんなにも心に響くとは、知らなかった。
「皐氣……」
溯羅は、初めて彼の名を呼んだ。すると彼は涙を拭い、立ち上がった。そして、振り返った。始めてみた彼は、とても悲しそうで、深い寂寥感を漂わせていた。

「始めまして。何て、暢気な事は言ってられないかな？とりあえず俺の名前言っとくと、溯羅。敵だったけど、今は違うんで、そこんところよろしく」
「こちらこそ、よろしく」
僅かに口の端で微笑んで、皐氣は言った。
「俺は、進まなくちゃいけない。こいつとの……約束だから」
悲しげに目線を下げて、眠っている栄井を見た。だが、その目に失望はない。ただ前を見据えて、ただ希望を宿していた。
「敵じゃないなら、手伝ってくれるか？上に行くのを」
「いいぜ。連いて来な」
階段に向かって進みだした皐氣の服の裾を、緋搗が掴んだ。涙で濡れた瞳が、交差する。
「行かないで、皐氣。ここに居てよ」
「そういう訳には、いかねぇんだよ。俺は行かなきゃいけないんだ」
「だって、無理よ。ゼウスやアステレイアに敵う訳ない」
「……そうかもしれねぇな」
「でしょ？……そうだ。ゼウス達に逆らわなかったら、私が操られる事もなかっただろうし、栄井は死なずにすんだのよ。こんな事したって無駄なのよ。何も変わらないわ。変えられないのよ、運命は。変わらないのよ、この世界は」
「……緋搗。お前、まだ洗脳されてんのか？」
「洗脳なんてされてない。……今は、だけど」
「じゃあ、俺はお前を許さねぇ」
「なんで？だって、間違ってるじゃない、こんな事。誰も、ゼウス達を消しても感謝してくれないわ。逆に、怒るに決まってる。やめようよ、こんな無駄な事。ねえ、皐氣―――」
「お前には、関係ない事だ。だから、そう言える。別に、お前に一緒に来いって言った覚えはねぇよ。嫌ならココで待ってろ。茜達もだ」

皐氣に付いて行くつもりだった茜は、驚いて顔を上げた。反抗しようと開きかけた口を、閉じた。なぜなら、彼は、泣いていたから。それは、悲しみだったのか。悔しさだったのか、分からなかった。でも、一つ言える事がある。それは、これ以上大切なものを危険に巻き込まないように、これ以上大切なものを傷つけないように言ったという事。だから、茜は口答えしなかった。彼に、従う事にしたのだ。

「茜、アリィを頼んだぜ」

そう言って微笑んだ皐氣に、痛い足を引きずって飛びついた。少し汗臭い制服に、ほのかな血の臭いがした。

「無傷で帰って来いよ。もし、死んだりしたら、許さないからな。翠」

茜に初めて下の名前で呼ばれた皐氣は、照れくさそうに、だが、しっかりと頷いた。

「当たり前だろ？茜こそ、それ以上怪我すんなよ」

皐氣が最後に、茜をそっと抱きしめてくれた時、彼女は父の事を思い出していた。優しく、強かった父。最後まで、茜を護り続けたその腕に、皐氣は似ていた。優しい彼を、放したくなかった。離れたくなかった。だが、彼女は決意して離れると、次はアリィが飛びついてきた。

「アリィ……。恐かっただろ、ゴメンな」

フルフルと首を振り、彼は言った。

「死なないで、帰ってきて欲しい。ボク、ここで茜と待ってる。だから、絶対に、死なないで。約束」

以前よりも、言葉がしっかりとしている。彼に声が、言葉が戻りつつあるのかもしれない。

差し出された小指に、自分の小指を絡ませる。指切りをし終えると、アリィは溯羅にも抱きついた。

「溯羅も、死のうなんて、思っちゃダメだよ？僕らと一緒に、地下帝国（アンダーグラウンド）で暮らす。約束」

「……ああ、約束しよう」
皐氣と同じように、彼とも指切りをすると、茜の隣に行って、彼女を支えていた。
「じゃ、改めて行こうか」
「ああ」
二人は背を向けて、階段へと消えていく。茜やアリィはそれを静かに見送っていたが、緋搗には、それが出来なかった。彼に、皐氣に伝えたい事があるから。
「私、貴方の事が好きなの、皐氣！ずっと、ずっと前から好きだったの。だから死んで欲しくない。無駄死になんて、余計にして欲しくない。大好きなの、皐氣が！……翠が大好きなのよ！！」
階段を登る途中で止まった彼を見て、緋搗は彼が戻ってきてくれると思った。だが、現実は、冷たかった。
「ゴメン、美津紀。俺は、そんな事言うお前を、好きになれぇね。ゴメンな」
そう言って、皐氣は去って言ってしまった。だが、久しぶりに、名前で呼んでくれた。それが嬉しくて、また涙が出そうになった。それを我慢して、彼女は静かに彼らを見送った。

＊

再び二十四階にやって来た、皐氣達。妙に静かで、怪しげな雰囲気をかもし出しているそこに立つと、再び緊張感に包まれた。研ぎ澄まされた刃のように、尖った静寂。張り詰められたピアノ線のような、緊張感。それが、今の皐氣を押し出してくれる、唯一の力だった。その力がなかったら、今頃、戻ってしまっていそうだった。
「大丈夫か？」
いきなりそう溯羅に問われ、皐氣は飛び上がりそうになった。

「ゴメ。驚かせた？」
「いや、別に、大丈夫だけど……」
「そか、ならいいんだけど。……いい加減、それ付けたら？落としたら大変だぜ？」
「そうだな……そう、だよな」
ずっと握っていた拳を開くと、煌めくペンダントが皐氣を見つめた。そのペンダントの右下の端に、栄井の血が付いている事に気が付いた。それを拭ってから、首からそれを提げた。それは、まだ仄かに栄井の暖かさを宿しているかように暖かかった。そうじゃないと分かっていても、そう思ってしまった。そう、思いたくなった。邪魔な髪を退かし、ペンダントを付けると、それはいつもそこにあったかのように輝いていた。栄井の形見だ。大切にしなくては。
「止まれ、皐氣」
「何だよ」
「アレを見ろ」
「あれは……」
彼らの視線の先には、あの新型のロボットがいた。まだこちらには気付いていないのか、ゆっくりと動いている。
「こっちに来る！」
「いや、待て。様子がおかしいぞ」
溯羅の言葉通り、そのロボット達は一定の場所から動かずに、同じ場所をうろちょろしていた。何かを護っているのだろうか。そのようにしか見えない。
「何であいつら、同じ場所ばっか、廻ってんだ？」
「多分、あそこに上に行く階段があるんだ。俺らを上に行かせない為に、あいつらいんだ」
「他に上に上がる方法は？」
「二十五階だけは特別な場所だ。あの階段、一つしか道はねぇよ」
「じゃあ、どうすりゃいいんだ」
一つしかない道。それを護るあのロボット達は、階段からそう離

れていない所を廻り続けるが、疲れる事がないので、隙はない。充電の時を待っていたら、皐氣達は他のロボットに見つかるだろう。倒すにしても、相手は三体。しかも弾丸を跳ね返す、特殊ボディだ。生身の人間が一人と、機械交じりの人間がどう足掻いても、勝てる確率はないに等しい。それでも皐氣達は、上に行かねばならない、理由があった。なんとしても、あそこを通らなくてはならない。例え、どんなに希望が少なくても、まだ戦える力が残っていれば、先に進めるはずだ。先に進めるはずだ。

溯羅は、覚悟を決めた。

自分が囮になれば、皐氣を先に進める事が出来る。皐氣はそれから、一人でドールや璃里と対峙しなくてはならなくなってしまう。それでも、ここでこのロボットに捕まるよりはましだろう。自分が囮になり、皐氣が先に進めるのなら、それでいいかもしれない。否、きっといいのだ。

「皐氣、いい作戦が――――」

「自分が囮になって、俺だけを先に進める。だろ？」

「なっ！」

言おうと思っていた事を先に言われ、正直驚き、言葉が続けられなくなってしまった。口をパクパクさせて、言葉を探していると、彼は言った。

「そんな事、させねぇからな。俺はお前の事を全然知らねぇ。だけど、帰りを待ってくれてる奴がいる事は、確かだ。そいつらの期待を、願いを裏切る訳にはいかねぇんだよ」

「でも、他に作戦はねぇぞ？」

「あるさ。どんな事にも、ぜってぇに」

「……」

何故、ここまで強く、儚く心を保てるのだろうか。ついさっき、大切な友を失ったばかりだというのに、何故、そんなにも真っすぐ前を見る事が出来るのだろう。まるで、夜空に輝く一つの星のように、強く輝けるのだろうか。

「……要するに、あいつらの気を、他の場所へ向けられれば、それでいいんだろ？」
「それが出来たら、一番いい」
「だったら―――」
何故か耳打ちしてきた皐氣の作戦はこうだ。逆に、あの特殊ボディを利用する事。彼が持っている銃（初めてここに来た時に、弾を使い果たしてしまったはずなのだが、いつの間にか、弾が戻ってきていたと言う）で、あのロボットを撃つ。うまくいけば、全てのボディに反射して、それに反応してそれは動き出すはず。精密な機械なら、仲間に撃たれたと、勘違いする可能性がある。そして、仲間同士で調べ合うはずだ。その隙に、こっそりと階段に向かう。上手くいく確率は、運任せ。弾の当たりが悪かったら、ここから撃たれた事がバレてしまうし、三体のロボットに確実に当たらなくなってしまう。その為、全てが運任せなのだ。
「出来るか？」
溯羅は、正直な気持ちを言うと、不安だった。上手くいけば天国、そうでなかったら地獄へまっ逆さまだ。
「う～ん……。なるようになる、だけじゃね？」
全く以って、情けない言葉だが、これほど心強い笑みはない。全てを託してみよう、そう思えた。
「そうだな」
「じゃ、いくぜ」
そう言って皐氣は、徐に銃を取り出し、構えた。まだまだ、未熟な構え方だったが、しっかりと狙えていた。
「夏祭りで鍛えた、射的の腕を、なめんなよ」
……やはり、少し心配になった。
静かな時が流れ、ロボットの歩く足音だけが、やけに目立つ。黒板を爪で引っ掻いた様な音が時々聞こえ、皐氣の集中を途切れさせようとする。ロボットを狙う皐氣の目は、真剣そのものだった。これは、射的のような遊びではないのだから。ロボット達が徐々に近

付き始める。三体がお互いを確認し合うように、立ち止まった。今だ――――！

撃ち出された弾が、遅く見えた。一体目には、上手く腹に当たり、二体目へと跳ね返る。二体目にはギリギリで脇腹に当たり、三体目へと弾かれた。三体目に当たる前に、それは動き出してしまった。避けられる。諦め掛けた彼らに、希望の光は降り注いだ。避けた三体目の背中に、それは当たったのだ。そして、また二体目に当たり、壁に消えた。

「……上手くいったのか？」

「分からねぇけど、今は階段を登らねぇと！」

見えぬ敵からの攻撃と、仲間からの射撃の疑いで、ロボットは混乱していた。殺すのは、人間であり、仲間ではない。だが、その仲間が、敵に手を貸しているのかもしれないのだ。疑いは棄てきれない。小さな電子チップでは考えられない事に、ショートしていた。予想以上の効果だ。そのおかげで、皐氣達は難なく次の階へ進む事が出来た。

「ラッキーだったな」

「ああ。今回だけな」

毎回こうも、上手くいく訳じゃないのだ。溯羅は、知っている。上手く行き過ぎると、次はろくでもない事が待っている事を。気を引き締めていかなくてはいけない。機械からの、自由を奪い取るために。

「油断するなよ」

「そっちこそ」

次の階に待っているものが、どんなに辛い現実でも、戦わなければならない。勝たなければならない。大切な存在の為に。明日を、光で照らす為に。

護るべき、約束の為に――――。

11、開かれた舞台

二十五階は、それまで以上に静かで、重苦しい緊張感を湛えていた。一度来た場所はずなのに、あの時とは全く違う空気に、皐氣は思わず息を止めてしまった。そして、深くため息をついた。そんな彼を尻目に、溯羅は用心深く周囲の様子を窺った。埋め込まれた機械が、彼の視覚、聴覚、神経を刺激する。もう、恐れない。この力を。世界が変われば、この機械ともおさらばできる。もう少しで使えなくなる力ならば、使える時に使っておかなくては。

「どうした、黙って」

皐氣の声が、普段の二倍くらいの大きさで聞こえる。五月蝿いとは思わない。普通聞こえないような回りの音も、敏感に聴覚が捉え、脳に伝える。いる。ドールと、璃里が。近くにはいない。別行動しているのか、心拍音が全く別の場所から聞こえる。璃里は、管理室のある部屋の周辺。ドールは、自分達の様子を探っているのか、近くの柱に化けている。彼は、人の他にも、この世の万物に化ける事が出来る。だが、一つ条件があった。それは、化けるものに触れなければならない事。そうして、そのものの特徴を捉え、真似するのだ。化けたように見えるのは、それほどにそっくり真似るからだった。

「無視するなよ、溯羅」

「ゴメ、ちょっと回りの様子、探ってたんだ」

「黙ったままで？突っ立ったままで？」

「そう、黙ったままで。突っ立ったままで」

冷やかすつもりはなかったのだが、皐氣はふくれっ面で、のしのしと歩き出してしまった。しかも、これは非運か。ドールが化けている柱の方に向かって。

「待て、皐氣！そっちはダメだ！」

「はあ？」

彼が振り返ると同時に、ドールが姿を現した。と言っても、本当の姿ではなく、何かに化けた状態で。それは、大きな剣だった。溯羅の持っている剣と同じものだった。そう、彼は一度、ドールに剣に触れられてしまった事がある。用心していたつもりだったが、やられてしまった。

「伏せろ、皐氣！」

「ふぉえ！？」

言葉と同時に、溯羅は腰に挿していた鞘から短剣を抜き、投げた。それは、皐氣に向かって飛んでいったが、彼はそれをギリギリで避けて、ドールの刃に当たって弾かれた。そのせいで、彼はバランスを崩し、床に倒れた。

「てて…」

「大丈夫か、皐氣」

すばやく彼をドールから放すと、溯羅は聞いた。

「大丈夫じゃねぇよ、いってぇなぁ。何か知らせたい時は、言葉にしろ。言葉に」

「ゴメンな、気が付いたら直しとく」

「気が付く前に、直しとけ」

「話をしている暇なんて、お前らにあるか？」

二人が機械的なその声に振り向くと、銀に輝く刃が飛んできた。先ほど溯羅が投げた、短剣だった。それは二人の間を切って、壁に刺さった。

「これだけだと、思うなよ？」

どこかで聞いた事のある声。その声の主がいつの間にか、皐氣達の間に割り込んできていた。手に持った大剣は、一人の人間を狙っていた。皐氣だ。

「皐氣！」

横薙ぎに大雑把に振られる剣。それを後ろに下がって避ける皐氣。学ランの前の部分が、少し斬られた。気にしている暇もなく、次の一手が繰り出される。次は上から下に大きく振って。それを横に逃

げると、そちらに向かって突いてきた。さらに横に逃げたが、少し脇腹を切られた。薄っすらと白いワイシャツに血が滲む。
「つぅっ」
痛いと言ってはいられなかった。次から次へと、いろいろな方向から繰り出される剣を、避けるので精一杯だった。避け手も、避けても追ってくる剣で、とうとう壁に追い込まれてしまった。
「ヤベッ！」
「終わりだな」
そう言った声は、やはり聞き覚えがある。そして、大剣を持つ、その姿も。
振り下ろされる剣。唇を噛み締めて、ぎゅっと目を瞑る。斬られる事を、皐氣は覚悟した。
———ガキィン
重い鉄同士がぶつかり合う音がする。だが、皐氣の体に痛みはない。こわごわ目を開けて見ると、頼り甲斐のある背中が見えた。
「俺の事、忘れてね？」
溯羅だ。ドールが自分を放って置いて、皐氣ばかり狙うものだから、少々怒っているようだ。
そして、皐氣はやっと気付いた。思い出した。襲ってきた者は、溯羅だった。正確に言えば違うのだが、外見と力だけを見れば、彼だった。間違いなく、彼なのだ。だが、そんな皐氣を助けたのも彼である。格好も、力も、剣も同じ、彼なのだ。だが、何故、溯羅が二人いるのだ。皐氣の頭は、ショート寸前だった。
「なんで、溯羅が二人？双子か？」
「こんな時に、ふざけるな皐氣。双子な訳ねぇだろ！こいつはドール。何にでもなれる奴だ。だから、今俺の格好をしてんだよ」
「……そうだったのか」
「分かれよ！フツーに！！」
皐氣への怒りを、ドールに向けて発散する。力で勝り、ドールを突き飛ばした溯羅は、鼻息を荒くしていた。怒りのせいからだった。

「……。本物は、お前……だよな？」
「そうに決まってんだろ！何故に悩む！」
「記憶力とかそういうの……俺、自信ねぇからさ」
「そういう問題じゃねぇ！」
酷く幼稚なやり取りに、ドールは溯羅の声で高笑いした。溯羅は嫌な気分になった。
「滑稽だよ、滑稽。お前ら、まさに馬鹿だな」
「うっせぇよ！」
言い返す皐氣を放って置き、溯羅は考えていた。このまま二人で足止めされている場合ではない。少しでも、先に進まなくては。
「皐氣、聞けよ」
「言われなくても、聞くつもりだよ」
皐氣の隣に立って、溯羅は続ける。
「俺達は、ここで止まってちゃ、いけない。先に行かないとな」
「そうだ」
「ここは俺に任せろ。何とかする」
「何とかするったって、方法はあんのか？」
「なんの？」
「両方」
一歩、溯羅が前に出る。ドールが楽しそうに哂った。自分があんなふうに笑っていたらと思うと、彼は吐き気がしてきた。
「やるだけやるさ」
「じゃ、頼んだわ」
背を向けて、走り出そうとする皐氣を引き止めた。
「何だよ」
「この先にも、敵はいる。そいつが使うのは、幻術だ。なるべくあたりの煙は吸うな。余計に幻術にはまり、そのまま殺されるぞ」
「そりゃ、恐ろしい。覚えておくよ」
「忘れんなよ」
先に進みだした皐氣にではなく、ドールは溯羅に向けて、剣を構

えた。彼がニタッと哂うと、溯羅はニヤリと笑った。
「生きて帰れると思ってるのか？あいつは」
「思ってるだろうさ。帰ってくるよ、皐氣は。絶対」
その声は、皐氣にも聞き取れた。
「聞こえるか、皐氣！もしも死んだりしたら、一生お前を恨むからな！」
「分かってるよ！」
遠くで微かに聞こえる声。もう聞こえなくなるだろうと思い、溯羅は言う。
「約束だぞ、皐氣。幻術なんかに、心を砕かれんじゃねぇぞ。……絶対に死ぬなよ」
その声は、しっかりと皐氣に聞こえていた。だが、あえて彼はその声に応えなかった。
「はじめるか？真似ピエロ」
「はじめよう。機械人間（サイボーグ）」
再び、思い金属音が、その場に響き始めた。

＊

霧が出ている。だが、ここは、外ではない。建物の中なのだ。だから、霧がでる事なんてない。霧じゃないとすれば、溯羅が言っていた事だ。もう一人の敵が使う、幻術。注意しなければ。確か、あまり煙を吸わないようにしろと言っていた。その煙とは、この霧の事だろう。
「ハンカチ、ハンカチ……っと」
学ランのウチポケから、ワイシャツの胸のポケットまで調べたが、見つからない。ズボンのポケットにも入っていない。試しに斬れた学ランのポケットを見てみる。

「……」
入っていた。珍しく。もしかしたら、母が珍しく入れて置いてくれたのかもしれない。何かの気まぐれで。何かいい事があって。破れたハンカチは宙ぶらりんで、皐氣の前をぶらぶらしていた。紙一重で繋がっているそれは、引っ張れば簡単に千切れそうだ。
それでもないよりはましだと思った皐氣は、口元にそれを当てて、用心深く進んでいく。そして、進むに連れて、霧も濃くなっていく。敵に、管理室に、近付いて行っているという証拠だ。濃い紫色の霧は、視界を悪くする。そのせいで皐氣は、何度も額を柱にぶつける事となった。
何回目だろうか。額をぶつけ続けて、数分後。漸く人の姿を見る事が出来た。
「いらっしゃい。待っていたわ、皐氣翠」
「いきなりフルネームッスか？ま、いっか」
ハンカチで口を押さえているせいで、声がくぐもって聞こえる。相手に失礼だとは思わない。何せ、彼女は敵なのだから。黒い、体のラインが良く出るスーツを着、霧の中に立つ彼女に、違和感があった。場違い。その言葉が、しっくりとくる。
「すみません。私の紹介がまだでしたね。私は、璃里。伯爵様に仕える者ですわ」
「伯爵様？」
「知りませんか？ここに来てから、一度はその名を耳にしたはずです。ダイラ様の名を」
「伯爵様ってのが、ダイラって野郎か？」
「汚い口の利き方ですね。だから貴方は、この世に相応しくない」
「それ、ぶっちゃけ、かんけぇなくね？口の利き方なんて、どうだっていいんだろ？」
フフッと、妖艶に哂った彼女は楽しそうだった。腕を組み、唇に添えられた指が、皐氣を誘っているようだった。だが、皐氣は動揺も何もせずに、ただじっとしていた。

「よく分かっているようね。だけど、この世に相応しくないという事は、本当の事」
「……分かってら、そんな事」
「なら、話は早いわ」
長いブロンドが風に翻る。不思議に吹く風は、皐氣を包み込む。甘い匂いが、鼻を擽った。眠い。不思議とそう思った。風に誘われるように、どんどんと眠くなっていく。目が開けられていられない。懸命に眠気と戦うが、さらに強くなっていくだけだ。足に力が入らない。地面が揺れているような感覚に陥る。幻術に掛かっているのだ。ハンカチ如きじゃ、所詮役に立たないという事か。立つ事すらも、辛くなってきた頃。遠くで声がした。
「貴方は、生きて帰って来られるかしら？」
膝の力が抜けて、床に膝を付く。立てない。意識が朦朧としてくる。起きろ、起きろ。心の中でどんなに叫ぼうとも、その意志に反して体は重くなる。倒れてしまいそうだ。
俺、何してるんだ？
ふと、そんな思いが心に浮かび上がった。それを境に、皐氣は意識を失った。

12、悲しみの踊子

見慣れた四角い部屋。白く長い廊下は、夕陽に照らされ、ほのかに紅く染まっている。やけに静かなそこには、ただ外の風の音が聞こえる。青葉を揺らす、心地よい風だ。

その光景に、皐氣は見覚えがあった。いつも、栄井達と通った場所なのだから。でも、皐氣は、何故ここにいるのか分からなかった。ふと見回してみれば、そこは、教室の中で、皐氣は机の上に座っていたのだ。視線を前に戻すと、意外な人物が急に現れ、彼は言葉を失った。そこには誰もいなかったはずだ。彼はもう、生きていないはずだ。なのに、何故？

「さあ、帰ろう。翠」

懐かしい声が、そう呼びかける。でも、皐氣は返事が出来ない。アリィのように、声がでない訳じゃない。ただ、言葉が浮かばなかった。

「どうしたんだよ、僕の顔に何か付いてる？」

優しげに綻ぶ頬。どこか悲しげだが、明るいキャラメル色の瞳。どこからどう見ても、栄井陽向だった。

「何なんだよ」

ふくれっ面になる栄井。本当に生きているかのようだ。

「お前、死んだんじゃ……」

「死んだ？僕が？」

確認するように聞く彼に、皐氣は固まった表情のまま頷く。すると、栄井は声を上げて笑った。楽しそうだった。

「何の冗談だよ。面白いな、翠って」

腹を抱えながら、いつも通りに笑うものだから、皐氣も思わず笑ってしまった。きっと、こちらが現実で、皐氣が今まで見てきたものは夢だったのだ。そう思い始めた皐氣は、馬鹿な夢を見たな、と笑った。

「ホラ、帰ろうぜ」
手提げバックを背負い、栄井は笑いながらそう言った。本当に変わらない、優しい響きの声だった。
「ああ……」
皐氣は、栄井の隣に立ち、共に歩き出した。廊下に出ると、あの時の記憶がよみがえる。アステレイアに呼ばれ、困惑した時の、夢の記憶。だが、夢の中の記憶のはずなのに、しつこく皐氣に付きまとう。思い出せ。そう言われているようだった。
「どうした、翠。元気なくね？」
「ん？そうか？気のせいじゃねぇの？」
「本当にそうかな？」
「お前は心配性すぎんだよ。ちったぁ、気を休めろよ」
ぐしゃぐしゃに頭を掛かれた栄井は、皐氣に講義する。でも、とても楽しそうだった。皐氣も楽しかったが、心に詰まる蟠りが気になってしょうがなかった。何か、とても大切な事を忘れているような。忘れてはいけない、大切な事があったような。
「翠ってさ、この世界をどう思う？」
唐突に聞かれ、皐氣は固まった。急にそんな事を、栄井の口から聞くとは思っていなかったからだ。
「この世界をどう思うかって？」
「そう、この機械仕掛けの世界を。なぁ、翠はどう思う？」
『機械仕掛けの世界』。その言葉が鍵だったかのように、一気に心の中の蟠りは消え、失くし掛けていた心の記憶がよみがえる。家の前で出会ったロボット。落とされて始めて見た、美しい国。地下帝国（アンダーグラウンド）。茜とアリィ。ババ様の占い。飛ばされて来た、神の領域。栄井との再会。登っていく階段。大切な友の死。そして———。
「どうしたんだよ、翠」
「お前は、誰だ」
「何言ってんだよ。僕に決まってるだろ？」
そう言って、左胸に付いた名札を指差す。夕陽に照らされ、眩し

く光った。
「違う。お前は、陽向なんかじゃない」
「……」
「お前は、幻覚だ！」
隣で微笑み続ける栄井から、皐氣は身を引いた。彼の顔にこびりついた笑顔は、本当の栄井のものとは違う。何故、気付かなかったのだろう。彼は、こんなに冷たい笑顔はしない事を。
「なあ、翠。どうした？」
「お前に、翠なんて呼ばれる筋合いはねぇよ」
「酷い事言うなぁ、皐氣」
冷たい声。優しさの欠片もない、残酷な響き。その声に、足は地面に縫い付けられたように動かなかった。動けない。これほど怖い事はなかった。
「怖がる事なんてないさ。……覚えてる？皐氣。あの日の事を」
その言葉と共に、町並みは歪み、形を変えていく。それは蜃気楼のように消えて、違う場所に移り変わっていた。小さな家の、前だった。その表札には、『皐氣』と彫られていた。
「まさか、忘れてないよな。翠」
栄井とは違う声に、そう呼ばれた。今、皐氣の目の前にいるのは、背の高い男だった。
「忘れてないよな、翠」
懐かしい遠い日の記憶が、皐氣の頭によみがえっていた。キャッチボールをしてくれた、優しくも厳しい父だった。その隣には、ポニーテールの母がいた。変わらずに華奢で、そこにいるだけで、その場が暖かくなる。温和な母。
「翠、私の愛しい子」
細い指が、皐氣の頬に触れる。とても冷たかった。だが、皐氣は声が出なかった。
「翠。忘れていないだろ。父さん達が、殺された日を」
皐氣は、はっと息を呑んだ。忘れるはずがない。だが、誰も知ら

ない。覚えていない。彼の両親が、殺された日の記憶。彼だけが、覚えている記憶。

「翠、返事は？」

「……忘れてないか、ない」

言葉を発した皐氣の声は、幼い日のものになっていた。思わず体中を動かし、見てみると、そこには両親が殺された日の彼が居た。背格好も、舌足らずな声も、全く同じだった。

「どうした、翠。何を恐がっているんだ」

「翠。恐くないわよ、母さんが傍にいるから」

冷たい母に抱かれた皐氣は、その冷たさに心まで冷やされてしまいそうだった。震える事しか出来ず、逃げる事が出来なかった。思い出していたからだ。忘れようと思っていた記憶を。忘れたいと、願ってしまった記憶を。

＊

その日も空は、綺麗に晴れていた。もう梅雨の季節だというのに、全く雨の気配をさせていなかった。背伸びをして出窓から外を眺めていた少年は、とても嬉しそうに笑っていた。その脇に抱かれた犬のぬいぐるみも、心なしか笑って見える。それほど少年は、この日を楽しみにしていたのだ。

「ホラ、翠。何やってるの？こっちに来なさい」

名を呼ばれた少年は、声のする方へと駆けて行った。そこには、やんわりと笑う母の姿があった。つばの大きな帽子を被り、その手にピクニック用の大きなカバンを持っている。とても重そうだった。

「お母さん。ボクがもってあげようか？」

「あら、翠は優しいのね。でも、大丈夫よ。母さんはね、こう見えても力持ちだから」

「そぉう？」
「そうよ。……さあ、外で父さんが待ってるわ。早く行ってあげなくちゃね」
「うん！」
大きく頷いた翠に、母は楽しそうに笑っていた。
靴を履いて、翠は元気よく外へ飛び出した。綺麗に晴れた空が、彼を迎えてくれた。その日の喜びを、空も祝福してくれているようだった。そう見えるのはきっと、翠の父は仕事が忙しく、家族で出かける時間など、ほとんどなかったからだろう。
楽しい時間を過ごし、再び家に帰る頃。翠は車に揺られながら眠っていた。幸せそうな顔をして。車を無事に駐車場に止めると、父は翠を背負いおり、母は軽くなったカバンを持って外に出た。そして彼らは気付いた。家の様子がおかしい事に。外に見知らぬ車が止まっている。いつもなら、開いている二階のカーテンが閉ざされている。それに、階段の電気も消えていない。消し忘れかもしれないが、几帳面な母が、そんなミスをする訳がない。
「父さん……」
母は心配そうに、父に問いかけた。父は、翠を再び車に戻すと、玄関に向かって行った。その腕を、母は止めたが、父は大丈夫と笑ってドアノブに手を掛けた。いつもより冷たく感じるそれを、ゆっくりと引く。重いドアが開かれる。
その刹那。
銃声が鳴り響く。皐氣家に入り込んだ、強盗の発砲したものだった。まだ、門の所にいた母は無事だったが、父は即死だっただろう。白いタイルの敷き詰められた玄関に、血が染みていく。母は翠を連れて逃げようとしたが、強盗は、それを許さなかった。容赦なく母にも発砲すると、乗ってきた車で逃走した。
しばらくして翠は、パトカーと、救急車のサイレンを目覚まし代わりに起こされた。まだ小さかった翠には、周りの状況が良く分からなかった。それでも、寝ぼけ眼で車の外に出ると、一気に覚醒し

た。生々しい血。玄関に倒れる父。道端に倒れる母。何をしているのか、翠には全く分からなかった。だが、そんな二人に近付こうとすると、一人の警察官に呼び止められてしまった。
「僕、どこの子？」
「お母さんと、お父さん、何してるの？」
「僕は、ここの子なんだね？」
「ボク、ずっと車の中で寝ちゃってたの。でね、パトカーさんとね、救急車さんの音が聞こえたからね、起きたの」
「そうだったの？僕は、怪我してない？」
「大丈夫だよ。ねえ、お母さんとお父さんはどうしたの？何で、あんな所で寝てるの？家の中で寝ないと、風邪引いちゃう」
「……そうだね」
それから警察官は何も言わずに、ただ翠の傍にいた。布を被されて運ばれていく二人を見ながら、翠は警察官の服を引っ張った。
「ボクのお父さんたち、なんで布かぶせるの？どこに連れて行っちゃうの？」
「……病院に、行くんだよ」
「どうして？」
「……」
「ねえ、どうして？ボクのお母さんとお父さんだよ。おしえてよ」
帽子を深く被って黙り込む警察官に痺れを切らして、翠は運ばれていく母に飛びついた。その拍子に剥がれ落ちた布が、血で紅く染まっていた。そして、虚ろな瞳が翠を見つめていた。恐かった。思わず悲鳴を上げた。そんな翠を、先ほどの警察官が抱き寄せた。
「僕、落ち着いて聞くんだよ。君のお父さん達は亡くなったんだ」
「なく……なった？」
「起きない眠りに付いたんだ。どんなに大きな目覚まし時計を使っても、呼びかけても、起きないんだ」
「そんな事ないよ！だって、二人ともお仕事があるから、絶対に起きるもの！」

「どんな事があっても、もう起きないんだ。……死んじゃったんだよ」
「死んでなんかない！お母さんとお父さんが、死んだなんてウソだ！だまされないぞ！！」
「ウソじゃないんだよ……」
「ウソだよ！！ウソだ！！死んだりなんか、しないもん！！お母さんたち、生きてるよ」
そう言いつつも、翠の脳裏にはあの虚空な瞳がこびりついていた。優しさも何もない、冷たいガラス球。それが、恐かった。
「死んでないよ……死んでない。お母さんたち……生きてるよ」

それから一週間くらいたっても、ニュースにされる事もなく、翠に平穏は訪れていた。母方の叔母の家に預けられたはずなのに、元からそこにいた事になっている。翠を産んでからすぐ母は死んだ事になっており、父はもっと前に病死した事になっていた。そうじゃないと翠が言う度に、叔母は彼を病院へ連れて行った。病室で医者と二人きりになると必ず、翠はこう言われた。
「忘れろ」
そして、何やら怪しい注射器を取り出して、翠にさそうとするのだ。その度に逃げ出して、翠は「もう大丈夫」と言って、叔母達をごまかしていた。
この事は、緋搗でさえ知らなかった。覚えていなかった。薄っすらと思い出しそうになると、いつも頭痛がして、何もかもを忘れてしまうのだった。
そんな世界に疑問を抱き、翠は動いたのだ。

＊

「俺の記憶を、読んだな」
呟く皐氣は、元の体に戻っていた。
「そうよ、貴方が一番苦しいと思ったところを抉ってあげたの」
どこか遠くから、その声は聞こえた。
「汚ねぇマネするな」
「これが私の戦い方ですもの。さあ、次は何がいいかしら」
響く声は、とても楽しそうだった。その声を聞きながら、皐氣はまだ震えていた。恐かった。久しぶりに見た母の表情が。久しぶりに触れた手が。震えを抑える為に握った拳は、爪が刺さって血が滲んできていた。
「……貴方が一番恐い事は、忘れられる事みたいね」
「なんだよ」
「新しい『夢』を用意してあげたわ。楽しんでね」
そして再び皐氣は、夢の中へ落とされていった。

＊

ぶつかり合う鋼に、こんなにも興奮した事があっただろうか。自分の分身のような奴と戦って、こんなに楽しいと感じるとは思わなかった。同じ強さ、同じ動き、同じ癖。その全てに、溯羅は歓喜していた。何故だか分からない。ただ、戦う事が、楽しいのかもしれない。
「どうした、溯羅。やっと気付いたか？」
「何にだよ」
「殺す事の、楽しさに」
厭らしく笑う自分の顔が、重なって見えた。そんなはずはないのだが、本当の自分と、ドールの自分が、ダブって見えたのだ。そんな事、ありえない事なのに。

「いいんだぜ。認めろよ。お前は人を殺す事が、楽しくて楽しくて仕方ないんだろう？」
「そんなこたぁねぇよ」
「何故そう言い切れる。お前は、あいつらと関わらなければ、ずっと殺人兵器だ。いや、何の関係なしに、それはかわらねぇか」
「何が言いたい」
「お前は、伯爵様のお気に入りだ。だから伯爵様は、お前を壊したくはない」
ぶつけていた刃を休めて、二人は向かい合った。
「お前があいつらを裏切るのなら、喜んで迎えてやろうと、伯爵様は言っていらっしゃった」
「俺に、また人殺しをしろと？」
「そういう事だ。お前には簡単だろう？人を殺して殺して、今まで生きてきたんだからな」
剣を下げて、ドールは続ける。
「人殺しが、人殺しじゃなくなる方法なんてねぇんだ。くだらない希望を持っても、意味ないぜ。せっかくの体だ、うまく使わなくちゃな？」
「上手く……使うねぇ」
握った剣をもう一度きつく握り、溯羅は大きく息を吸い込んだ。息をしている。まだ、機械になっていない。まだ、人間でいられている。恐くない。機械の支配など、もう要らないのだ。
「さあ、帰って来い。溯羅」
そう言ったドールの背後に、気配を感じた。彼が振り向くと同時に、溯羅の顔が見えた。
「何！？」
溯羅が振るった剣は、惜しくもドールの髪の毛を掠っただけだった。首を落とせていない。それでも、掠らせる事が出来た。
「上手く使うってのは、こういう事だろ？」
「……最後のチャンスだったのに。後悔しても、知らねぇぞ」

首を傾けながら言うドールに、もはや人の気配はなかった。完全に、機械に飲まれている。そうなってしまえば最後、自分に自由は聞かなくなってしまうのだ。何て、哀れなのだろう。

「来るなら本気で来いよ、操り人形」

「調子に乗らない方が良かったのによ……伯爵様も、さぞ残念がっているぞ」

ドールの形が崩れていく。液体のような、なんともいえない物質になると、再び形を作り出す。それは一つ、二つと増え始め、あっという間に溯羅を取り囲んでいた。

「俺だらけって……さすがにキモいな」

同じように哂った顔。気味が悪いほどに、彼を真似ていた。そいつらは、溯羅に向けて、剣を構える。同じように、溯羅も身構える。

「ラストショーといこうぜ、中途半端」

そして一斉に、刃は振り下ろされる。それの恐怖を感じさせずに、溯羅は目を瞑っていた。神経を集中させるその時、時間が止まった気がした。恐れなど、とうの昔に忘れているのだ。いまさら何を恐れる必要があるだろう。戦いは、正直に言えば嫌いだ。だから、全てを終わらせる。この、一撃で。

全神経を剣に集中させる。それに合わせるようにして、それは淡く輝きを放ち始める。蒼い輝きは、身の毛がよだつほど冷たい。何もかもが凍ってしまいそうなほど、切ない。そんな輝きは、次第に強くなっていく。それに気付いたドールは、危険を感知した。

「ああ、終わらせてやるよ。何もかもな」

「……お前、何をやろうとしている」

「お前の悲しい人生に、終止符を打ってやるよ」

瞑っていた溯羅の瞼が開かれる。冷たい彼の瞳の色が、変わっていた。この切なくも、温かさのある瞳を何といえるだろうか。そう、例えるのなら、よく晴れた日の青空のようだ。どこまでも澄み渡り、空を飛ぶものを支配する蒼い空。優しさおも包み込む蒼さは、まさしく空としか言い現しようになかった。

「さよなら、ドール。あの世では、争いもなく暮らせよ」
その一言と共に放たれた光は、優しく暖かくドールの分身達を包み、消していった。逃げようとした彼だったが、間に合わなかった。だが、それでよかったのかもしれない。苦しむ事無く死に、消えたのだから。
独り立っているのは、溯羅だけ。振り下ろした剣には、血の染み一つもない。淡く光っていた光は、風に攫われるようにして、ゆっくりと消えていった。ドールが先ほどまで立っていた場所を見ると、そこには人がいた面影がなかった。服に絡まった無数の機械と、多少の血。いや、あれはオイルだろうか。それを見て溯羅は、悲しい顔をした。
「お前も、辛かったな。でも、もう大丈夫だ」
慈しみの言葉と取るか、哀れみの言葉と取るかは、それを聞いた者次第。残酷すぎる言葉かもしれないが、それが現実だ。現実は、変わらない。流れに身を任せ、流れるだけだから。

13、訴えかける協奏曲

気が付けば、皐氣は独り、白い空間の中で立っていた。白と言っても、いつも見ている景色が、白くなっているだけで、空は存在していた。だがその空も、嫌に白っぽい。

「ここは……？」

そう言ったはずなのに、声がでない。試しにいろいろな事を言ってみるが、一向に成果は出なかった。これも、璃里が仕組んだ幻覚の効果なのだろうか。何とかこの空間を出て、先へ進まなければならない。そう考えた時、後ろで声がした。振り返り見れば、栄井と緋搗がいた。楽しそうに話しながら、こちらに歩いてくる。話し声が、次第に大きくなる。

「そうそう、聞いてよ栄井。またね告られちゃって、大変だったんだよぉ」

「はいはい、もうそれはさっきから何回も聞いてるよ。モテる緋搗は大変だねぇ」

「大変所じゃないの！！もう、焦っちゃったんだから！！」

「どうして？」

「何回も聞いてるんじゃなかったの？」

「適当に聞いてたから」

「ひっど～い！！」

「ゴメン、ゴメン」

本当に、楽しそうだった。皐氣はそんな彼らに話しかけようとしたが、声が出なかった。どんなに声を出そうとしても、空気が喉から漏れる音すら聞こえない。だが、彼らは真っすぐ皐氣に向かって、やってくる。避けなければ、ぶつかってしまう。それなのに、彼らは皐氣がいないかのように、真っすぐに歩き続ける。避けようとしない。皐氣が避けようとしたが、足が動かなかった。声は、もう目の前だ。ぶつかる。そう思った皐氣を、彼らはすり抜けた。

「え？」
やっと出た声に驚いたが、もっと驚いた事は、彼らにぶつかっていない事。確かに、彼らは皐氣に向かってきていた。なのに、すり抜けたのだ。その感触が、まだ皐氣には残っている。指に水を浸した時と、似た感覚だった。嫌ではないのだが、気持ちよくもない。なんとも言いがたい感覚だ。
「それでね、私言ってやったの――――」
「へぇ、そうなんだ。それから――――」
何事もなかったかのように、二人は進んでいく。皐氣は不思議に思い、二人の名を呼ぶ。だが、振り返りも、反応もしない。おかしい。そう思ってから、思い出した。ここは璃里が造った、架空の世界。あの二人も、本物じゃないのだ。璃里の作った、偽者だ。
「何がしたいんだ、璃里！！」
狭い部屋の中でこだまするように、声が響いていく。声が完全に消えかかった頃、返ってくる言葉があった。
「貴方が恐れている事、それは忘れ去られると言う事。この世界で、貴方を覚えている人は、誰もいません。声を掛けても無駄ですよ。聞こえないのですから、存在しないものの声は」
「何がしたいって聞いてんだよ！」
「それは、貴方を苦しめる事です。貴方は、この世界ではいないもの。存在しないものです。誰からも声を掛けられる事もありませんし、避けられる事もありません。ただ、そこに有るだけです」
「存在が……ない」
だから、栄井達は皐氣に気付かず歩き続けていたのか。これで謎が、一つ解けた。
「ここから出る方法は、ありませんよ。貴方が壊れるまで。そして、壊れた貴方で、大切な仲間を殺させてあげましょう。その後で目覚めさせ、貴方を失望させて上げます。貴方はそして、自分の無力さを知るのです」
「そんなこたぁ、させねぇぞ！」

「どうだか。そういう事は、ここから出れてから言うものですよ。では、貴方が壊れるのを待つとしましょう」
そして声は消えていった。皐氣が璃里と会話している間にも、彼は何人もの人とすれ違った。その度に、あの感覚が体を包んだ。気持ち悪い。そう思った。
「そうだ、一つ、刺客を用意してあります。それに勝てたら、私は負けを認めますよ。ですが、刺客は一箇所から動きません。自分の足で探して御覧なさい。タイムリミットは、この世界の夜明けまで。さあ、貴方は壊れずに出てこれますか？」

＊

ドールのいなくなった廊下には、油っぽい臭いが立ち込めていた。溯羅はすぐにでも皐氣を追いかけたかったのだが、体が言う事を利かなかった。機械の力を使いすぎたからだ。機械から出される、殺人命令に逆らえるほどの力が残っていない。今は必死に拒絶をしているが、いつ機械に体をのっとられるか、定かではない。
「くそっ……」
頭を抱え込んで、溯羅は膝を付く。激しい頭痛が、彼を襲っていた。
――壊せ。殺せ。この世の全てを――
機械のその言葉が、幾度となく繰り返される。命令をどんなに拒絶しようとも、それだけは次第に強くなっていくばかりだ。
――壊せ、壊せ。憎き人間を。殺せ、殺せ。愚かな人間を。この世の全てを、地獄へ誘え――
「やめろ」
――壊せ、壊せ、壊せ。殺せ、殺せ、殺せ。無力なものを――
「……やめろ」

――無くしてしまえ。こんな世の中を。この世の全てを、無に返せ――

「……やめろぉ……」

――愚かな行いをする人間共に、神の鉄槌を下せ。人間など、消し去ってしまえ！――

「やめろぉ！！」

狂ったように床にのた打ち回りながら、溯羅は叫んだ。乱れる息が、痛む頭が、落ちた剣に移る顔が、恐怖で崩れかけていた。機械に完全に支配されれば、体の自由は二度と利かなくなる。それだけは、なんとしても、避けなければいけない。護らなければ、約束を。護らなければ、大切な命を。護らなければ――。

「俺……は、機……械に、なんて……負け……ねぇ！！」

＊

動けるようになった皐氣は、必死になって走っていた。何かに追われている訳ではない。逃げるのではなく、探しているのだ。彼の心当たりの場所は、全て探した。学校も、家も、通学路も、友達の家も。だが、そのどこにも彼に気付く者はなく、璃里の言っていた刺客はいなかった。早く見つけ出し、ここから出なくては、彼の身は持たなかった。誰も彼に気付かないと言う苦痛。すり抜けられる気持ち悪さ。声を掛けても返事のない友達。気味が悪いほどに、誰も彼に気付いてくれないのだ。それが何よりも、彼の心を締め付けた。

「畜生。どこにいるんだよ、刺客ってのは」

その時、小さな子供を連れた親子連れを見た。それを見て、皐氣は一つの場所が浮かんだが、すぐに打ち消した。昔住んでいた、思い出の家。前に一度言ってみた事があったが、そこには何もなかっ

た。雑草の生えた敷地が、ただ寝転んでいた。
「な訳……ないよな」
そう言いつつも、自然と足がそちらに向かう。久しぶりに行くはずなのに、道を間違えることなく歩き続けられる。まるで、糸に引っ張られているようだ。懐かしい公園。懐かしい小さな店。懐かしい、大きな家。そう、そこに家はあり、小さな少年がその玄関に腰掛けていた。
「待ってたよ、翠」
幼い頃の声。もう、恐くない。立ち上がり、目の前に現れたのは、紛れもなく幼少時代の皐氣。抱いている犬のぬいぐるみも、そのままだ。
「翠って、お前も翠だろうが」
「フフ。そうだね」
自分らしくないと思った。こんな風に、俺は笑わないと。こんなに暗く、哂わないと。
「ねえ、何で翠はそんなに必死になって、世界を変えようとしているの？」
「間違ってるからだ」
「そう思ってるのは、翠だけかもしれないよ。この世界を必要としている人の方が、きっと多いよ。なのに、世界を変えたら、その人達が、困っちゃうよ」
「そうかもしれないな。でも、それじゃ、いけないんだよ」
「何がいけないの？」
「機械に頼り、機械によって動く事さ。人はロボットじゃない。生きているんだ。感情もあるし、呼吸もする。機械には、それが出来ない。だから、それに従う事も、間違ってるんだ」
「でも、機械がなくなったら、どう生きていいか、分からなくなっちゃう」
「それでいいんだよ。それでこそ、人間なんだ」
「……忘れる事も？」

「ん？」
「お母さんや、お父さんが殺された事も、忘れる事がいいの？人間は、すぐに忘れる。忘れようとする。それでいいの？」
「……」
皐氣は、答えられなかった。時として、忘れる事も必要だが、一度忘れると、人とは不便なもので、なかなか思い出す事が出来ない。それでいいかもしれないが、忘れた方の気持ちは、どうなってしまうのだろう。怨めばいいのか、悲しめばいいのか。分からなくなってしまう。
「人は、忘れたら忘れたで、事を済ませようとする。でも、機械は違う。ちゃんと覚えててくれる。忘れずに、残しておいてくれるんだ。簡単に忘れたりしないよ！」
「でも、感情がない」
「それでもいいじゃないか！機械は何でも覚えててくれる。人間と違って、低能じゃないんだ！それに何でもしてくれる。寂しいなんて、思わせないよ！」
小さい頃の皐氣は、孤独だった。緋搗と遊んでから帰ってきても、親がいない事が多かった。家に泊めてもらえるとしても、しょっちゅう行っては、さすがに迷惑になるだろう。だから、一人で遊びながら両親の帰りを待つ事が多かったのだ。
「ねえ、翠も寂しかったでしょう？独りでずっと待ってなくちゃいけないんだ。でも、機械がいれば、独りじゃないよ。話してくれるもの」
「でも、それは――――」
「逸話だって構わない！独りが嫌なんだよ！独りじゃ寂しいんだ！誰かが、傍にいて欲しいんだ！！」
その言葉は、皐氣の心に深く突き刺さった。独りが嫌で、機械と共にいる生活。寂しいと思えば傍にいるのは、機械だとしたら。話し相手が、機械しかいないとしたら。そちらの方が、悲しいのではないだろうか。相手にしてもらえなくても、独りでも、いいのかも

しれない。機械が、人の心を知る事が出来ないように、人も機械を知る事が出来ない。だったら、人との繋がりをもっと深くすればいい。もっと、愛しいものにすればいい。

「寂しんじゃんか。誰もいないと。悲しいじゃんか。誰もいないと」

嗚咽を漏らしながら言う、幼き日の自分に歩み寄り、皐氣はそっと抱きしめた。

「寂しいと、悲しいと思えるのは人間だけだ。確かに忘れる事は、悪い事かもしれない。けどさ、機械に覚えてもらえていれば、本当にそれだけでいいのか？人には、覚えていてもらえなくて、いいのかよ」

「嫌だよ」

「だろ？だったら、忘れるなって言えばいいんだ。俺らには、口がある。言葉にしてあらわす力がある。どんなにさり気ない言葉でも、人の心に残れば、永遠のものとなる。忘れて欲しくないなら、自分から動かないといけないんだ」

「でも、独りは寂しいよ……」

「それが、人間ってもんさ。人生には、辛い事も、楽しい事も、悲しい事も、嬉しい事も、絶対になる。それは、絶対に避けられないんだ。避けちゃ、いけねぇんだ」

「何で？そんなの、酷いじゃないか」

「でも、それが全部無くなっちまったら、どうする？」

「え？」

「楽しくもない、嬉しくもない。辛くもない、悲しくもない。つまらないだろ？そんな人生。それが沢山あるから、この世界は面白いんだ。くだらないって、思えるこの世界が」

「……」

「機械に出来ない事は、人生を楽しむ事なんだ。この世に生を受けた俺らと違って、作られた機械は、楽しみも何もない。ただ、人様の言う事を聞くだけ」

「……」
「誰もが持ってるんだよ。そういう気持ち。悲しかったりする気持ちを。感情のないロボットと違って、俺らは自分の足で歩かなきゃいけない。まだ不安定で、でこぼこした道かもしれない。でも、それでいいんだよ。道が決められたものだったら、かなりつまらないぜ？間違った道を行く事も人生なんだ、自分の」
「……人生」
「機械に決められた世界じゃダメなんだよ。人の世界を創っていけない。それは、機械だけの世界になっちまうからだ。歩き始めは、不安でいいんだよ。少しずつ慣れていけばいいのさ。機械に縛れていなければ、自分らしい世界が開けてくるはずだ。そして、もっともっと世界は広がる。自分だけの、大切な世界だ。
その世界を手に入れるために、俺はここまで来たんだ。ここで引き返す訳には行かないんだよ。進まなくちゃいけないんだ、自分の決めた道を。自分の創った世界を」
「それで、いいのかな？」
「いいんだよ。きっと」
「ボクにも……出来る？」
「出来るさ。心があるんだから」
掴んでいるはずの肩が、少しずつ感覚を失っていく気がしたが、皐氣は構わずその肩を抱き続けた。白い世界も、崩壊を始めていた。色が、徐々に戻り始め、本当の世界が現れる。自分の存在している、たった一つの、大切な世界だ。
「……さすがですね。皐氣翠。あの世界から抜け出せるとは、正直思っていませんでしたよ。……私の負けですから、さあ、進みなさい。貴方の言う、『自分らしい世界』の続きを見せてください」
璃里が少し後ろに下がると、扉が現れた。ダイラの待つ、司令室への扉だ。
「最後に一つ聞かせてください。どうして、あそこに刺客がいると分かったのです？」

「……勘、かな？」
「勘ですか……」
「お前は、俺の辛い場所ばかり抉りたがってた。だから、もしかしたらって思ったんだよ」
「私は、考えを読まれたと言う事ですか」
「……さあ、どうだかね」
皐氣はゆっくりと立ち上がり、扉に向けて歩み寄った。開くのが、少し恐かった。だが、もう進むの決めたのだ。戻る訳には行かない。運命の輪が狂ったその日から、彼に戻ると言う事は、禁じられた。だから、ここまで進んでこれたのかもしれない。一呼吸置いて、目を瞑った。すると、大切な友の顔が次々に浮かびあがってきた。明るく振舞い、慕ってくれた、茜。言葉に出して言えないが、気持ちをきちんと持っている、アリィ。気持ちに素直になる事を、改めて感じさせられた、緋搗。最期の時まで支えてくれた、大切な存在、栄井。機械に苦しめられている、溯羅。みんなの気持ちが、皐氣の肩に乗っていた。だが、重くはない。それは、みんなと同じ気持ちだから。同じ志だから。それが一つの想いとなって、皐氣の心の中にあるから。
深呼吸をする。みんなの笑顔が、力をくれた。もう迷ったりなんかしない。道を踏み間違える事も、恐れない。この道を進んでいくと、決めたから。もう、怖くない。
扉の取っ手を、静かに掴む。そして、最後の扉を、今開いた。

１４、終わりを告げる鐘

「やあ、待っていたよ。皐氣翠君」
チェス盤を目の前において、その男は言った。皐氣は、いきなりフルネームで呼ばれたが、驚かなかった。彼が、ダイラだろうか。チェスの駒を動かして、悔しそうな表情をしていた。
「いつから狂ったのかな？私の計画は」
落ち着いた声に、怒りは感じない。しいて言うなら、悩んでいるようだった。監視カメラの映像に囲まれて、浮かび上がった彼の顔も読めない。真顔のまま、ぴくりとも動かない。まるで、マネキンのようだった。
「なあ、君はどこから狂いだしたのだと思うかい？」
「何の事だ」
「冷たいね。分かってるはずだよ」
「……知らねぇな」
「フフフ……。それも一つの答えかも知れないね。……だが、私はこう思うよ。皐氣夫妻が殺された日からと」
「なっ！？」
予想外の言葉に、思わず皐氣は、一歩身を引いた。両親が殺された日。その事と、この機械仕掛けの世界に、何の関係があるのだろう。皐氣は分からなかった。何故、ダイラの口から、両親の話題が出されたのか。この世界には、分からない事が多すぎる。
「君は聞かされていないのかい？彼らは、優秀なここの社員だった。頭も良く、アイディアにも溢れていた」
「……だからって、お前の計画の狂いと何の関係があるんだよ」
「ここが一番大切なのだよ、皐氣君。彼らは、発明する事を誇りに思っていた。人々の役に立つ、素晴らしい機械の発明に。そして作り出したのだよ、この世界の神とも言えるものを」
「それって……まさか！」

その時初めて、ダイラの表情は変わった。とても暗く、悪魔のように微笑んだのだ。
「そう、彼らが作ったのは、アステレイアとゼウスだ。素晴らしい知能を持つ、データベースだ。あれを越える機械は、もう二度と創れないよ」
「……嘘だ。親父達が創ったなんて……。あれは、もう何百年も前からあるんだろう？そんなのおかしいじゃないか！」
ダイラは一瞬静かになったが、そのあと高らかに笑い出した。
「何がおかしい」
「想像力に欠けるようだね。話なんて、簡単に変える事が出来る。そうだったと思い込ませる事は、簡単なのだよ。何の造作もない」
「俺達に、嘘を教えてるって事か」
「神は、長い間生きていなければならない。その為には、多少の偽りも必要なのさ」
「そんな……」
この世界を信じて生きている人々に、申し訳なくないのだろうか。人の為と、嘘を吐き、簡単に嘘を伝えて言ってしまって、いいのだろうか。
「おっと、話の筋が、ずれてしまったね。……そうだ、皐氣君。君は何故、ご両親が殺されたと思っていたかい？」
「何故って、そんなもの強盗に殺されたんだろ？俺は見てないけど……」
「強盗ねぇ……。それがもし、計画的なものだったとしたら、君はどうする？」
「は？」
「私の仕組んだ計画により、二人が殺されたと言うのなら、どう思うと聞いているんだよ」
「何だと」
「彼らは、高い知能を誇っていたが、この世界は進化し過ぎたと言い始めた。進化のし過ぎなんて、この世にはないのにだ。行き過

ぎたこの世界を止めるために、彼らはここ出て行った。なんて哀れなんだろうか。そのままここにいれば、殺される事なんてなかったのに」

「……」

「彼らの知能は、私の計画を混乱される。乱される。その為には消すしかなかったのだ。だが、子供がいたとはね。聞いていなかったよ。君にも、消えてもらわないといけないかな？」

やる気のなさそうな声だったが、目は、欲望に爛々と燃え上がっていた。自分の為に、人を殺したのだ。この目の前の男は。罪のない命を葬り去ったのだ。大切な、命を。

「ラストはこれからだよ、皐氣君。まずは、これを見たまえ」

パチンとダイラが指を鳴らすと、チェス盤の上に、モニターが現れた。映っている映像は、どこかの廊下らしかった。そこに、一人の人物がのた打ち回っていた。見覚えのある剣が、近くに転がっていた。

「さ……くら？」

「そう、裏切り者さ。彼には、特別強い苦しみを味わってもらっているところだよ」

「てめぇ、溯羅に何した！」

掴み掛かろうとした彼の喉元に、鋭いナイフが突き立てられた。いつの間に手に持っていたのだろう。手品のように、その手にそれはあった。

「まあ、そう怒らないでくれたまえ。この罰は私が下しているものだ。私を殺したら、命令は誰にも止められない」

「……クソッ」

歯を食いしばって、皐氣は画面を見ていた。音声は聞こえない。音のない生き地獄で、溯羅は苦しんでいた。

「彼は、この世の全てを壊すために造った、私の傑作だ。それなのに、最高の命令よりも、人の心を選んだ。その罪は重い」

「……」

「彼にした命令は、この世を壊す事。それを拒否する事は出来ない。拒否し続ければ、いつか神経がやられる。だが、素直に従えば、せっかく出来た仲間を皆殺しさ。面白いと思わないかい？」
笑みを隠し切れないという風なダイラに、皐氣は怒りを感じていた。なんて自己中心的なのだろう。自分さえ良ければ、他のものはどうだっていいのだろうか。狂っている。考えられない。殺させる事を楽しみ、殺す事も楽しんでいる。何て卑劣な人間だろうか。
「……お前、おかしいよ」
「おかしい？私が？」
「人を苦しめて、何が楽しいんだよ。人の苦しみも知らないで、何を楽しんでんだよ。お前、人の気持ちってもんを考えた事ねぇのかよ！」
「人の気持ちなど、単なるお飾りに過ぎない。散々飾りつけた挙句、簡単に棄て行くのだ」
「気持ちは飾りじゃない。心だ。何で分からねぇんだよ。なんで……」
「分かりたくもないよ、そんなもの。やはり、君は消した方がいい存在のようだ。考え方が、彼らに似すぎている。もしかしたら、彼らは皐氣君、君に何かを残しているかもしれない。この世界に、在ってはいけないな」
璃里もそんな事を言っていた気がした。だが、ゆっくり考えている暇もなく、皐氣にダイラのナイフが襲い掛かる。予想以上に早い動きに、腕は切られ、服は裂かれた。次第に下がっていくうちに、壁際に追い詰められてしまった。
「終わりだっ」
振り下ろされたナイフが、避けた皐氣の左の頬を斬る。滲み出る血と共に、生暖かい血の感触が、涙のように頬を伝った。本当に泣いていたのかもしれない。痛くてではない。悲しくてだ。誰かに必要とされて生きてきていたのに、こんなに否定されると、悲しくなった。それに、人の心を思えないダイラを、哀れに思った。自分の

為に、自分の為に。そう思っているうちに、殻は固くなってしまったのだろう。抜け出したくても、殻が固すぎて破れなくなってしまって。そのうちに、独りになってしまったのだろう。

「死ねっ！」

悲痛な心の悲鳴が、耳に聞こえてきそうだった。助けて欲しくてもがいている、小さなダイラが見える気がした。陽の当たるところへ、連れて行かなくては。そう、皐氣は思った。

迫り来るナイフを避ける事を、皐氣はやめた。右肩に、鋭い痛みが走り、動きが止まった。

「何故、かわさない」

「独りが、嫌だったんだろ？」

「何を言う。死が恐くなり、気が狂ったか」

「その方が、いいかもな」

やんわりと笑って、皐氣は肩に刺さったままのナイフを抜いた。痛かった。

「死は恐い。独りになるから。傍にいてくれる人もなく、たった一人で上に逝かなくちゃいけない。周りで支えてくれる人が多かった時は、なおさら恐いだろう」

「……？」

「お前、寂しかったんじゃねぇの？どうしてか分かんねぇけど、そう感じた。心のどこかで、お前が叫んでるんだ。ここから出してくれって。光を当ててくれって」

「光などいらない。そんなもの、邪魔なだけだ。それに、私は寂しくなんかない。独りで居たほうが、よほどいい」

徐々にダイラの言葉に、怒りが現せられてきた。荒くなる呼吸に、皐氣は落ち着いた態度で言葉を続けた。

「お前は、いつか誰かに裏切られた事があるんじゃねぇの？だから、人を信じる事が恐くなったんだ。だから、自分の殻に閉じこもり、自分だけを大切にしてきた。だから他人の気持ちが分からないし、理解もしたくないだけなんじゃねぇか？」

「五月蝿い！黙れ！！」
皐氣の手からナイフを奪い、彼に向けて振り下ろした。咄嗟に庇った左腕を、大きく斬られたが、皐氣は恐れなかった。
「何故、私を分かったような口で話す。何故、私を理解しようとするのだ。何故、心の中にまで入り込もうとする」
「……人だから。俺は、そういう質の人間だから。悲しそうな目をしてる奴に、手を差し伸べずにいられるほど、俺は大人じゃない。だから、お節介な奴って嫌われるんだよな」
脈動に合わせて疼く腕の痛みを、左手で必死に押さえながら、皐氣は続ける。
「裏切られる事が恐くて、悲しませるのが辛くて、本当は仲間が欲しかったんだろ？本当の、心から信頼できる仲間が」
「そんなものいたって、なんの役に立つのだ。お荷物は、私に必要ない」
「なら何故、璃里達を傍に置いておく。いらないものじゃないからだろう？自分を慕ってくれて、自分を思ってくれる奴らだからだろう」
「違う、違う！！奴らは私の道具に過ぎない！私の玩具であり続ければいいんだ！！」
「人を玩具だなんていうな！人は、弱い。脆い。すぐに壊れる。だけど、それだけじゃない。特別なものを、一人一人が抱いて生きてんだよ。護る気持ちを、支える気持ちを。お前は、少し運が悪かっただけだ。今からでも、十分やり直せる。だから、その手をこれ以上血で汚すな」
「血で汚れて構わない！それが私である証拠だからだ！！……皐氣。君は何がしたいのか、よく分かりません。私が憎いのなら、殺せばいい！！それだけの事です」
「憎いさ。気が狂いそうなほど、お前が。だけど、それじゃ、やってる事がお前と同じだ」
血の流れが止まらない。意識が朦朧としてくる。俺は、ここで死

ぬのだろうか。それでも、やらなければならない事が、まだ残ってる。たくさん、まだまだ残っているのだ。

「さあ、殺せ！！憎いのだろう！さあ、殺せ！！」

狂ったようにそう叫ぶダイラに、皐氣は静かに銃を向け、撃った。鮮血が飛び散り、皐氣の頬を軽く染めた。本物の涙が、頬を伝い、流れた。悲しくもないのに、涙が止まらなかった。

「それでいい。……これで君も、犯罪者……だ」

それを最期に、ダイラはあっさりと事切れた。手の力が抜け、銃が床に硬い音を響かせて落ちる。足に力が入らなくなり、皐氣はその場に座り込んだ。犯罪者。その言葉が、彼の耳に焼き付いていた。罪を犯した、最低な者。ダイラを殺せば、溯羅が狂ってしまう事も分かっていたのに、彼は撃った。だが、それには、理由があった。信じていたのだ、溯羅の事を。心から。だから、狂う事はないと、思ったのだ。

「……犯罪者。……はは、考えもしなかった」

全身の力が抜けて、倒れこみそうだった。だが、無性に叫びたかった。悲しくて、辛くて、やるせなくて……。

苦しみにほえる皐氣の声は、部屋一杯に響き渡った。

＊

殺す事が仕事で、殺す事が好きだった。それは覆らない真実。偽りのない史実。彼に、他のものは何もなかった。そこにそっと手を差し伸べてくれたのが、栄井で、日陰から連れ出してくれた。殺す事だけだった彼に、光を分けてくれた。それは、小さな光だったが、たくさんの人の思いが詰まっていた。だから、暖かくて、愛しかった。何もない暗闇に燈った光は、眩しいほどに煌めいていた。

———憎しみだけじゃ、人は生きていけない。それだけじゃ、疲

れちゃう。だったら一緒に行こう

そう言って手を差し伸べてくれた事が、今も鮮明に浮かび上がる。息苦しい海底から引き上げられたかのような開放感。温かな日差し。彼の名、そのものだった。日向にいられる事の暖かさを、教えてくれたのは栄井だった。皆それぞれの言葉で、彼を受け入れてくれた。独りポツンと立っていた背中に、いつの間にか、背負えるものが出来ていた。護れる事の、強さを知った。

―――帰りを待ってくれてる奴がいる事は、確かだ。そいつらの期待を、願いを裏切る訳にはいかねぇんだよ

そう言った、強い瞳を覚えている。護ると決めた事を貫く心。真っすぐに伸びる道を、何の躊躇もなく進んでいける綺麗な心。どこまでも前を見続ける彼には、護るものが多かった。それでも彼は、重さを感じさせずに、進み続けていた。止まってしまえば楽なのに、彼は止まることを選ばなかった。約束を、願いを果たすために、常に前を見ていた。強い心は、挫けない心の証拠。曲がらない強さを持った精神は、どこまでも伸び続けるだろう。誰よりも心優しいのは、彼かもしれない。

彼らのことを考えると、ここで止まってしまっている自分を情けなく思った。彼らはどんな時でも、希望を忘れなかった。どんな状況でも信じる事を、貫き通した。だから、強く結ばれていた。だから、違う事がなかった。決めた道を進んで行くための、支えとなれたのだ。その輪の中に、溯羅自身も入っているのに、挫けかけていた。自分の心の弱さを、誤魔化そうとしていた。それじゃいけない。前を見ろ。ただ、ひたすらに―――。

「負けねぇよ。こんな命令、聞けっかよ。俺は、進むと決めたんだ。あいつらと。あいつらと同じ道を、進むって！！」

強かった命令信号が、少し弱まった気がした。機械も万能ではない。必ずどこか、欠点がある。人間と同じように。人でないからこそ、欠点があるのだ。

人も、万能ではない。だから、上を目指し、向上できる。欠点を

補おうと、必死に頑張れる。頑張る事が出来る。だが、機械は一線を越える事が出来ない。決められた範囲内でしか、動く事は出来ない。それを、哀れと思う。規則に縛られ、身動きが出来ないのだから。個性も発揮できずに、ただ使われて、棄てられてしまうのだ。人もその点では、同じかもしれない。劣っているほどに、置いていかれ、劣っているために棄てられる。それだけが全てではないのに、誰も本当のものを見ようとしない。そこにあり続けるだけで、邪魔者にする。この世界に、邪魔なものなんてないのに。

「邪魔……じゃないのか……」

そう、邪魔じゃないのだ。何もかも。どこか欠けているのなら、自力で補えばいいのだから。それでもだめなら、他人に力を借りればいい。何も、恐れる事はないのだ。自分自身も、埋め込まれた機械も。恐れるのは、暴走した野心だ。邪魔者を造ろうとする、汚い心だ。

「お前も、俺の一部なんだな……」

いつの間にか消えていた命令信号に、そっと呼びかけた。聞こえなくていい。溯羅に聞こえていれば、機械も聞いているだろう。何も、恐れる事はなかったのだ。機械を嫌うという事は、自分を認められない事。そういう事だったのかもしれない。機械は機械で、いい所があるように、人間も人間でいい所がある。だから、行き過ぎた命令はいらない。少しの命令と、少しの勇気があれば、それでいいのだ。

「ゴメンな、今まで分かってやれなくて」

床の冷たい感触を肌で感じながら、頭の中で響いている機械音に謝った。謝っても、謝りきれないかもしれない。それでも、気持ちがすっきりとした。

薄れ行く意識の中で、叫び声を聴いた気がする。とても悲しく、とても心を打つものだった。その声の主は、皐氣だった。そういえば、彼は先に進めたのだろうか。何故、叫んでいるのだろうか。今すぐにでも、彼の元に行きたいが、体が言う事を利かなかった。力

の入らない体は、鉛のように重かった。それでも、彼の元に、行かなければならない気がした。
「皐氣……」
ゴメン。少し、休ませてもらうぜ……。
力の抜けた体が、筋肉の緊張を緩める。行かなければならない気がしていたが、眠くなるのだ。閉じられた瞼に、泣いている皐氣の顔を見た気がした。

＊

「どうしたの？」
茜が、突然顔を上げたアリィに聞く。アリィは視線を動かさない。
「アリィ？どうしたの？」
やっと気が付いた彼は、眉を提げて、悲しそうな顔をしていた。
「誰かが、泣いてる。誰かの心、悲鳴上げてる」
「聞こえるの？誰のだか分かる？」
「聞こえるけど、誰のか、分からない」
悲しそうに言って、彼はすまなそうに頭をもたれた。そんな彼を、茜はそっとなでてやった。茜も、彼と同じ気持ちだった。悲鳴が聞こえた訳じゃないのに、心のどこかが、それを聞きつけたのだ。ふと浮かんだ顔が、皐氣だった。酷くやつれて、悲しそうだった。そんな訳ないと、頭から追い出そうとするのに、へばりついて消えようとしない。余計に心配になった茜は、助けを求めるように、アリィを抱き寄せた。
緋搗は、膝に栄井の頭を乗せたまま、唇を噛んでいた。すぐにでも、彼らの後を追い掛けたかった。好きだからではなく、心配だった。大切の人の心が乱されてしまっている気がして。抑えようのない負の感情に、飲み込まれてしまう気がして。

「皐氣……。アンタは、無事だよね」
思わず出た言葉に、自信が持てなかった。

15、　変わる時代

彼女は、しゃがみ込んで叫んでいる青年を、冷たく見下していた。人の心とは、こんなにも脆い。だから、彼女は嫌いだった。不必要なものだと思った。心があるから、挫けてしまう。心があるから、崩れてしまう。心があるから、絶望を知る。そんなもの、持たなければ良いのにと、彼女は思っていたが、それはいつの間にかあるもので、造らないようにする事は、難しい。初めから、心のない人間などいないのだ。だから、人は簡単に破滅するのだ。この、青年のように。

「先に進むのではなかったのですか？ここはまだ、一番上ではありません。先がありますよ、総司令部が」

冷徹な言葉を青年に浴びせると、彼は静かになって、顔を上げた。涙で汚れた顔が、醜かった。

「約束を果たすため、貴方は進んできたと聞きましたが。こんなものなのですね、貴方の決意というものは」

「……」

「進む気がないのなら、仲間のもとに、お帰りなさい。その代わり、もうここに入る事は禁じます。もし、まだ進む気があるのなら、そこにさらに先へと続くエレベーターがあります。行く気があるのなら、行きなさい」

彼女が指差した方向には、今までなかった扉が出現し、青年を待つかのようにそこに在った。

「進むか否か、決めるのは貴方ですよ、皐氣翠」

そう言い残し、彼女は去って行った。

＊

自分がここまで来れたのは、友の存在がいつもあったからだ。隣でそっと、支えていてくれたからだ。倒れそうになる彼を、一生懸命に支えてくれていたからだ。隣でいつも、心配ないと笑っていてくれたからだ。

だが、今ここに、その存在はない。この世に、ない。だが、進んで欲しいと、彼は言っていた。止まらないで欲しいと、言ったのだ。だが、自分は進む事が出来なくなっていた。友がいないために、支えてもらえず、そのまま倒れてしまった。独りに、なってしまった。それが嫌で、悲しくて。でも、心のどこかで、まだ行けると声がしている気がした。深い闇にささやかに光る、微弱な光だ。でも、それは暖かくて、優しくて。そう、まるで栄井のようで。心の中で、いつも彼に頼っていた気がする。彼の苦しみも、何も知らずに、ただ肩を預けていた気がする。だから、独りになった自分は、こんなにも脆く、弱い。そんな自分が、情けなくなった。

進むと言ったはずだ、彼に。止まらないと約束したはずだ、友に。諦めないと誓ったはずだ、自分の心に。なのに、自分はここで何をしている。

進まなくては、真っすぐに。真っすぐに――――。

「俺は……」

勇気をくれた人達の為にも、支えてくれた人達の為にも、ここで止まる訳にはいかない。歩き続けると、心に誓ったのだ。あと、一歩でいい。進む為に、もう一度、力を。変える為に、もう一度、勇気を。約束の為に――――。

「俺は、……止まらない」

真っすぐ前を見た彼の目に、あの扉が映る。最後の扉。あの扉を超えれば、きっと約束は果たせる。願いを果たせる。最期にした約束を、破らずに進めるのだ。行かなくてはいけない。この塔の、一番上に。アステレイア達の待つ、総司令部へ。

痛む体を引きずって、扉へ近付くと、それは彼を受け入れるかの

ように開き、彼が中に入った途端に閉じた。そして、ゆっくりと上昇し始める。もう、恐れるものはないはずだ。絶対に。
さあ、この機械仕掛けの世界に、終止符を打つ運命(とき)が来た。

＊

次に扉が開かれた時、まず目に飛び込んできたものは、大きな柱だった。それは、人の脈のように電気が走り、鼓動していた。紅の光は、まさに血のようだった。ここが、総司令部。神の領域の、一番上。アステレイア達のいる、機械の居場所。
恐る恐る、一歩踏み出て、エレベーターから出ると、それはゆっくりと閉じられた。もう、戻れない。戻らない。真っすぐ前を向いた彼の瞳に、迷いはなかった。
一歩一歩進んでいくうちに、数々の思い出がよみがえりは消えていく。強気でも、優しい心を忘れない茜。言葉を取り戻しつつあり、気持ちの真っすぐさには敵わないアリィ。いつも心で、思ってくれていたであろう緋搗。優しく、志の真っすぐな栄井。あの笑顔は、みんなの笑顔が力をくれる。だから、もう止まらないで進めるのだ。
「やっと来ましたね、翠」
久しぶりに聞くアステレイアの声は、何処か母に似ていると気付いたのは、この瞬間だった。母が創ったのだ。似ていて問題ないだろう。ゼウスの声は聞い事がないが、きっと父そっくりなのだろう。そう、勝手に思っていた。
「もう、全システムに通達してあります。機械の時代は終わると。これからは、人による人の為の、世の中になっていく事でしょうと」
「……そうか」
嫌にあっさりと機械の時代が終わる事を認められて、少し皐氣は驚いた。映像として現れたアステレイアは、悲しそうな顔をしてい

た。
「私を止めたいのなら、止めればいいでしょう。ですが、本当に私を止めたら、この世界は混沌の中へ落とされてしまいますよ。それでも、いいのですか？」
「それでも、構わないさ。人は、人の生きる道を見つけるから」
「私達が生きる為の糧と待っている方達は、どうなります？生きる希望を、見失ってしまうのですよ？」
「そしたら、他の生きる希望をくれてやるさ。俺が絶対、失望なんかさせねぇよ」
「貴方が、私達の代わりになると？」
「代わりになんかならない。自分で、自分らしい道を決める。人の造った道なんかいかねぇよ」
「そうですか……。そこまで決意が固いのでしたら、機械の私達に貴方の考えを覆す事は、出来ないでしょう。大人しく、プログラムの終了を、待つとしましょう」
アステレイアの映像はかすれるように消え、声も聞こえなくなった。もう、目の前には、あの柱がそそり立っていた。それにそっと触れてみると、キーボードがでてきた。始めて見るはずなのに、何だか懐かしい気がしたのは何故だろう。昔、見た事があったような気がした。
それが記憶の箱の鍵になったかのように、一気に一つの映像が走馬燈の様に駆け巡った。
それは、まだ皐氣の幼い頃。やっと立って歩けるようになった頃の記憶だ。彼は、両親の働く姿を見ていた。その場所は、ここだった。一寸のブレもない。この柱を前にして、父は、何かを操作していた。そして、隣に立っている母は、こう皐氣に言ったのだ。
「いつか、貴方がここに来る時があったら、お父さんみたいに立ってこう言うのよ」
優しい母の横顔は、その時何故だか悲しそうな顔をしていた気がする。

「『我、汝の敵となりし時に、破滅を呼ばん。一つは、人の世の為に。一つは、この世界の為に』」
「なあに、それ？」
「覚えられなくてもいいの。今は、ね。大切な時にきっと、思い出せるから」
優しく笑いかけた母は、小さい頃の皐氣ではなく、今ここに居る皐氣を見ていた気がした。
もしかしたら、両親は知っていたのかもしれない。この世界が、進化しすぎる事を。そしてそれを止める為に、皐氣がここに来る事も。全て、彼らの手の内で決められた事だったのかもしれない。そしたら、これは決められた運命だったのだろうか。皐氣が、自分で選んだ道ではなかったのだろうか。
そう考えたら、急に笑いたくなってきた。決められた道を歩かないと言ったはずなのに、もう自分は人に敷いてもらった道を歩んでいた事になるのだ。両親の掌で、皐氣は踊っていただけなのだ。結局は、誰かに頼らないと、皐氣は歩いていけないのだ。
「ばかだなぁ……俺って」
もう、何が何だか分からなくなってしまったが、まず、この機械を止めなくてはならない。両親の残した、この機械を。
「我、汝の敵となりし時に、破滅を呼ばん。一つは、人の世の為に。一つは、この世界の為に」
初めて言ったはずの言葉が、すんなりとスラスラ言えて、皐氣は不思議に思った。もしかしたら、気付かぬうちに覚え、どこかで言っていたのかもしれない。自然と出た言葉に従うように、柱の脈動が小さくなっていく。死んでいく人のように、次第に弱くなっていく。止まりそうなほどに、弱くなった、その刹那。
部屋のモニター全てに、映像が映し出された。それは、皐氣の馴染み深い人であり、育ててくれたものの姿だった。両親は肩を寄せ合って、嬉しそうにこちらに向けて微笑みかけていた。皐氣は、言葉がでなかった。

「翠、お前がこの映像を見ている頃、俺達はその世界にいないだろう。だけど、これを見ていてくれなければ、意味がない、儚いメッセージだ」
「翠、貴方とは、もっとお話してみたかったわ。洋服の事とか、学校の事とか……彼女の事とかもね」
いたずらっぽく笑う母は、最期に見た時の笑顔、そのままだった。逞しい父の腕に抱かれて、少し恥ずかしそうでもあった。
「これを見ているのが翠じゃないとしても、ここに来てくれた、それだけで感謝する。……もし、翠ならば、謝らせて欲しい。ゴメンな。お前を独り残して、先に逝ってしまって。寂しかっただろう？独りにしてしまって、本当にすまなかった」
「でも、これだけは忘れないで、翠。私達は貴方の事を、心から愛しています。心から、大切に想っているわ。……周りの人達みんなが、私達を忘れたのは、私達がした事なの。そうしないと、貴方を護る事が出来なかったから。ごめんなさい。本当に、ごめんなさい」
ぶれる画面の中で、母は泣いていた。だが、凛と立ち続け、真っすぐに皐氣の瞳を見続ける。温かな目が、彼を見守っていた。
「翠、貴方の事は誰にも言っていなかったの。貴方の身に危険が及ばないように。そうしないと、神の領域が、貴方を取り上げに来ていただろうから。ここは、私達の持つ才能を、もっと欲しがっていた。だから、子供が生まれるのを待ち通しにしていたの。
だけどね、母さん、貴方までこの世界に入ってきて欲しくなかったの。だから、誰にも何も言わないで、貴方を生んで、そのまま逃げてきちゃったの。だから、滅多に家に帰れなかったのよ。寂しい思いをさせた事を、本当に悔やんでいるわ」
「父さん達は、護りたかったんだ、大切な一人息子を。頭でしか考えられない俺達でも、お前の事になると、必死に考えた。護る為には、必要な事はなんだろうってな。その為に、お前を苦しめたんだよな。親らしい事を、一つもしてやれなくて、本当に悪かった」

「……そんな事ない、よ。親父。母さん」
震える手で、目の前のモニターに触れる。歪んだモニターから、暖かさが伝わってきた。ほのかに暖かいそれは、本当に肌に触れているかのようだった。
「もう、時間がないな。……翠。大きくなったお前と、酒が飲めない事を残念に思うよ。くだらない事を話して、一日中を過ごしてみたかったな」
「母さんは、傍に貴方が居てくれるだけで嬉しいわ。貴方の可愛らしい笑顔を思い出すだけで、幸せになれるもの」
母は、父の方に頭を預けながら、本当に幸せそうに言った。耐え切れない涙腺が、次から次へと大粒の涙を流していく。必死に我慢していた嗚咽が、どうしてもでてしまう。悲しいのではない。こんなに想われていた事が、純粋に嬉しかったのだ。
「親父……母さん……」
狂おしいほどに、急に彼らを愛しく思った。この手でもう一度、彼らに触れたい。この耳でもう一度、彼らの声を聞きたい。録音された言葉でない、言葉を。
「最期に一つだけ、言わせてくれないか」
互いの目を見て、頷き合って言った。
「私達のところに生まれてきてくれて、有難う」
ニッコリと笑った彼らを最後に、映像は切れた。まだ、耳に余韻が残っている。彼らの、暖かな声の余韻が。
有難う。ただそれだけの言葉なのに、こんなに涙が出た事はあっただろうか。たった一言の、飾らない言葉で、こんなに泣けるものなのだろうか。こんなに、嬉しいものなのだろうか。
皐氣は、心に残る両親の言葉を抱いて、柱に背を向けた。これ以上ここに居ては、絶対にここを離れられなくなる。両親の真心の残る、この場所に。たった数年だけしか一緒にいられなかったが、たくさん愛してくれた両親に、心の中で、別れを言った。
「……有難う」

エレベーターに乗り、扉が閉まる瞬間に、そう言った。切られた総司令部の部屋が、悲しかった。狭い箱の中で、皐は涙を拭き取った。

＊

倒れていた青年を蹴る足がある。頭をこつこつと叩き、次第に強くなっていく。五月蝿い。邪魔だ、寝かせろよ……。

「起きろぉ、溯羅。死んだか？」

どこかで聞き覚えのある声。だが、少し声がかすれているようだ。たくさん叫んだ後のようにかすれている。だが、どこか懐かしい声だった。

「置いてっていいか？お～い、溯羅。知らねぇぞ、風邪引いたって」

「……」

「もう知なねぇぞ、お前はそこでへばってろ」

「……」

「……無視か？」

だんだん鬱陶しくなってきた。矢鱈としつこい。

「シカトしてんのか？」

「……うっせぇな」

痺れを切らせて起き上がってみると、そこには皐氣がいた。少し目が充血しているようだったが、彼だった。それに、怪我をしているようだ。血の臭いがする。

「やっと起きたか。ほら、行くぞ」

「……どこに？」

まだいまいちさえない頭を使って、あれこれ考えてみた。そういえば、機械音がしない。故障だろうか。いや、それはない。だとし

たら。
「どこへって―――」
「お前、アステレイア達を止めたのか！？」
一気に覚醒した頭は、それで一杯になった。
「っつてぇ～！！」
皐氣の肩を掴んで揺すぶると、彼は叫んだ。
「ってぇな、てめぇ。分かってやってたら、容赦しねぇぞ！！」
「あ……ゴメ」
パッと離した手に、血が付いていた。自分の血ではない、皐氣の血だ。
「お前……傷だらけじゃねぇか」
よく見れば、目の前にいる皐氣はボロボロだった。特に、左腕の傷は酷い。早く処置しなくては、使えなくなるかもしれない。
「ダイジョブだよ」
「何所が大丈夫なんだよ！！」
「今はいいんだ。それより、先に言って奴らを安心させてやらないと、な？」
溯羅にとっては、とても大丈夫には見えなかったのだが、本人が先に進もうと何度も言うので、仕方なく折れた。だが、血を見て彼らが失神してしまっても困るので、左腕の傷だけは、溯羅が簡単に処置しておいた。

＊

階段を下りてくる足音が二つ。それに茜達は身を強張らせた。皐氣達かもしれないが、敵の可能性だってある。だから、油断は出来なかった。じっと階段を見つめていると、会いたかった人物の姿が現れた。

「皐氣！！」
茜は思わず叫んで、彼に向かって走っていた。また会えると、正直思っていなかった。だから、余計に嬉しかった。
「おうっ！」
抱き疲れた皐氣は皐氣で、それなりに驚いているようだった。
「お前、足は？」
「え？……いたた！！」
足の怪我の事を、すっかり忘れていた。急に走ったせいで、止まっていた血が、再び流れ出してしまった。慌てて押さえるが、痛くても、何だか笑ってしまった。
「俺はどうでもいいのかよ」
すねたような口を利く溯羅に、茜と同じように飛び込んだのは、アリィだった。
「お帰り」
その一言だけなのに、とても嬉しくなった。
「……ただいま」
そっとその頭を撫でてやると、アリィは嬉しそうに目を細めて、溯羅を見上げていた。
そんな二人を見て、緋搗は彼らが羨ましくなった。自分も、出来れば皐氣に抱きつきたかった。心配したのよと、声を掛けて。だけど、そこまで彼女は強くなかった。気持ちを抑えるので精一杯だった。還ってきてくれた喜びと、謝らなくてはいけない事が混ぜこぜになっていた。
「緋搗」
彼女を名を呼ぶ、愛しい声がする。顔を上げると、彼が彼女に向けて、微笑んでいてくれた。どこか切ないが、暖かい笑顔だった。
「……帰ろうぜ。俺達の町に」
その一言が嬉しくて、申し訳なくて。本当は、自分に向けられるはずのない、言葉だったはずだ。これを聞くのは、彼女の膝で眠っている、栄井のはずだ。私に向けられた言葉じゃない。そう思うと、

切なくなった。
「行こうぜ、緋搗」
いつの間にか俯いていた彼女に、皐氣は手を差し伸べていた。血で汚れた手が、痛々しかった。その手を緋搗は、取る事が出来なかった。唇を噛んで、下を向き続けた。
「終わった事は、気にするな。……って言っても、無理か。俺も、悲しいから」
「皐氣……私――――」
「もう、何も言わなくていい。いいよ、もう」
そっと頭に置かれた手が、冷たかった。もう、この溝は、埋められないのだろうか。そしたら、悲しいと思う。
「行くぞ、皐氣」
溯羅が、両手を茜とアリィに引っ張られながら言った。
「ああ、今行く」
彼にそう叫んで、皐氣は緋搗の肩を掴んで、無理やり立たせた。そして、その両頬をつまんで言った。
「メソメソ考える質じゃないだろ。くよくよしない質だろ。俺を励ましてくれるのは、お前だっただろ。強気のお前でいろよ。じゃねぇと、気が狂っちまう」
前よりも、何だか優しくなった気がした。前から優しかったが、もっと、こう、包み込んでくれるような暖かさになっていた。けれど、笑った顔は、変わらなかった。
「そうだね。……そうだよね」
「栄井の分まで、俺らは生きなくちゃいけない。この世界を」
眠っていたはずの栄井の顔が、笑ったように見えたのは、私だけだろうか。

――――数年後――――

朝陽は今日も彼らを照らし、さんさんと輝いていた。暖かな陽気に包まれて、外では笑う少年達の声が聞こえる。とても楽しそうで、明るかった。テレビニュースで、もう機械関連の事は、報道されなくなった。新聞は、まだ一部で騒ぎ立てているが。『消えたシステム』、『潜む犯罪者の影』。そのような見出しが大きく踊っていた。だが、もう誰も興味を示さなかった。人とは忘れやすい生物で、便利に出来ていた。嫌な事があったら、すぐに忘れる。大切な事でもあり、どこか悲しいものでもあった。

青年は一人、ブラブラと散歩をしていた。何所にも行くあてはない。ただ、自分の気がすむままに、その道を進んでいた。昔だったら、手首についているものが、警告を告げていただろう。だが、今この時代に、それはない。掃除用のロボットも、子供の遊び相手用のロボットも、全ていつの間にか消えていた。気が付けば、人間だけが、世界には残されていた。

「こっち、こっちぃ！！」

「待ってよぉ」

子供達が、彼の横を通り過ぎる。最後の一人が、彼にぶつかった。

「あ、ご、ごめんなさい……」

彼は笑って答えた。すると、そのこは安心したかのように頬の緊張を緩め、先を行く友の背中を追って走っていった。とても微笑ましい、日常の光景だった。

あてもなく歩いていたはずなのに、彼は墓地を訪れていた。そこに、真新しい墓があった。刻まれた名は、彼の友人の名だ。供えられた花は、もう、枯れかけていた。

「……おい、見てるか。この世界を。お前が望んだような世界になってるか？お前が俺に託した夢は、これでよかったんだよな。……そうだよな———」

枯れた花の変わりに、新しい花を添える。物寂しげに見えた墓標が、一瞬にして華やかになった。線香をたき、去ろうとした彼の背

中に、強い風が吹く。思わず後ろを向いてそれを防ぐと、死んだはずの友がいた。彼は笑っていた。手を振って、口を動かしていた。

「あ、り、が、と、う」

その口の動きに合わせて言うと、一つの言葉が出来上がった。もう、何度も言われた言葉。その言葉が伝わったのを確認して、大切な友の姿は、風にまぎれて消えていった。

もう、驚く事もなくなっていた。時々、見る事があるからだ。恐くなんてない。この世界で生きている限り、彼は恐いものはないだろう。ただ一つあるとしたら、チーズと言ったところか。

「今日も、よく晴れてるな」

空に向かって、青年は大きく伸びをしながら言った。変わらない、清々しい風は、彼を包み込み、明日へと誘う。例え大切な仲間を失ったとしても、明日を夢見る事は、生きていくという気持ちは変わらない。この流れていく、人の命の時間を刻み込んで。

エピローグ

この話を信じるか、信じないかは、呼んでいるものに任せよう。例え嘘だと思っても、人の一生は、無駄にしないで欲しい。かけがえのないこの一瞬一瞬を、大切に生きて欲しいと思う。流れた時間は、もう戻らない。過ぎ去った時代も、もう戻らないのだ。戻そうとするものが、現れない限り。

今この世に、疑問を持ってら、動く事が大切だ。それは、変わらない真実だという事を、覚えていて欲しい。時に、人の時代の波に流される事があるだろう。時に、独り置いてけぼりにされる事も在るだろう。だが、それに逆らう事だけが、いい事ではない。何者かの支配にされている、そう思った時に動くのだ。無駄に動けば、戦争が起こる。無駄に逆らえば、反逆者扱いをされる。

この話は、ただ運が良かっただけの話かもしれない。それでも、その時を必死に生き抜いた人の気持ちに偽りはない。嘘だ、出鱈目だと非難されても構わない。自分だって、信じられなかったのだから。

人が動く時、時代も変わろうとする。それが、偉大な働きでなくても、そうなのかもしれない。周りの変化も、時代の変化といっていいだろう。まず初めは、大きくなくていいのだ。小さな事の積み重ねでいい。いろいろと考えてから動く事も大切だが、時には無鉄砲でもいいのかもしれない。ぶつかった壁に、倒れる事無く進める決意があるのなら。助け起こしてくれる、大切な存在が傍にあるのなら。

そう、例えるなら、この物語の主人公のように。真っすぐであり続ける心を持てたら、先へ進め。自分だけの世界を、切り開け。そして止まるな、自分が死ぬその瞬間まで。真っすぐに、綺麗な心で在れ。そしたらきっと、自然と道は切り開けているだろう。

さあ、進め！自分の道に。止まる事は許されない。自分の道へ―

|
|。

エピローグ（後書き）

この作品を、呼んでくださった皆様。最後まで読んでいただき、有難うございました！あまり長くなかったような、長かったような……。そんな中途半端なものでしたが、最後まで読んでいただき、本当に有難うございます！！

また、私が書いた作品でお会いしましょう！！本当に、最後まで付き合っていただき、有難うございました！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8720c/

機械仕掛けの世界

2010年10月12日16時27分発行